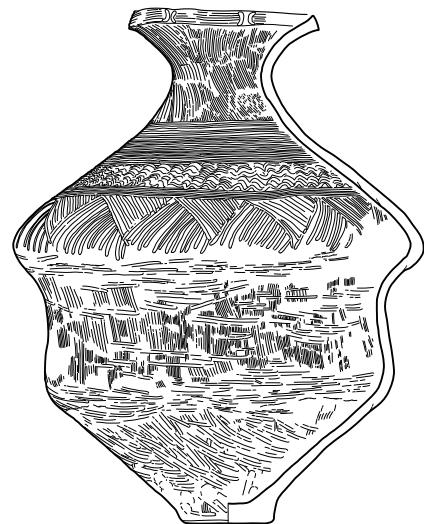


沼津市文化財調査報告書 第126集

中原遺跡発掘調査報告書

新貨物ターミナル第1号緑地調整池築造に係る発掘調査

弥生時代・古墳時代編



2023

沼津市教育委員会

沼津市文化財調査報告書 第126集

中原遺跡発掘調査報告書

新貨物ターミナル第1号緑地調整池築造に係る発掘調査

弥生時代・古墳時代編

2023

沼津市教育委員会



中原遺跡より浮島ヶ原と富士山を望む



中原遺跡と千本砂礫州（西から）



第1号方形周溝墓検出状況



第1号方形周溝墓出土遺物



第 2 号方形周溝墓出土遺物



第 3 号方形周溝墓出土遺物

例　言

- 1 本書は静岡県沼津市一本松他に所在する中原遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、鉄道施設移転事業に伴い、沼津駅周辺整備部整備課より依頼を受け、予定地内に分布する埋蔵文化財の記録保存を目的として実施した。
- 3 現地調査は、平成29年6月から平成30年3月、及び令和2年1月から令和2年3月の2回にわけて実施した。資料整理は、令和3年4月から令和5年3月まで実施し、いずれも沼津市教育委員会事務局文化振興課が担当した。
- 4 調査関係者は以下のとおりである。

調査主体者 沼津市教育委員会	教　育　長	服部裕美子 (H29～R1)
		奥村 篤 (R2～R4)
沼津市教育委員会事務局	教　育　次　長	山田 昭裕 (H29)
		芹澤 一男 (H30～R2)
		山本 貴史 (R3～R4)
事業担当者 文化振興課	課　　長	中島 康司 (H29)
		原 将史 (H30～R1)
		森 剛彦 (R2)
		林 敬博 (R3～R4)
	課 長 補 佐	鶴田 晴徳
		杉山 好永 (H29～R2)
		板倉 広子 (R3)
		齋藤 大輔 (R4)
調査担当者 (平成29年度)	文化財調査係長(兼)	鶴田 晴徳
	学　芸　員	谷口 哲也
	学　芸　員	小林晃太郎
調査担当者 (令和元年度)	文化財調査係長	小崎 晋
	学　芸　員	小林晃太郎

- 5 整理事業の担当者は以下のとおりである。

整理担当者 (令和3年度)	文化財調査係長	小崎 晋
	学　芸　員	小林晃太郎
	会計年度任用職員	薩川 千明
	会計年度任用職員	山本 宏子
整理担当者 (令和4年度)	文化財調査係長	小崎 晋
	学　芸　員	小林晃太郎
	会計年度任用職員	鈴木 史子
	会計年度任用職員	薩川 千明
	会計年度任用職員	植田小百合

- 6 資料整理の実務は沼津市文化財センターで実施し、本書の執筆は、第IV章第3節を小崎が担当し、それ以外は小林が担当した。全体の編集作業は小林の指示のもと鈴木が担当した。
- 7 現地調査における基準点測量・測量監理業務については、株式会社シン技術コンサルに委託した。
- 8 現地調査で得られた測量データは、沼津市が所有する遺跡管理システムに取り込み、同システム上で編集・図版作成を行った。本業務については、株式会社シン技術コンサルに委託した。
- 9 空中写真撮影については、株式会社フジヤマへ委託した。
- 10 遺物実測については、株式会社ラングに遺物写真実測業務として委託した。
- 11 金属製品の保存処理については、株式会社吉田生物研究所へ委託した。
- 12 第V章に記した自然科学的分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
- 13 本報告書の執筆にあたり、以下の各氏よりご指導及びご教授をいただいた。記して感謝の意を表す。
(五十音順・敬称略)
井口美奈 石川日出志 岩木智絵 北村晃寿 蔵本俊明 小泉祐紀 佐藤祐樹 篠原和大 滝沢誠
竹元圭介 藤村翔 毛利舞香 渡井英誉
- 14 本書に係わる発掘調査の記録類及び出土遺物は、沼津市教育委員会事務局文化振興課（沼津市文化財センター 〒410-0106 沼津市志下530）で保管している。

凡 例

- 1 方位は国家座標の真北方位で、座標値は世界測地系に準拠している。標高は、東京湾の平均海面を基準とした海拔高である。
- 2 遺構の略号は次のとおりである。遺構実測図の縮尺については、各図にスケールを表示した。
HD：方形周溝墓
SZ：古墳
- 3 出土遺物実測図の縮尺については以下のとおりである。
土器(完形) : S=1/4
土器(破片) : S=1/3
金属製品 : S=1/2
- 4 遺物出土状況図は出土位置の座標を記録した遺物のみ記載している。
- 5 遺物出土状況図で示した挿図番号と出土遺物実測図に示した番号は同一である。また遺物出土状況図には、遺構断面図に出土した座標をドット図として併せて掲載した。
- 6 土層・土器胎土の色調・記号は、『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局・(財)日本色彩研究所に基づいて記載し、計測は土色計(SCR-1 第一合成株式会社製)を用いた。
- 7 方形周溝墓計測表における残存値には()を付して表記した。
- 8 遺物観察表における推定値・復元値・残存値には()を付して表記した。
- 9 本遺跡で用いる時期区分は佐藤由紀男氏、萩野谷正宏氏、篠原和大氏による「遠江・駿河地域」の「東駿河様式」を用いる(佐藤・萩野谷・篠原 2002)。なお、本文中に別様式の名称を記載する場合には、時期区分に該当地域名を冠して記載する。 例) 西駿河IV-3期
- 10 本報告書で用いる出土遺物についての記述は、以下の文献を参考とした。
加納俊介・石黒立人編 2002『弥生土器の様式と編年 - 東海編 -』木耳社
三島市教育委員会 1999『長伏六反田遺跡』
函南町教育委員会 2022『寺尾原遺跡第7地点 「湯~トピアかんなみ」建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
藤枝市教育委員会 1992『清水遺跡 吐呂川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

目 次

卷頭カラー図版

例言

凡例

第Ⅰ章 発掘調査に係る経緯

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の経緯と調査区分	3
第3節 現地調査の経過	4
第4節 整理事業の経過	4

第Ⅱ章 位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境	7
第2節 周辺遺跡と歴史的環境	9
第3節 遺跡の層位	14

第Ⅲ章 調査結果

第1節 遺構の概要	15
第2節 第1号方形周溝墓と出土遺物	17
第3節 第2号方形周溝墓と出土遺物	28
第4節 第3号方形周溝墓と出土遺物	35
第5節 古墳時代の遺構と遺物	42

第Ⅳ章 調査成果

第1節 調査成果と課題	44
第2節 中原遺跡の方形周溝墓について	44
第3節 周辺地域にみる中原遺跡方形周溝墓の位置付け	48

第Ⅴ章 自然科学的分析

写真図版

報告書抄録

卷頭カラー図版目次

図版 1 中原遺跡より浮島ヶ原と富士山を望む
中原遺跡と千本砂礫州（西から）

図版 2 第1号方形周溝墓検出状況

第1号方形周溝墓出土遺物

図版 3 第2号方形周溝墓出土遺物

第3号方形周溝墓出土遺物

挿図目次

第 1 図	事業対象地位置図	1
第 2 図	調査区位置図	2
第 3 図	遺跡位置図	8
第 4 図	周辺地質図	9
第 5 図	周辺遺跡分布図	10
第 6 図	標準土層位置図・柱状図	14
第 7 図	中原遺跡遺構全体図	15
第 8 図	時期別遺構配置図	16
第 9 図	方形周溝墓計測模式図	17
第 10 図	第1号方形周溝墓平面図・断面図	18
第 11 図	第1号方形周溝墓土層断面図	19
第 12 図	第1号方形周溝墓主体部平面図・断面図	21
第 13 図	第1号方形周溝墓遺物出土状況図	22
第 14 図	第1号方形周溝墓出土遺物実測図（1）	23
第 15 図	第1号方形周溝墓出土遺物実測図（2）	24
第 16 図	第1号方形周溝墓出土遺物実測図（3）	25
第 17 図	第1号方形周溝墓出土遺物実測図（4）	26
第 18 図	第2号方形周溝墓平面図・断面図	28
第 19 図	第2号方形周溝墓土層断面図	28
第 20 図	第2号方形周溝墓主体部平面図・断面図	30
第 21 図	第2号方形周溝墓遺物出土状況図	31
第 22 図	第2号方形周溝墓出土遺物実測図（1）	32
第 23 図	第2号方形周溝墓出土遺物実測図（2）	33
第 24 図	第2号方形周溝墓出土遺物実測図（3）	34
第 25 図	第3号方形周溝墓平面図・断面図	35
第 26 図	第3号方形周溝墓土層断面図	36
第 27 図	第3号方形周溝墓主体部平面図・断面図	37
第 28 図	第3号方形周溝墓遺物出土状況図	38
第 29 図	第3号方形周溝墓出土遺物実測図（1）	40
第 30 図	第3号方形周溝墓出土遺物実測図（2）	41

第31図	第1号墳平面図・断面図	42
第32図	第1号墳出土小刀実測図	42
第33図	第2号墳平面図・断面図	43
第34図	第2号墳礫床平面図・断面図	43
第35図	方形周溝墓復元全体図	45
第36図	中原遺跡と周辺主要遺跡の方形周溝墓規模比較	46
第37図	中原遺跡出土土器の時期的位置付け	47
第38図	中原遺跡方形周溝墓の変遷	48
第39図	遺跡の継続期間と自然災害	52

挿表目次

第1表	調査区一覧表	3
第2表	現地調査・資料整理工程表	5
第3表	周辺遺跡一覧表（1）	11
第4表	周辺遺跡一覧表（2）	12
第5表	方形周溝墓計測表	17
第6表	第1号方形周溝墓出土遺物観察表	27
第7表	第2号方形周溝墓出土遺物観察表	34
第8表	第3号方形周溝墓出土遺物観察表	41
第9表	第1号墳出土小刀観察表	42

写真図版目次

PL. 1	調査区全景空撮（北から）	
	第1号方形周溝墓 検出状況（南東から）	
	第2・3号方形周溝墓 検出状況（北東から）	
PL. 2	作業状況（1）	
	作業状況（2）	
	第1号方形周溝墓 南溝砂礫堆積状況（西から）	
PL. 3	第1号方形周溝墓 全景（南西から）	
	第1号方形周溝墓 東溝完掘（南から）	
	第1号方形周溝墓 西溝完掘（南西から）	
PL. 4	第1号方形周溝墓 南溝完掘（西から）	
	第1号方形周溝墓 北溝完掘（北西から）	
	第1号方形周溝墓 東溝土層断面（南から）	
PL. 5	第1号方形周溝墓 西溝土層断面（南から）	
	第1号方形周溝墓 南溝土層断面（東から）	
	第1号方形周溝墓 主体部検出状況（西から）	

PL. 6	第1号方形周溝墓	主体部完掘（東から）
	第1号方形周溝墓	土手状盛土残存状況（南東から）
	第1号方形周溝墓	遺物出土状況
PL. 7	第1号方形周溝墓	東溝遺物出土状況（南東から）
	第1号方形周溝墓	東溝遺物出土状況（近景）（1）
	第1号方形周溝墓	東溝遺物出土状況（近景）（2）
PL. 8	第1号方形周溝墓	東溝遺物出土状況（近景）（3）
	第2号方形周溝墓	主体部完掘（南西から）
	第2号方形周溝墓	東溝完掘（北から）
PL. 9	第2号方形周溝墓	西溝完掘（北から）
	第2号方形周溝墓	北溝完掘（西から）
	第2号方形周溝墓	東溝土層断面（北から）
PL.10	第2号方形周溝墓	西溝土層断面（北から）
	第2号方形周溝墓	北溝土層断面（東から）
	第2号方形周溝墓	東溝遺物出土状況（北東から）
PL.11	第2号方形周溝墓	東溝遺物出土状況（近景）（1）
	第2号方形周溝墓	東溝遺物出土状況（近景）（2）
	第3号方形周溝墓	全景（南東から）
PL.12	第3号方形周溝墓	東溝完掘（北から）
	第3号方形周溝墓	西溝完掘（北から）
	第3号方形周溝墓	北溝完掘（西から）
PL.13	第3号方形周溝墓	東溝土層断面（北から）
	第3号方形周溝墓	西溝土層断面（北から）
	第3号方形周溝墓	北溝土層断面（西から）
PL.14	第3号方形周溝墓	主体部完掘（北東から）
	第3号方形周溝墓	北溝遺物出土状況（1）（北西から）
	第3号方形周溝墓	北溝遺物出土状況（2）（西から）
PL.15	第3号方形周溝墓	北溝遺物出土状況（3）（南東から）
	第3号方形周溝墓	北溝遺物出土状況（近景）（1）
	第3号方形周溝墓	北溝遺物出土状況（近景）（2）
PL.16	第3号方形周溝墓	北溝遺物出土状況（近景）（3）
	第2号墳 檢出状況（北東から）	
	第2号墳 磨床検出状況	
PL.17	出土遺物（1）	
PL.18	出土遺物（2）	
PL.19	出土遺物（3）	
PL.20	出土遺物（4）	

挿写真目次

写真 1	現場設営	6
写真 2	測量作業	6
写真 3	篠原和大氏現地指導風景	6
写真 4	重機による埋戻し	6
写真 5	遺物分類・接合作業	6
写真 6	実測作業	6
写真 7	トレース作業	6
写真 8	原稿執筆作業	6

第Ⅰ章 発掘調査に係る経緯

第1節 調査に至る経緯

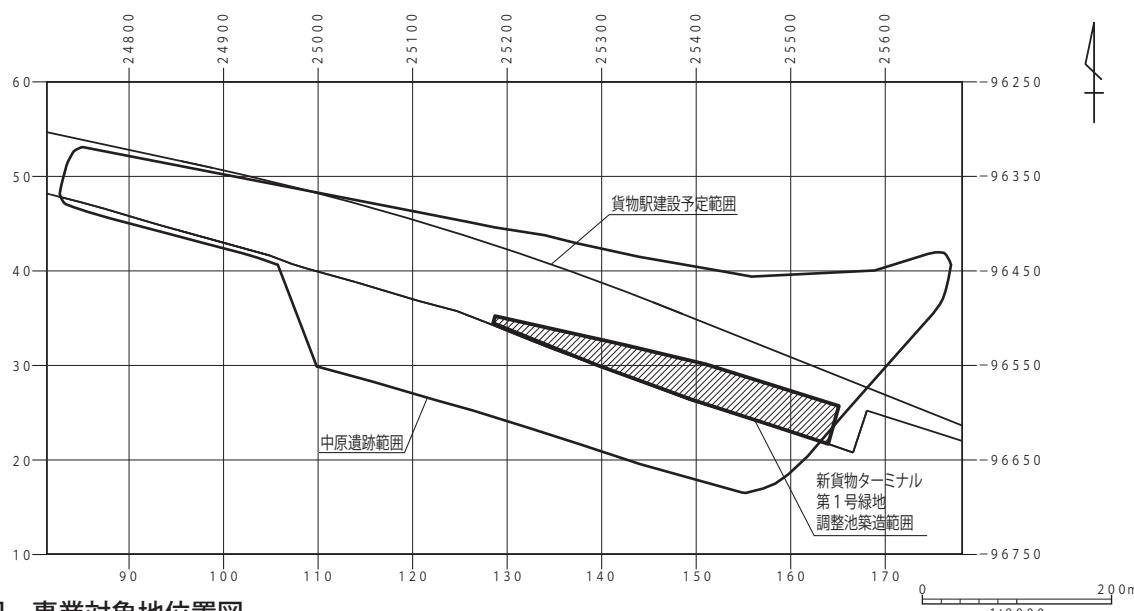
沼津市は駿河湾の最奥部東側に位置し、県東部の中心的な街として発展してきた。しかし近年では交通環境や物流システムの変化、郊外への大型店の進出により中心市街地の空洞化が進行している。

このような状況の中、沼津市は「人と環境を大切にする県東部広域拠点都市」の実現を目指し、中心市街地の再生を図るために、静岡県とともに沼津駅鉄道高架事業をはじめとする沼津駅周辺総合整備事業を進めている。特に鉄道高架事業は、沼津駅を中心としてJR東海道本線約3.7km、JR御殿場線約1.6kmの高架を計画する大規模事業であり、中心市街地の整備のみにとどまらず、沼津駅の西方に所在する貨物駅及び東方に所在する鉄道車両基地の施設移転を必要としている。本書にて報告する中原遺跡は、新貨物駅建設予定地にて周知されている遺跡である。

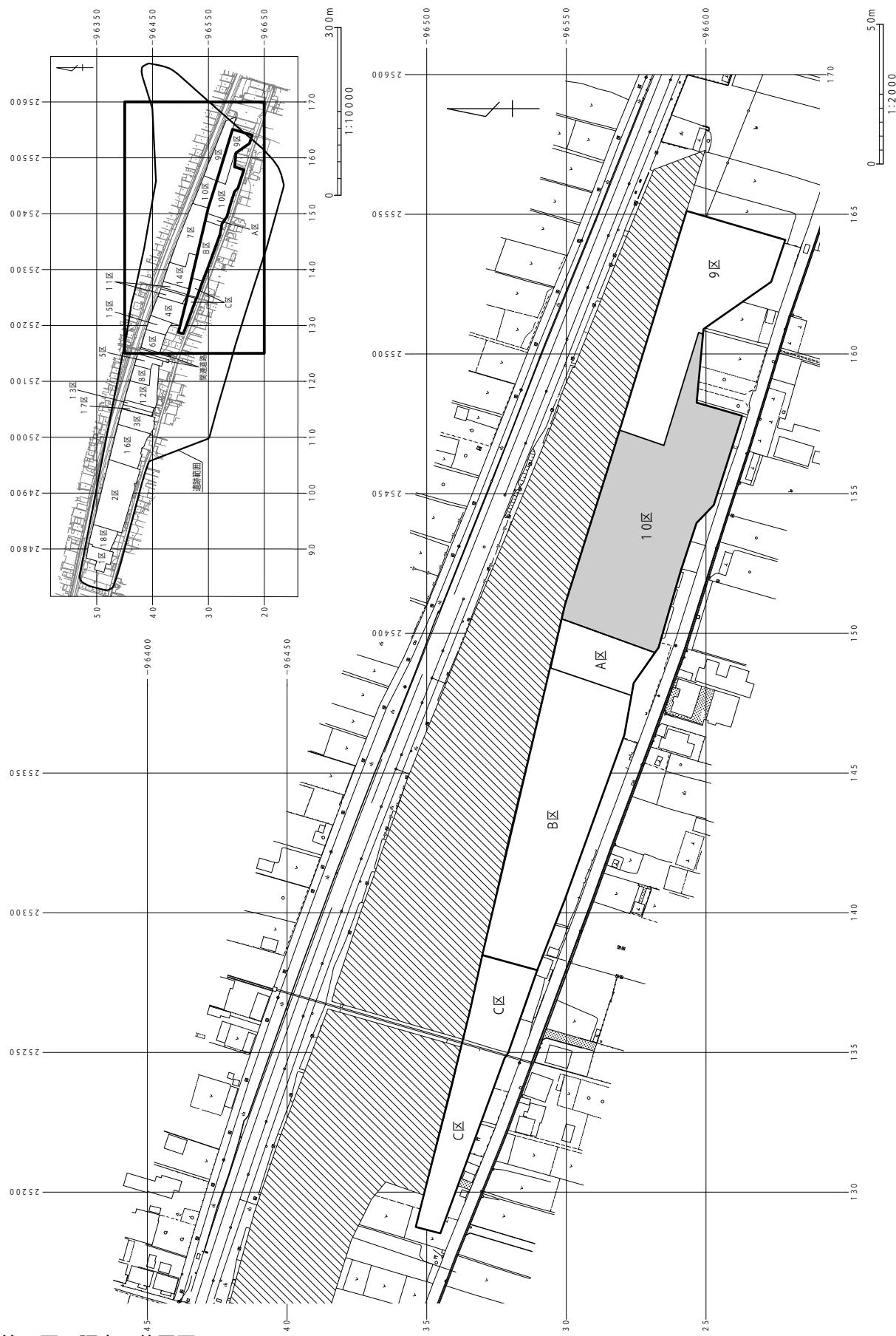
新貨物駅建設事業に係る中原遺跡の発掘調査は、静岡県沼津土木事務所（以下、県土木）、沼津市、沼津市教育委員会の三者による協議のもと、平成20年度より実施している。その経緯・詳細については、平成27年度に刊行した『中原遺跡発掘調査報告書』（沼津市教育委員会2016）に記しており、そちらを参照されたい。

現地調査は、平成22年度以降、新貨物駅建設予定地内の用地取得が難航したことにより一時中断していたが、平成28年度より再開された。平成28年度以降からは、市事業の新貨物駅本体部に付随する新貨物ターミナル第1号緑地調整池築造部分が本調査対象範囲に含まれることから、県事業の調査、市事業の調査を併行して実施する必要が生じた。そのため、当該「鉄道施設移転事業」の担当である沼津市沼津駅周辺整備部整備課（以下、整備課）と沼津市教育委員会事務局文化振興課（以下、文化振興課）において協議を行った結果、整備課より平成28年4月19日付け沼駅整第4号で文化財保護法第94条に係る埋蔵文化財発掘の通知書が提出された。これに対し、平成28年5月6日付け教文第231号の2において静岡県教育委員会教育長より「土木工事等のための発掘について（通知）」があり、発掘調査の指示が出された。このため、文化振興課が主体となり、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

本書は、市事業「鉄道施設移転事業」として新貨物ターミナル第1号緑地調整池築造に伴い平成29年度・令和元年度に実施した弥生時代の遺構及び古墳の調査成果を先行して報告するものである。



第1図 事業対象位置図



第2図 調査区位置図

第2節 発掘調査の経緯と調査区分

現地調査は、新貨物ターミナル第1号緑地調整池築造予定範囲となる延べ10,660m²を対象とした。平成28度から開始された現地調査は、第1号緑地調整池築造予定範囲の東端部から9区を設定し、西へ展開しながら令和元年度まで現地調査を継続した。平成28・29年度は調査区が県事業分と隣接していたことと、面積が等しかったことから、調査体制の円滑な運用を目的として、調査費用を面積按分で折半とする方法を採用している。そのため、市事業分の調査区も便宜上県事業の調査区に合わせて呼称することとなった（平成28年度：9区、平成29年度：10区）。

平成30年度からは、県事業分とは調査区が隣接しないこと、調査面積がそれぞれ異なることの理由から、独自の調査体制で調査を実施し、調査区名は県事業分との混乱を避けるためアルファベット表記の調査区名を設定した。単独での調査体制による現地調査は平成30年度・令和元年度の2か年に及び、C区の調査をもって、第1号緑地調整池部分の現地調査は完了している。

第1表 調査区一覧表

区	調査年度	調査期間	調査原因	調査面積 (m ²)	備考
1	H20	H20.7.9～H21.2.4	県事業	1,354	
2	H21	H20.9.26～H22.3.23	県事業	6,548	
3	H20	H20.7.2～H21.3.19	県事業	2,044	『中原遺跡発掘調査報告書』 沼津市文化財調査報告書 第113集（2016）
4	H20	H20.7.30～H21.3.19	県事業	2,332	『中原遺跡発掘調査報告書』 沼津市文化財調査報告書 第113集（2016）
5	H21	H21.4.1～H21.12.15	県事業	740	『中原遺跡発掘調査報告書』 沼津市文化財調査報告書 第113集（2016）
6	H21	H21.3.2～H21.6.30	県事業	1,160	『中原遺跡発掘調査報告書』 沼津市文化財調査報告書 第113集（2016）
7	H21	H21.8.19～H22.3.19	県事業	3,770	『中原遺跡発掘調査報告書』 沼津市文化財調査報告書 第113集（2016）
8	H22	H22.2.12～H22.8.31	県事業	950	『中原遺跡発掘調査報告書』 沼津市文化財調査報告書 第113集（2016）
9	H28	H28.5.12～H29.3.22	県事業	2,200	
		H28.6.1～H29.3.29	市事業	2,200	
10	H29	H29.5.23～H30.3.16	県事業	1,700	
	H29	H29.5.15～H30.3.16	市事業	2,500	本報告書（方形周溝墓3基、円墳2基）
	R1	R2.1.29～R2.3.31	市事業	(1,500)	
11	H29	H29.5.23～H30.3.16	県事業	800	
12	H30	H30.5.2～H31.3.20	県事業	2,500	
13	R1	R1.5.31～R2.3.20	県事業	580	
14	R1	R1.5.31～R2.3.20	県事業	1,920	
15	R2	R2.5.19～R3.3.22	県事業	963	
16	R2	R2.5.19～R3.3.22	県事業	3,458	
17	R3	R3.5.21～R4.3.22	県事業	402	
18	R3	R3.5.21～R4.3.22	県事業	1,594	
A	H30	H29.11.6～H30.7.31	市事業	460	
B	H30	H30.8.1～R1.7.31	市事業	2,800	
C	R1	R1.6.3～R2.3.31	市事業	1,200	
関連道路	H28	H 28.10.3～H28.12.28	市事業	400	

第3節 現地調査の経過

平成29年度の調査

本書で報告する平成29年度の調査では、2,500m²の面積を対象とした現地調査を平成29年5月9日付け事務連絡で整備課より依頼を受け、同年6月から現地調査に着手した。現場事務所、仮設トイレ、防砂ネットの設置など、現場設営を実施した後、掘削作業に移行した。掘削作業については、はじめに調査対象地に対し重機による表土掘削を実施したのち、遺物包含層を人力掘削しながら遺構の検出を行い、最後に検出された遺構の調査を実施するものであるが、表土掘削は前年の平成28年度に実施済みであったことから、6月9日より人力による包含層掘削を実施した。その結果、当初想定されていた古墳時代後半～奈良・平安時代にかけての集落跡に加え、弥生時代中期の方形周溝墓3基と古墳時代後半の古墳2基が新たに検出された。弥生時代中期の方形周溝墓については、第1号方形周溝墓の規模が一辺約26mを測り、全容が把握でき、且つ現存するものとしては県内最大級である。そのため、整備課とその取り扱いについて協議する必要が生じた。協議の結果、方形周溝墓3基の調査については、その取扱いを含め新貨物ターミナル第1号緑地調整池築造計画の詳細案が定まるまで保留となり、調査も一時中断することとなった。遺構保護シートで覆い養生した後、古墳、及び古代の遺構の調査を継続し、平成30年3月9日には方形周溝墓が確認された範囲(1,500m²)を除いた部分の埋め戻し作業を終え、平成29年度の調査を完了した。

令和元年度の調査

令和元年度には、整備課により、第1号方形周溝墓を現地に保存した状態で調整池築造が可能となる設計が示されたため、2年越しに方形周溝墓の調査が再開する運びとなった。令和2年1月29日付け事務連絡で整備課より方形周溝墓部分の調査再開の依頼を受け、同年2月1日から方形周溝墓の調査に着手した。方形周溝墓の周溝、主体部の順に人力による掘削を実施した。その結果、周溝内から数点ではあるが遺存状態の良好な遺物がまとまった状態で出土し、現地測量・写真撮影等、記録作業を終えた後に取り上げた。周溝の人力掘削が終了した後、2月20日には主体部の調査に着手した。主体部からは微細の遺物が出土する可能性も考慮し、覆土を掘削した土は、約1mmメッシュの篩にかけて確認した後に排土とした。3基の方形周溝墓完掘後、3月16日に埋め戻しを実施し、3月18日に完了した。

また、弥生時代中期の方形周溝墓の調査について、周辺地域では調査例が少ない遺構であることから、県内の弥生時代を研究する専門家に指導を仰ぐ必要があり、平成30年2月23日と令和2年3月5日の計2回、静岡大学人文社会科学部教授 篠原和大氏に現地で調査指導を受けた。

第4節 整理事業の経過

整理事業は、令和元年度まで実施した現地調査成果について、発掘調査報告書として記録保存することを目的として、平成29年度より実施している。そのうち、本書で報告する弥生時代の遺構・遺物に関する整理作業は令和3・4年度の2か年にわたり整備課による鉄道施設移転事業の一環として実務を文化振興課が担当し、沼津市文化財センターにおいて実施した。

令和3年度は、令和3年4月17日付けで整備課より依頼を受け、土器の洗浄、選別、注記、写真データの整理等の基礎整理作業を行った。作業の迅速化を図るため、一部の遺物については、洗浄・注記作業を株式会社フジヤマに外部委託した。図面類の整理作業については、株式会社シン技術コンサル静岡営業所に外部委託し、省力化を図った。編集が完了した遺構図面は土層データ等を加えたのちに「Adobe Illustrator CS5.1」で再編集し、遺構図及び遺物分布図等を作成した。

令和4年度は、令和4年4月16日付けで整備課より依頼を受け、土器の接合、拓本、実測、トレイス、原稿執筆、写真撮影等の本整理作業を行った。一部の遺物の図化作業については、株式会社ラングへ写

真実測を外部委託し、作業の迅速化に努めた。写真図版については、現地調査で撮影した遺構・遺物の記録写真と資料整理作業で撮影した遺物写真等を編集し、図版作成を行った。

以上の作業で得られた図面・写真および現地での調査状況等を踏まえ、本文執筆を行った。報告書の編集作業は「Adobe InDesign CS5.5」を使用した。

なお、本事業は中原遺跡古代編の報告書刊行に向けて現在も継続している。

第2表 現地調査・資料整理工程表

現地調査

	平成28年度				平成29年度				
	4~6月	7~9月	10~12月	1~3月	4~6月	7~9月	10~12月	1~3月	
9区		---		---					H28.6.6 ~ H29.2.27
10区					---			---	H29.6.2 ~ H30.3.8
方形 周溝墓					---			---	H29.7. ~ H30.3.8

H: 平成

	平成30年度				平成31年度・令和元年度				
	4~6月	7~9月	10~12月	1~3月	4~6月	7~9月	10~12月	1~3月	
方形 周溝墓								---	R2.1.29 ~ R2.3.18
A区					---				H30.5.28 ~ H30.7.27
B区		---							H30.8.3 ~ R1.7.31
C区							---	---	R1.10.1 ~ R2.2.4

H: 平成 R: 令和

資料整理

	平成29年度				平成30年度				平成31年・令和元年度			
	4~6月	7~9月	10~12月	1~3月	4~6月	7~9月	10~12月	1~3月	4~6月	7~9月	10~12月	1~3月
遺構図面作成	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
遺物分類・整理												
遺物洗浄	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
遺物注記	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
遺物接合・復元												
遺物デジタル実測												
自然科学分析・保存処理												
記録写真整理	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
遺物実測・トレース												
原稿基礎データ作成												
原稿執筆・全体編集作業												

	令和2年度				令和3年度				令和4年度			
	4~6月	7~9月	10~12月	1~3月	4~6月	7~9月	10~12月	1~3月	4~6月	7~9月	10~12月	1~3月
遺構図面作成					---	---	---	---	---	---	---	---
遺物分類・整理					---							
遺物洗浄	---	---	---	---	---	---	---	---				
遺物注記	---	---	---	---	---	---	---	---				
遺物接合・復元					---	---	---	---				
遺物デジタル実測					---	---	---	---	---	---	---	
自然科学分析・保存処理					---	---	---	---	---	---	---	
記録写真整理	---	---	---	---	---	---	---	---				
遺物実測・トレース									---	---	---	
原稿基礎データ作成									---	---	---	
原稿執筆・全体編集作業									---	---	---	



写真1 現場設営



写真2 測量作業



写真3 篠原和大氏現地指導風景



写真4 重機による埋戻し



写真5 遺物分類・接合作業



写真6 実測作業



写真7 トレス作業



写真8 原稿執筆作業

第Ⅱ章 位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

中原遺跡は、沼津市一本松および桃里に所在し、JR 東海道本線原駅から西へ約 1.2km の地点より西方におよそ 900m にわたって東西に長く広がる遺跡である。

中原遺跡が所在する沼津市は、駿河湾に面する伊豆半島西岸の付け根に位置し、江戸時代には現在の中心市街地は東海道の宿場町として、さらにその後半は沼津水野藩の城下町としても栄えた。また JR 東海道本線沼津駅が設けられた後は商業都市として発展を遂げており、現在も人口約 19 万人が暮らす県東部の中核的な都市である。

中原遺跡が所在する沼津市の西部地域は、かつて駿東郡原町であった地域で、昭和 43 年に合併して沼津市の一一部となつた。北部地域には愛鷹山から南に向けてなだらかな尾根が広がり、この裾野を東西に走る「県道 22 号三島富士線」通称「根方街道」の沿線には、古墳時代前期から中世にかけて多数の遺跡が展開していることが確認されており、このことは根方街道が古くから重要な街道として機能していたことを伺わせる。また愛鷹山の裾野から海岸に向かっては、浮島ヶ原と呼ばれる低湿地帯が広がり、さらに南には「JR 東海道本線」や「旧東海道」、通称「浜通り」と呼ばれる「県道 380 号（旧国道 1 号）」が通過し、海岸沿いは松林が連なる千本松原となっている。

現在の海岸線は愛鷹山の山裾から南に約 2 km の位置に展開するが、かつての駿河湾の海岸線は現在よりもはるか北方に位置しており、相当の深度を持って愛鷹山南麓付近まで海水が入り込み、浮島ヶ原周辺も海中に埋没していたと考えられる。このことは山裾付近で行われたボーリング調査の結果、地表下 44m までは浅海泥底を示し、海棲貝化石層を確認したことからも裏付けられている。貝類が生息するような浅い海を作り上げたのは、愛鷹山を開析する河川等が運搬する土砂や、富士川・狩野川の両河川が運搬した砂礫であり、これらが長い年月をかけて堆積した結果が現在の千本砂礫州である。

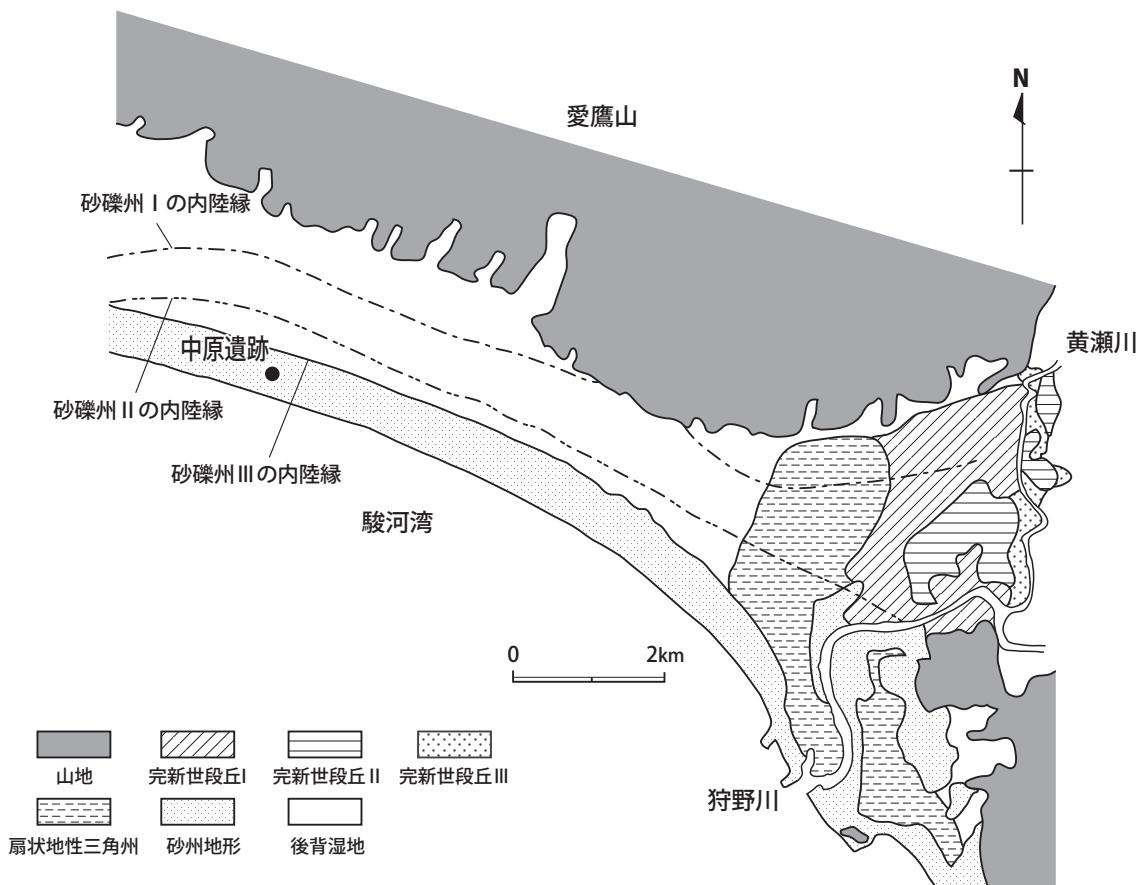
千本砂礫州は現在のものを含めて 3 列の砂礫州から成り立っている（第 4 図）。砂礫州は現在の姿を呈するまでに 3 段階の過程が認められ、内陸側の古い方から順に砂礫州 I ・ II と呼ばれる砂礫堆が存在する。これらは本地域の北西の傾動により浮島ヶ原の低地の下に埋没しており、現在の千本砂礫州は砂礫州 III に当たるものとされる。

千本砂礫州の発達過程はおおよそ以下のようである。浮島ヶ原では 9000 年前頃には海水の浸食が本格的になり、愛鷹山の山裾まで内湾の形成が始まった。9000 ~ 8000 年前は河川水の影響が強まつとともに、陸成堆積物の供給が卓越することになり、8000 年前頃から内湾の奥まで沿岸水・外洋水の影響が及び、砂礫州 I を構成する海成砂礫層の堆積が始まった。これに囲まれた部分は徐々に潟湖環境になり、7000 ~ 6000 年前には砂礫州 I の背後に位置する海域が潟湖化したと考えられる。しかし 6000 年前以降になると、砂礫州 I が完全に離水したことに伴い、背後の潟湖は沼沢地・湿地へと変化した。そして 5000 ~ 4000 年前には砂礫州 II が砂礫州 I の南側に形成されるようになると、これにより砂礫州 I が閉塞されるようになった。そして 2000 年前頃、すなわち弥生時代中期頃には背後を湿地とした、砂礫州 III が形成され現在に至っている。

低湿地へ人々が進出した時期は縄文時代中期に入つてからである。砂礫州 I 上に位置する雌鹿塚遺跡や砂礫州 II に位置する下道遺跡では縄文時代中期後半の遺物が出土しており、人間活動の場となっていたことが明らかになっている。弥生時代後期には砂礫州 III が離水したことによって、浮島ヶ原中央の湿地帯の環境が安定したためか、湿地帯の中にあって砂礫州 I に相当する微高地に築かれた雌鹿塚遺跡には再び集落の形成が認められる。古墳時代以降になると浮島ヶ原中央部から海岸地域へ活動の場が移動し、砂礫州 III 上には集落や古墳群が形成されるようになった。中原遺跡も砂礫州 III 上に形成された遺跡



第3図 遺跡位置図



第4図 周辺地質図

の一つである。

その後、江戸時代には東海道の整備により原宿が形成され、現代に至っても東西を結ぶ主要な交通路となっている。

なお、千本砂礫州の形成過程については松原彰子氏による検討がある（松原 1995、2000）。

松原彰子 1995 「下道遺跡周辺の自然環境変遷」『沼津市文化財調査報告書第 57 集 下道遺跡発掘調査報告書』：101～107 頁

松原彰子 2000 「狩野川下流域における地形環境と遺跡の立地」『沼津市文化財調査報告書第 74 集 下石田原田遺跡発掘調査報告書』：217～226 頁

第2節 周辺遺跡と歴史的環境

中原遺跡周辺に分布する遺跡については、『中原遺跡発掘調査報告書』（沼津市教育委員会 2016）にて、古墳時代から奈良・平安時代にかけての周辺遺跡を重点的に概観しており、当該期の歴史的環境についてはそちらを参照されたい。本書では本報告分の弥生時代を中心に、旧石器～古墳時代にかけて分布する周辺遺跡を第5図に改めて示した。以下、時代ごとに概観していく。

旧石器時代、及び縄文時代の遺跡は、中原遺跡が立地する千本砂礫州の背後に広がる愛鷹山麓の緩斜面に集中している。井出丸山遺跡（1）は、約3万7千年前の石器群が出土し、全国的にも最古級の石器群として注目される遺跡である。それ以降、縄文時代後期にかけて愛鷹山麓の尾根上には多数の遺跡が存在することで知られている。さらに愛鷹山麓の尾根からやや下る山裾には、縄文時代早期末～前期初頭の住居址が検出された吹上遺跡（2）が所在する。この時期は縄文海進がピークに達し、当時の海水面は現在よりも7m程上昇していたと考えられ、海岸線は愛鷹山麓の山裾部にまで及んでいたとされる。吹上遺跡からは土器の他に石錘が出土しており、山麓部の集落跡でありながら漁業を生業とする。



第5図 周辺遺跡分布図

第3表 周辺遺跡一覧表（1）

No.	遺跡名	所在地	時代	種別	遺構の現状・検出状況・遺物等	遺跡No.
1	井出丸山	井出堀込	旧石器・縄文	散布地・集落跡	台形様石器・サイドスクレイバー・ドリル・石核・剥片・碎片・炭化物・ナイフ形石器・石刃・エンドスクレイバー・抉入石器・RF・UF・細石刃核・土器（駿豆撲糸文・押型文・茅山下層式）・尖頭器・石鏃・楔形石器・磨石	411
2	吹上	平沼片蓋	縄文～古墳	集落跡	土器（弥生後期・土師器）・石錘・竪穴住居址・円墳2基	12
3	荒久上	石川荒久上	弥生・古墳	集落跡	土器（有東式・土師器（鬼高II式）・石皿・竪穴住居址1基（カマド付）・民有・原町誌 s.38. 3. 1・消滅	9
4	葱川	平沼葱川	縄文～古墳	集落跡	土器（勝坂式・加曾利E式・堀ノ内式・大洞A式・土師器）・打製石斧・磨製石斧・砥石	14
5	古城	根古屋古城	弥生・古墳	集落跡	土器（飯田式・土師器）・有東式壺	34
6	雌鹿塚	原女鹿塚	弥生	集落跡	土器（後期五領式か？）	203
7	雄鹿塚	一本松ミサゴ塚	弥生・古墳	集落跡	土器（後期五領式か？）	204
8	上原遺跡	桃里上原	弥生・奈良・平安	散布地・その他の墓		429
9	鳥沢	原鳥澤	縄文・古墳～平安	集落跡	住居址・溝・土坑・土器（土師器・須恵器）	367
10	八兵衛洞	足高尾上	縄文～古墳	集落跡	竪穴住居址・掘立柱建物・方形周溝墓・溝状遺構・土坑・ピット・土器溜・土器（弥生後期中葉・後期後葉・土師器（大廟式）	281
11	尾上Ⅲ橋西	足高尾上	弥生・古墳	集落跡	竪穴住居跡・方形周溝墓・土器（弥生後期・土師器）・土製勾玉・有頭	347
12	植出北	足高尾上	弥生・古墳	集落跡	弥生時代住居址・土器（弥生・古墳）	381
13	植出北Ⅱ	足高尾上	旧石器～古墳	集落跡	弥生後期住居址33基・堀立柱建物1基・溝状遺構（大溝）1条・焼土址16基・土坑45基・集石6基・石器ブロック2か所・礫群18基・配石16基・ナイフ形石器・尖頭器・削器・彫器・楔形石器・抉入石器・加工痕剥片・石核・石鏃・搔器・石匙・礫斧・打製石斧・磨製石斧・磨石・石皿・・敲石・ハンマー・磨製石鏃・土器（縄文草創期～中期後葉・弥生後期）・土製品（耳飾り・丸玉・勾玉・紡錘車・勾玉鋳型）・ガラス小玉	416
14	北神馬土手	足高尾上	旧石器～古墳	散布地・集落跡	礫・石器・土器（縄文・飯田式・土師器）・住居址4基・土製勾玉・ガラス製勾玉・竪穴住居址・掘立柱建物址・畝状遺構・方形周溝墓・溝状遺構	135
15	清水柳北	足高尾上	縄文・弥生	集落跡・その他の墓	竪穴住居址（縄文早・前期）・土器（縄文草創期）・石器ブロック・礫群・局部磨製石斧	363
16	二本松	西熊堂二本松	弥生	集落跡・その他の墓	方形周溝墓・住居址・竪穴状遺構検出・土器（飯田式）	136
17	土手頭南	足高尾上	弥生	集落跡	方形周溝墓・土器（縄文早期）	362
18	三本松	大塚道下	弥生・古墳	集落跡	土器（飯田式・土師器）・有頭大型石錘	199
19	二ツ洞	足高尾上	旧石器・縄文・古墳～平安	集落跡	石器ブロック60か所・礫群45基・台形様石器・ナイフ形石器・有茎尖頭器・抉状耳飾・奈良平安住居址2基・竪穴住居址2基・土坑15基・集石3基・焼土址8基・土器（縄文・土師器・須恵器）・灰釉陶器	352
20	日黒身	西椎路日黒身	弥生～平安	集落跡	住居址32基・排水溝1基・方形周溝墓3基・堀立柱1基・井戸1基・土器（飯田式・土師器〈五領式・国分式〉）・小形打製石斧	66
21	伴名田	松長改正	弥生・古墳	集落跡	杭列・井戸・住居址（？）等検出・土器（飯田式・五領式）・ガラス玉・有頭大型石錘	198
22	春ノ木	東椎路春ノ木	弥生・古墳	集落跡	土器（弥生後期・土師器）	76
23	軒通	大諏訪河原	弥生・古墳	その他の墓	土器（矢崎中層・鬼高II式）	194
24	西通北	小瀬訪二ノ坪	弥生～近世	散布地・集落跡	大型溝状遺構1・住居址2・柵列1・土坑4・集石1・土器・敲石・台石・礫斧・石斧・石核・溝状遺構2・土坑15・土師器・須恵器・灰釉陶器・青磁・白磁・青白磁・陶器・土器・瓦・銭貨・溝状遺構6基・土坑列2・磁器・陶器・輸入陶器・煙管・銭貨・土錘・砥石・土製人形	397
25	西通	小瀬訪西通	弥生～平安	集落跡・その他の墓	土器（土師器）	193
26	中通	小瀬訪中通	弥生・古墳	集落跡	土器（矢崎中層・五領式）・石錘	192
27	入方	東沢田入方	弥生	集落跡	土器（登呂式）	123
28	沢田	沼北町	弥生・古墳	集落跡	土器（登呂式・飯田式・五領・鬼高・須恵器）・木製品・住居址・炭化米・石製模造品・石鏃・磨製石斧	122
29	本田町西	本田町	弥生	集落跡	土器（弥生後期）	369
30	御幸町	御幸町	弥生～平安	集落跡	竪穴住居300基以上・鉄製品・銅鏡・銅鏡	211
31	下道	桃里下道	古墳～平安	集落跡	土器（土師器・須恵器）	205
32	古田	一本松古田	古墳	集落跡	土器（土師器・須恵器）	202
33	六軒町	原鳥澤	弥生	集落跡	土器（弥生中期？）	327
34	御殿場	原御殿場	古墳	集落跡	土器（土師器）	200
35	東畠毛	今沢	古墳～近世	集落跡	住居址・土器（土師器・須恵器）・灰・市教委で一部発掘・片浜駅建設工事により大半消滅	358
36	神明塚古墳	松長	古墳	古墳	前方後円墳（全長62m）・市内最大古墳粘土櫛	197
37	松長古墳群	松長	古墳	古墳	円墳数基残存・大半消滅	195
38	叶	大諏訪河原	古墳～平安	集落跡	住居址・土器（土師器・須恵器）・市教委で一部発掘	359
39	丸子町	丸子町	古墳	祭祀	浅間神社で一部発掘・模造玉類・土器（和泉式・須恵器）・有頭石錘	186
40	白銀町	白銀町	古墳～平安	集落跡	土器（土師器・須恵器）	188
41	千本	本千本	古墳・奈良～近代	集落跡	住居址・掘立柱建物・集積墓・土器（土師器・須恵器）・灰釉陶器・綠釉陶器・陶器・磁器・石器・古錢・鉄製品・銅製品・土錘・土馬・墨書き土器・線刻土器	372
42	清水上	三枚橋清水上	弥生・古墳	集落跡	土器（矢崎中層・土師器）・柱状片刃・石斧	182
43	三芳町	三芳町	弥生・古墳	集落跡	土器（弥生後期？・土師器）	181
44	山王台	三枚橋山王台	弥生・鎌倉	集落跡・神社址	日吉神社で一部発掘・住居址・柱穴多数検出・土器・空堀残存・土器（矢崎中層・鬼高・真間・国分・須恵器）・古錢	174
45	中溝	東間門下中溝 西間門上中溝	弥生・古墳	集落跡	土器（弥生後期・土師器）・柱・杭・果核一部発掘	185
46	双葉町	双葉町	古墳～平安	集落跡	土器（土師器・須恵器・墨書き）・板材・杭・市教委で一部発掘	276

第4表 周辺遺跡一覧表（2）

No.	遺跡名	所在地	時代	種別	遺構の現状・検出状況・遺物等	遺跡 No.
47	本田町	本田町	弥生・古墳	集落跡	土器（弥生後期？・土師器・須恵器）	184
48	上ノ段	大手町	古墳～平安・中世	集落跡	竪穴住居・土器（土師器・須恵器）・唐三彩陶枕	382
49	杉崎町	杉崎町	奈良・平安	集落跡	土器（土師器・須恵器）	180
50	日ノ出町	三枚橋日ノ出町	古墳	集落跡	土器（和泉式）菅玉・木片	179
51	高田第六天	高田地蔵免	弥生・奈良・平安	集落跡	土器（弥生後期・土師器・須恵器）・有頭大型石錘・布目瓦	159
52	日吉廃寺跡	日吉造道	奈良・平安	寺院跡	市教委と日大で一部発掘・塔基壇・柱穴・溝・住居	176
53	日吉	日吉造道	弥生・奈良・平安	集落跡	土器（矢崎中層式・土師器）・竪穴住居址・磨製石斧	177
54	高尾山古墳	東熊堂	古墳	古墳	前方後方墳・上方作系浮彫式獸帶鏡・槍・鐵鏃・鉢・勾玉・パレススタイル壺・大廓式土器・土師器	276
55	神ヶ沢古墳群	石川神ヶ沢	古墳	古墳	円墳・元は群集していた	417
56	石川古墳群	石川長沢・下坂・大沢	古墳	古墳	一部消滅・約120基・刀身・刀子・金環・鐵鏃・人骨・土器（土師器・須恵器）・組合式箱形石棺・馬具・玉類・頭椎太刀・金銅製丸玉・原町教委で一部発掘	16
57	井出古墳群	井出段崎	古墳	古墳	円墳	412
58	の場古墳群	井出戻神	古墳	古墳	円墳・横穴式石室露出	39
59	根古屋古墳群	根古屋丸尾木戸上	古墳	古墳	円墳	421
60	柳沢古墳群	柳沢伊良宇守	古墳	古墳	円墳	418
61	東原古墳群	東原大屋アラク	古墳	古墳	宅地造成により4基消滅・玉類・銅鏡・土器（須恵器）・刀身・轡	61
62	馬見塚古墳群	西沢田馬見場	古墳	古墳	円墳	91
63	西大曲	宮本元野	旧石器・縄文・古墳	集落跡	大半消滅・市教委で発掘・ナイフ型石器・土器（茅山下層式）	284
64	小屋敷	東熊堂小屋敷	古墳	集落跡	土器（五輪式）	312
65	八兵衛屋敷古墳群	足高尾上	古墳	古墳	円墳	395
66	子ノ神古墳	西沢田子ノ神	古墳	古墳	前方後円墳・前方部一部破壊	82
67	漆畠	東沢田漆畠	古墳	集落跡	住居址1基検出・土器（五輪式）・宅地化進む	124
68	西畠	岡宮西ノ畠	弥生・古墳	集落跡	土器（飯田式・土師器〈鬼高II式〉）・鐵鏃	146
69	広池	岡宮天神ヶ尾・広池	古墳	祭祀？	土器（五輪・和泉式）	147
70	下山	岡宮下山	古墳	集落跡	土器（土師器）	148
71	清水柳北古墳群	足高尾上	古墳	古墳	上円下方墳・円墳・市教委で発掘	364

る様相を示している。このことから、当時の海岸線が現在よりも内陸にまで及んでいた生活環境であったことが伺える。縄文時代前期以降になると海退が進み、千本砂礫州では最も古く形成されたと考えられる砂礫州Iが6000～5000年前頃に離水しはじめて陸地化した。このため縄文時代中期以前に遡る遺跡はほぼ確認されない。縄文時代中期以降になって雌鹿塚遺跡（6）・雄鹿塚遺跡（7）・鳥沢遺跡（9）・下道遺跡（31）が出現し、明確な縄文時代の遺構は検出されていないものの、縄文時代中期から晩期にかけての遺物が確認されている。愛鷹山麓沿いでは葱川遺跡（4）から、縄文時代晩期の遺物の出土が確認されているが、沼津市内全域をとおして縄文時代晩期から弥生時代中期前葉にかけての遺跡数は極めて希薄で不明な点が多い。

沼津市内において再び遺跡が確認され始めるのは弥生時代中期中葉以降である。当該時期の遺跡としては、愛鷹山麓の二ッ洞遺跡（19）、浮島ヶ原に位置する雄鹿塚遺跡で断片的な資料が知られている。弥生時代中期後葉になると、愛鷹山麓の丘陵上に古城遺跡（5）が確認され、千本砂礫州上では軒通遺跡（23）・西通北遺跡（24）・西通遺跡（25）が出現する。そのほとんどが集落跡であり、このことから弥生時代中期頃から湿地帯の環境が安定したことで水田稲作が本格的に開始された可能性がある。特に西通北遺跡では集落内に中期中葉に帰属する大型の溝状遺構を確認しており、「環濠」の可能性も考えられるが、詳細は不明である。西通北遺跡の南に位置する西通遺跡からは、弥生時代中期後葉の方形周溝墓が検出され、「居住域」と「墓域」を伴う弥生時代の大規模集落が存在した可能性があるが、両者に時期差があるなど判然としない。また、中原遺跡から約1km西に位置する上原遺跡（8）からは、未報告ではあるが、27基の方形周溝墓群が発見されている。千本砂礫州上にて、当該期の墓域の発見例が蓄積されつつあり、居住域との関係が検討課題である。

その他に弥生時代中・後期の浮島ヶ原周辺では、雌鹿塚遺跡・雄鹿塚遺跡が集落として縄文時代から継続するものの、分布する遺跡数は少なく、愛鷹山麓縁辺沿いや浮島ヶ原東縁にあたる黄瀬川扇状地上に確認される。前者は、荒久上遺跡（3）・目黒身遺跡（20）・春ノ木遺跡（22）・入方遺跡（27）、後者には沢田遺跡（28）・御幸町遺跡（30）・三芳町遺跡（43）・山王台遺跡（44）・高田第六天遺跡（51）などが分布している。

弥生時代後期になると、千本砂礫州上では三本松遺跡（18）・六軒町遺跡（33）などごく少数の遺跡が確認されているものの、発掘調査は行われておらず詳細は明らかではない。一方、愛鷹山南麓の標高150m以下の丘陵地に集落が形成されるようになり、八兵衛洞遺跡（10）・尾上Ⅲ橋西遺跡（11）・植出北遺跡（12）・植出北Ⅱ遺跡（13）・北神馬土手遺跡（14）・清水柳北遺跡（15）・二本松遺跡（16）など複数の遺跡が密集して出現する。そのうち、植出北遺跡からガラス勾玉とガラス小玉が出土しており、その北側に位置する植出北Ⅱ遺跡からはガラス勾玉の鋳型が出土した。県内の集落動態に関して、弥生時代後期は平野部から丘陵上へと、集落の立地環境が積極的に採用された時期であり、高地性集落として爆発的に増加したこれらの遺跡は、その傾向を如実に表しているといえる。古墳時代初頭まで存続する集落も多く、この時期の愛鷹山麓末端部に高尾山古墳（54）が築造される。

古墳時代以降は千本砂礫州、低湿地、狩野川下流域にも遺跡が多く分布するようになる。古墳時代前期の集落は主に愛鷹山麓から裾部にかけて展開したが、千本砂礫州においては、古墳時代中期から後期前半頃までの様相は不明な点が多いものの、古墳時代後期前半（TK43段階以降）には松長古墳群（37）が展開する。このころまで海岸沿いには古墳群が展開する地域であったようであるが、愛鷹山麓にも神ヶ沢古墳群（55）・井出古墳群（57）・的場古墳群（58）・根古屋古墳群（59）・柳沢古墳群（60）・東原古墳群（61）・馬見塚古墳群（62）・八兵衛屋敷古墳群（65）・清水柳北古墳群（71）など多くの古墳群が形成される。

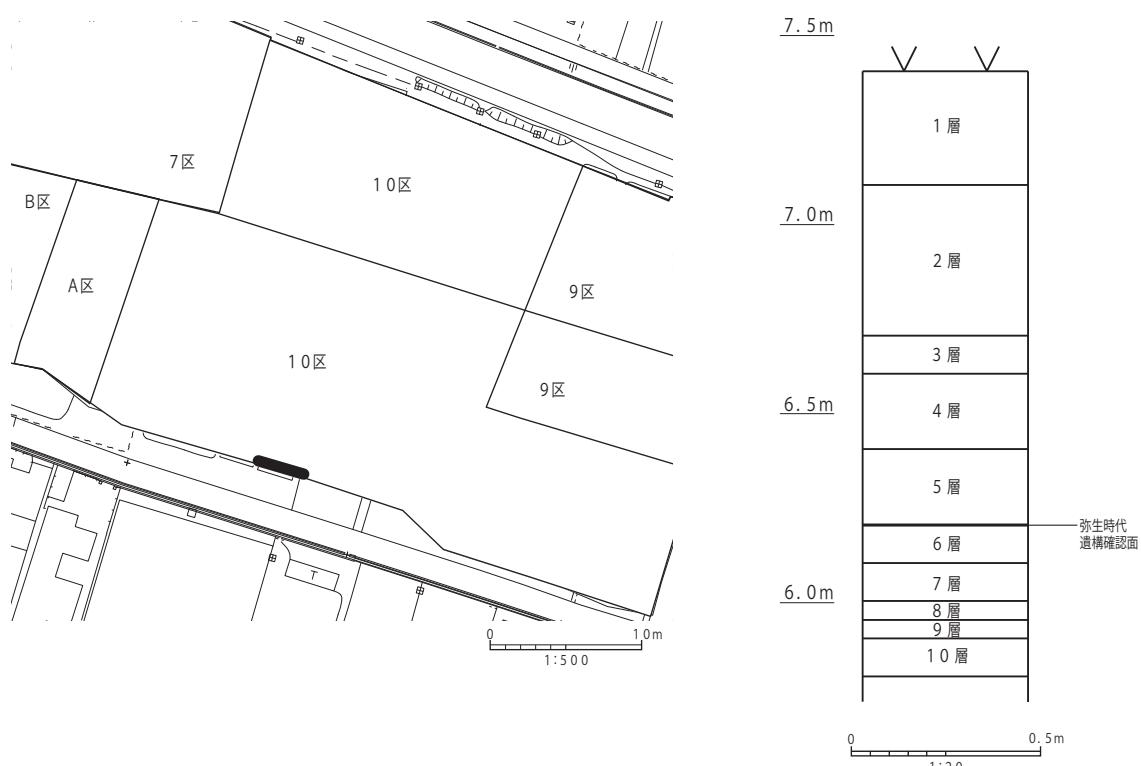
後期後半になると生活の場が主に海岸地域へと移動したようで、下道遺跡・古田遺跡（32）・鳥沢遺跡・御殿場遺跡（34）・東畠毛遺跡（35）などの集落が展開するようになる。千本砂礫州では発掘調査が行われていないため詳細が不明な遺跡もあるが、中原遺跡と鳥沢遺跡の間では断続的ながら土師器の散布が認められるため、古墳時代後期後半には中原遺跡から鳥沢遺跡にかけての砂礫州上に東西約1kmにわたって集落が形成されていた可能性が高く、中原遺跡はその後、奈良・平安時代にかけて大規模集落として発展していく。

第3節 遺跡の層位

10区の南側において現地表から深さ約1.7mの基本土層断面を確認し、土層は10層に分層された(第6図)。

1層は碎石が混じる造成土で、層厚は約0.3mである。2層は耕作土で、層厚は約0.4mである。黒色を呈するシルト分を主体とし、腐植土混じりで細礫が多く含まれる。3層は黄褐色砂礫を主体として、腐植土が混じり、層厚は約0.1mである。 ϕ 1~2mmのスコリアが少量混じる。4層はスコリア混じりの黒色土で層厚は約0.2mである。 ϕ 10mm以下の黒色・褐色スコリア、 ϕ 1~2の軽石を多量に含み、シルトが混じる。5層は黄褐色がかかった青灰色砂礫が堆積する。層厚は約0.2mで、腐植土、 ϕ 1~2mmの軽石が微量に含まれる。6層はスコリアを多量に含む褐色土で、シルト質を主体とする。粘性・締まりがともに強い。6層下部には、 ϕ 1~2mmの軽石(カワゴ平パミス)が認められる。7層は腐植土混じりの黄褐色砂礫で、層厚は約0.1mである。8層はスコリアを含む褐色土で、層厚は約0.05mである。粘性・締まりの強いシルト質を主体とする。極細砂が微量に混じる。9層以下は富士川から供給されたと考えられる砂礫が堆積する。9層は黄褐色砂礫で、層厚が約0.05mで微量の腐植土、 ϕ 1~2mmの軽石が含まれる。10層は黄色がかかった青灰色砂礫層である。層厚は0.2mで、腐植土が微量に混ざるもの、 ϕ 10~20mmの細礫を含む砂礫が主体を成す。10層以下、同様の砂礫層の堆積が続き、千本砂礫州を形成した砂礫州Ⅲの堆積が認められる。

なお、本書で報告する弥生時代の遺構は6層上面で確認された。



第6図 標準土層位置図・柱状図

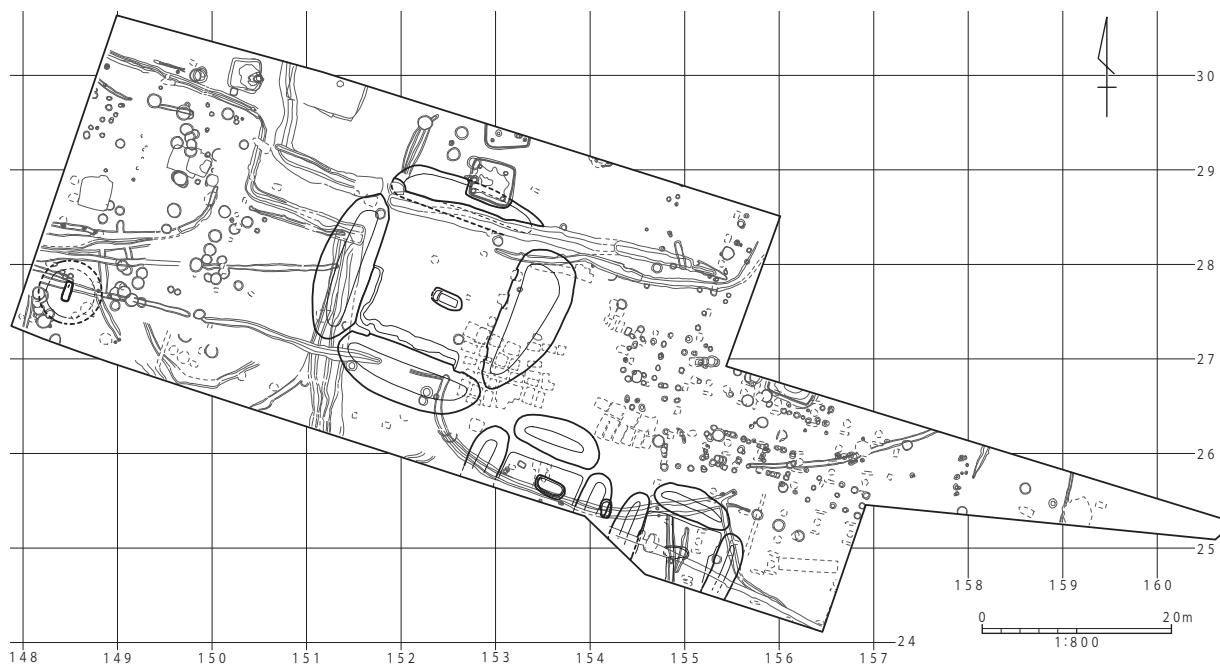
第Ⅲ章 調査結果

第1節 遺構の概要

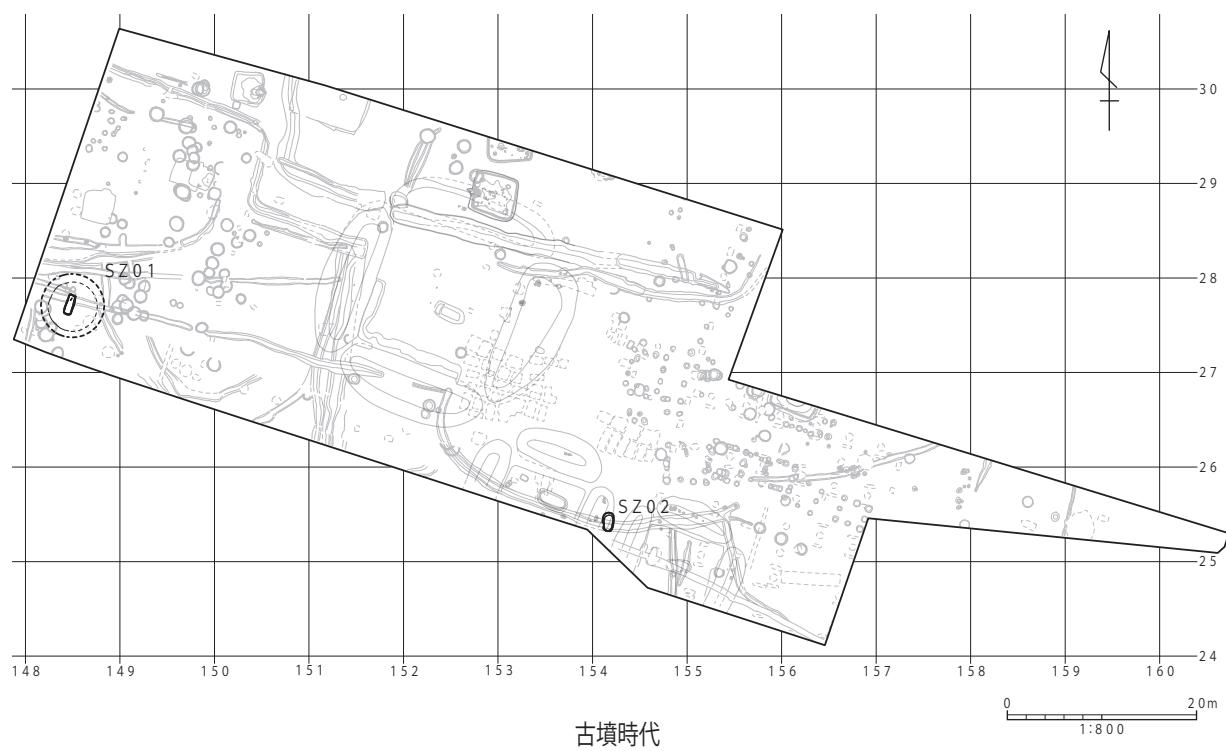
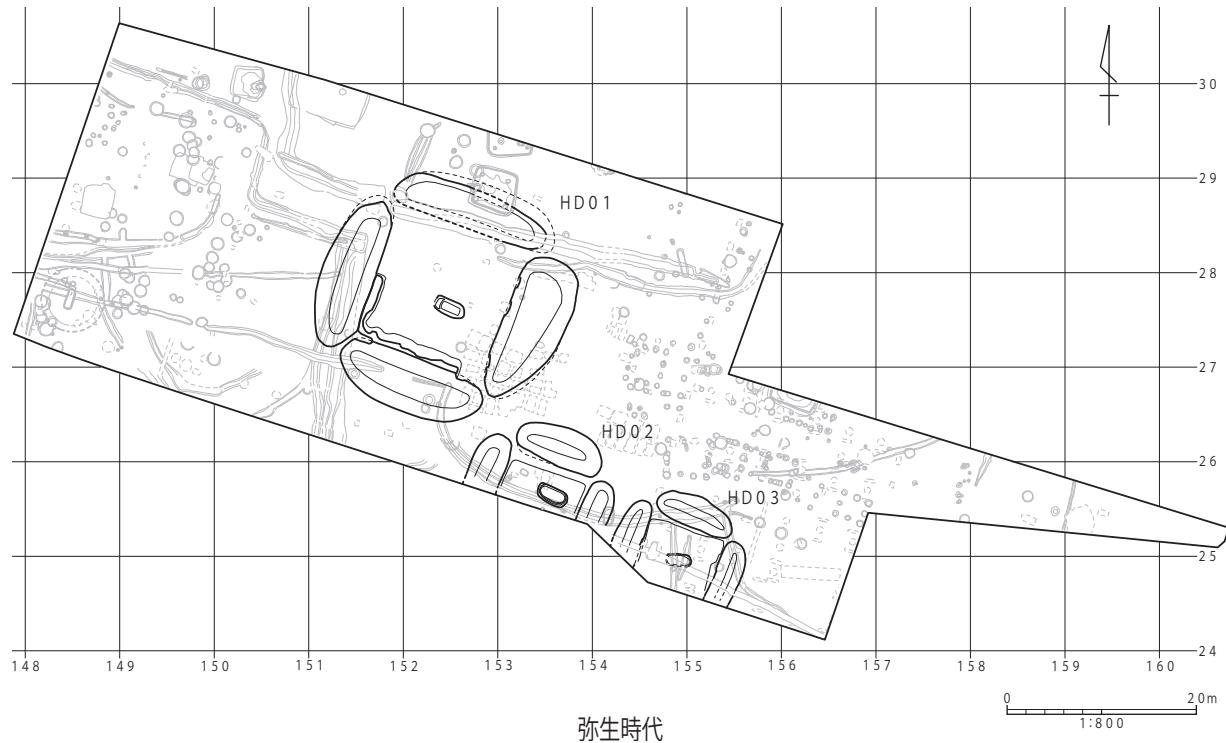
調査により確認した遺構は、方形周溝墓3基、古墳2基である。弥生時代の遺構配置は、方形周溝墓が調査区中央より南東へ展開するように分布する。古墳時代の遺構である古墳2基については方形周溝墓と同一の確認面で検出され、調査区南西隅と調査区南側やや東寄りに分布する。前者は方形周溝墓と同一の確認面で検出され、後者は方形周溝墓と重複して砂礫層上から検出された。中原遺跡は古墳時代末から形成される集落遺跡であることから、住居址も確認されている。しかし、その後奈良・平安まで継続する中原遺跡の集落の性格を考慮すると、集落関連の遺構については、今後刊行予定の報告書において記述することが適切と考え、本書では古墳時代は円墳の報告のみにとどめることとする。

方形周溝墓の概要

調査区内から弥生時代中期の方形周溝墓が3基検出された。第1号方形周溝墓(HD01)はほぼ全体を検出することができたが、第2号方形周溝墓(HD02)・第3号方形周溝墓(HD03)は南側部分が調査区外に続くため未検出である。確認面は第6層である褐色スコリア層上面で、第5層の砂礫に厚く覆われた状態で検出された。第5層の砂礫は周溝内まで堆積していたため、検出時には周溝内の砂礫のみが残り、その全容を明確に確認することができた。これらの状況から、高潮などの影響を受けて埋没した可能性が考えられる。検出した3基の方形周溝墓は、HD01を北限に南東へ分布しており、調査区外へも及んでいるため、分布域はさらに南東へ広がるものと考えられる。3基の方形周溝墓は、周溝外辺から1～5mの間隔をもって、独立して築造されていた。今回確認されたHD01は、規模が全長約26mに及び他の2基に比べ突出している。以下、方形周溝墓について、周溝墓(方台部)・周溝・主体部・出土遺物の順に述べていくこととする。周溝墓については、長軸方位、周溝墳丘側下端の計測値(内法)、周溝外辺上端を含めた計測値(外法)について述べるが、特異なものは必要に応じて説明を加えるものとする。周溝については、その規模と特徴について述べ、主体部については、長軸・短軸の計測値、長軸方向について述べていく。



第7図 中原遺跡遺構全体図



第8図 時期別遺構配置図

第2節 第1号方形周溝墓と出土遺物

調査区中央部の151～153－26～28 グリッドの範囲で4条すべての溝を検出した。北へ向かって緩やかに下り傾斜していく微高地の北端部に位置し、第6層上面から掘り込まれていた。平面形態は隅に陸橋部を有するいわゆる「四隅切れ」タイプである。北溝の一部は、古代の住居址、溝状遺構及び土坑に切られ、明確でない箇所があるものの、3基の中で唯一全容を把握できた方形周溝墓である。また、溝幅を含めた全長は東西 26.2 m、南北 25.6m を測り、その規模は今回の調査で確認された方形周溝墓の中で最大である。

【方台部】

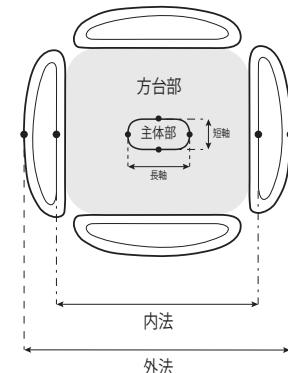
方台部の規模は東西 16.9m、南北 17.4m で、ほぼ正方形を呈する。全長は東西を長軸とするのに対して、方台部は南北を長軸とするものである。南北方位は周溝の位置関係から N-21° -W となる。高さは周溝底面から最大 1.6m であり、方台部の南西縁辺部には、地山面（第6層の褐色スコリア層）上に 0.25m 程度の盛土が土手状に残存している。盛土には砂礫混じりの土が用いられていることから、周溝を掘削した際に排出した土を積み上げたものと推測される。

【周溝】

周溝は4隅が切れるタイプで方形に廻る。墳丘側は直線的で外辺は弧状に膨らむ形を呈する。北溝は正確な規模は不明であるが、計測可能な範囲で長さ 16.4 m、幅 5.0m を測る。深さは確認面から約 1.2m で他の周溝に比べ浅い。断面は逆台形を呈するものの、その全容や、立ち上がり部分については、古代の住居址や溝状遺構に切られ明確には確認できない。他の溝については上層に砂礫が厚く堆積するものの、北側周溝については、砂礫の堆積が認められない。

東溝の規模は長さ 16.1 m、幅 6.4m、深さは確認面から約 1.5m を測る。確認面の海拔高は 6.4m である。墳丘側が直線的で外辺が弧状に膨らむ。溝中央部に最大幅を有し、端部が縮まる形状であるが、その他の周溝に比べ北側端部がやや膨らむ。北側端部には砂礫混じりの土が混濁した状態で堆積する土溜まりができていることから、堆積する過程で、高潮などの洪水の影響を受けて外辺が削られたものと推測される。断面は逆台形状を呈し、底面はほぼ平坦で墳丘側がきつく立ち上がるが、外側は大きく開く。墳丘側の覆土に砂礫混じりの黒色土・黒褐色土が多く堆積しており、墳丘の崩落による堆積の可能性がある。

南溝の規模は長さ 15.8 m、幅 5.7m、深さは確認面から約 1.6m を測る。確認面の海拔高は 6.4m である。平面形状は、墳丘側が直線的で外辺が弧状に膨らむ。断面は逆台形を呈し、底面はやや丸みを帯びる。比較的の残存状況は良好で、墳丘側、外側ともに立ち上がりはきつ

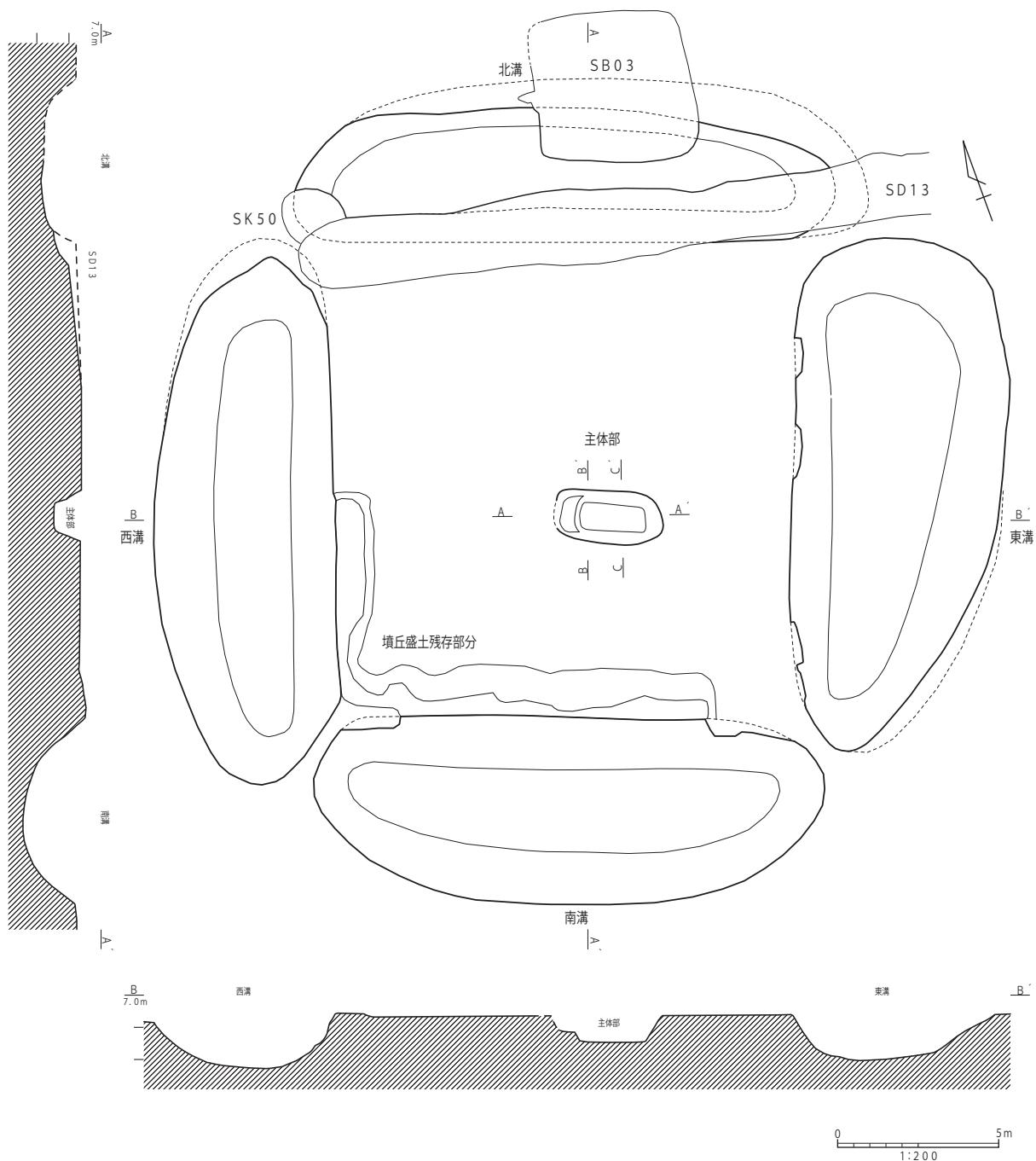


第9図 方形周溝墓計測模式図

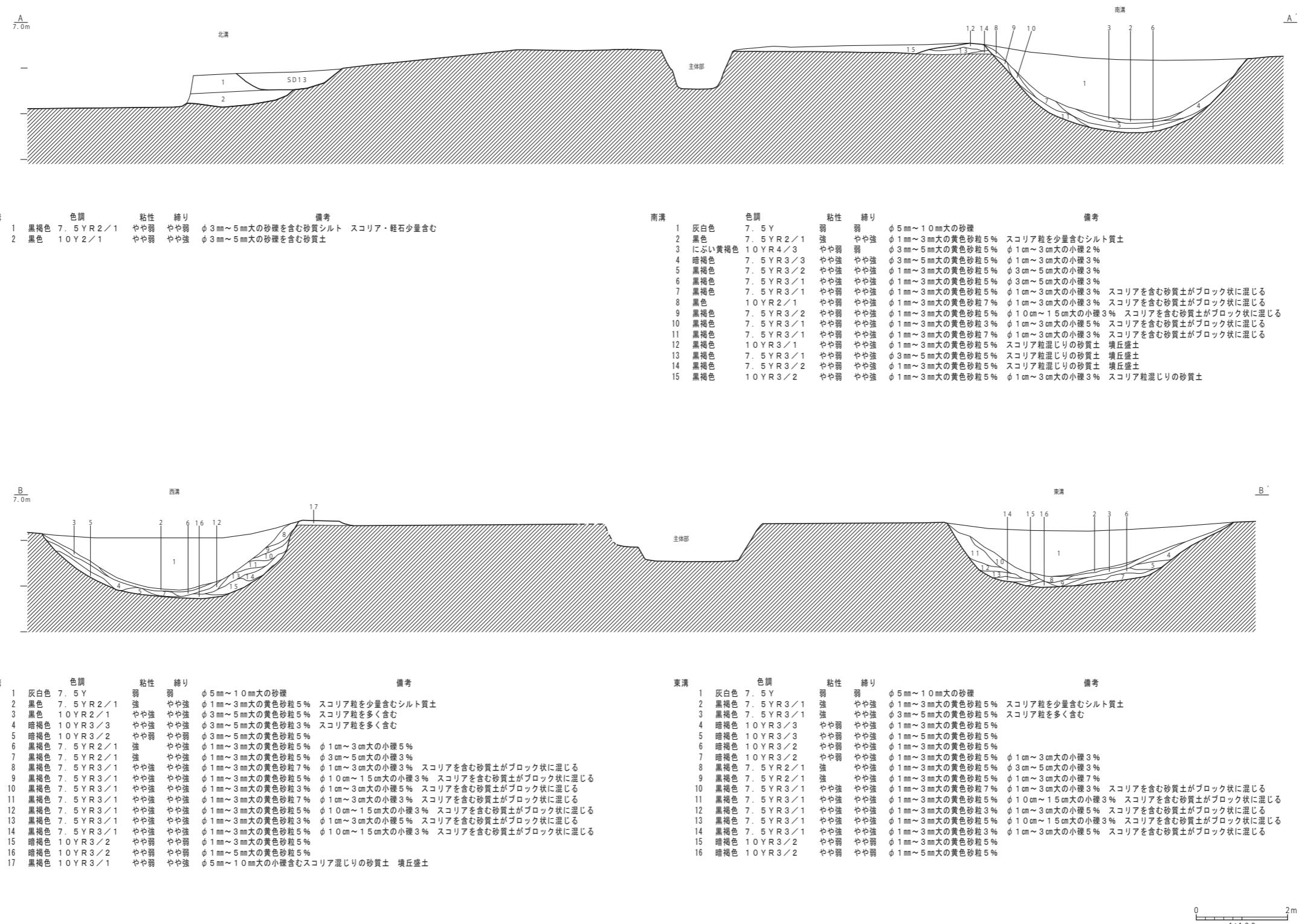
第5表 方形周溝墓計測表

攝図 番号	遺構 番号	外法		内法		形態	主体部規模		周溝	長さ	幅	深さ
		東西	南北	東西	南北		長軸	3.4	北溝	16.4	5	1.2
10図	HD01	26.2	(25.6)	16.9	(17.4)	四隅切れ	長軸	3.4	北溝	16.4	5	1.2
							短軸	1.65	東溝	16.1	6.4	1.5
							形状	隅丸長方形	南溝	15.8	5.7	1.6
							長軸方位	N-66° -W	西溝	16.2	5.6	1.5
18図	HD02	15.8	(8.3)	11.3	(5.4)	四隅切れ	長軸	3.24	北溝	9.5	4.2	1.2
							短軸	1.71	東溝	4.3	3.2	1.1
							形状	隅丸長方形	—	—	—	—
							長軸方位	N-65° -W	西溝	5.2	3.6	1.2
25図	HD03	14.2	(10.3)	10.6	(8.2)	四隅切れ	長軸	2.7	北溝	8.6	3.4	1.3
							短軸	1.32	東溝	7.1	2.8	1.3
							形状	隅丸長方形	—	—	—	—
							長軸方位	N-87° -W	西溝	6.6	2.9	1.1

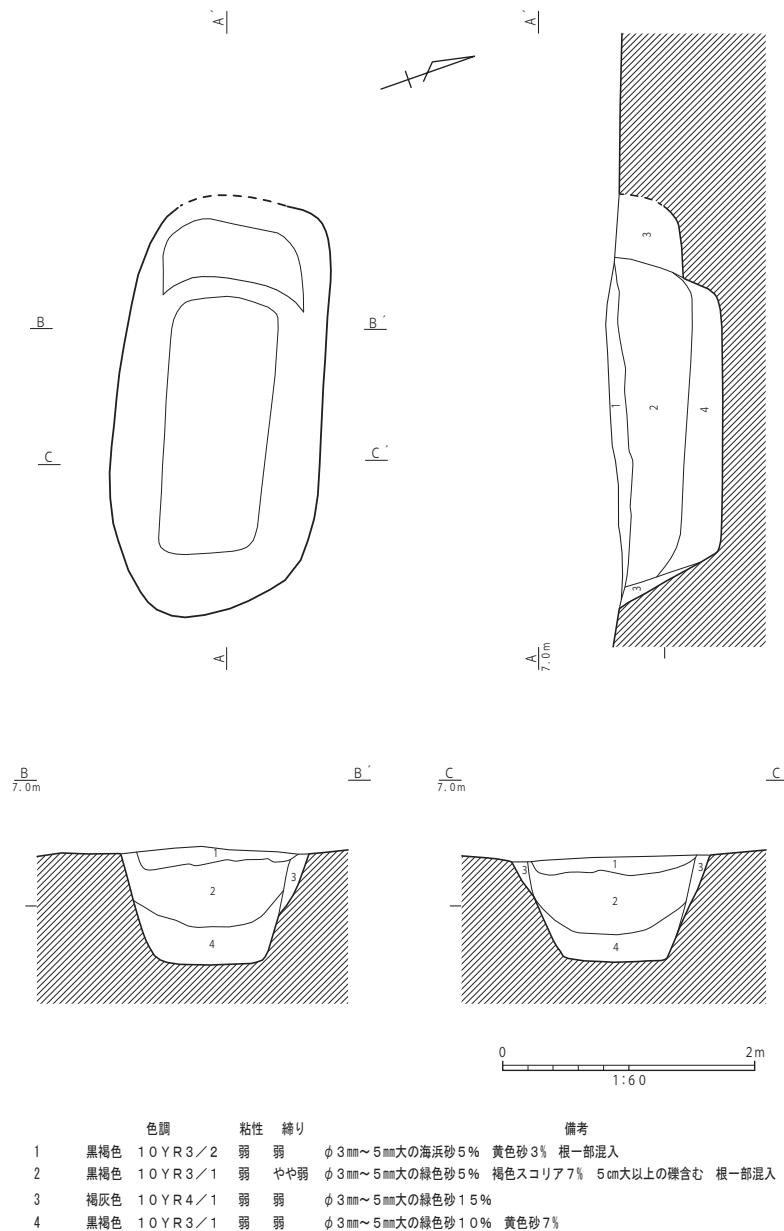
() は計測値



第10図 第1号方形周溝墓平面図・断面図



第11図 第1号方形周溝墓土層断面図



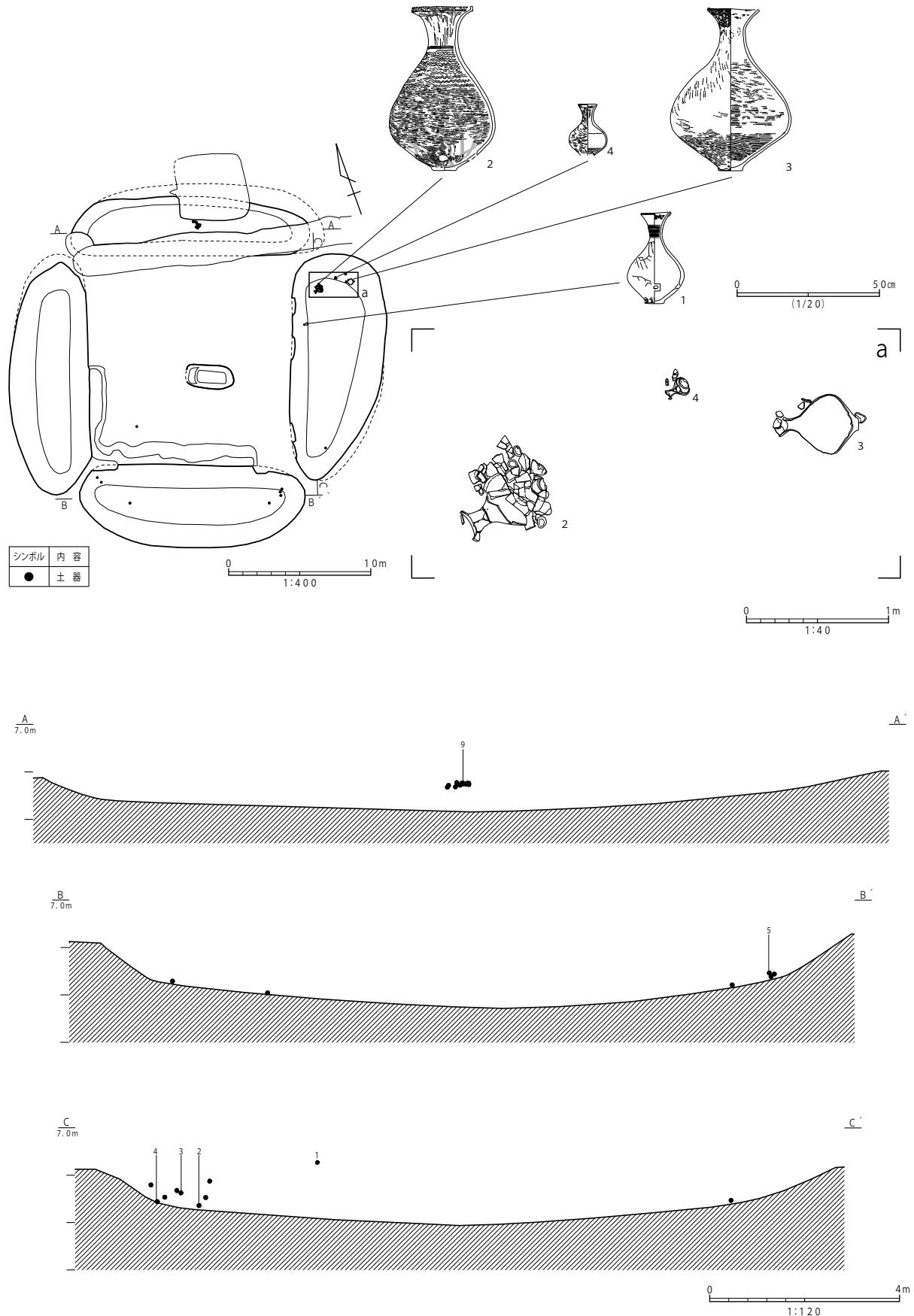
第12図 第1号方形周溝墓主体部平面図・断面図

ぐ、墳丘南側及び西側の縁辺部には方台部の盛土と思われる堆積が土手状に残存する。

西溝の規模は長さ 16.2 m、幅 5.6m、確認面からの深さは約 1.5m を測る。確認面の海拔高は 6.2m である。平面形状は、墳丘側が直線的で外辺が弧状に膨らむ。断面は逆台形を呈する。底面はやや平坦で墳丘側がきつく立ち上がる。第 7 ~ 14 層についてはスコリアを含む砂質土がブロック状に墳丘側に堆積しており、墳丘の崩落により堆積したものと推測される。

【主体部】

主体部は方台部のほぼ中央より 1 基検出された。長さ 3.4m、幅 1.65m の隅丸長方形を呈するもので、褐色スコリア層から 0.8m 下の砂礫層まで掘り込んでいる。主軸方位は N-66°-W である。底面は平坦となっており、西側端部には 0.3m ほどの段を有する。覆土中から微量の木片が確認され、主体部に木棺を設けた可能性がうかがえる。副葬品等の遺物は確認されなかった。



第13図 第1号方形周溝墓遺物出土状況図

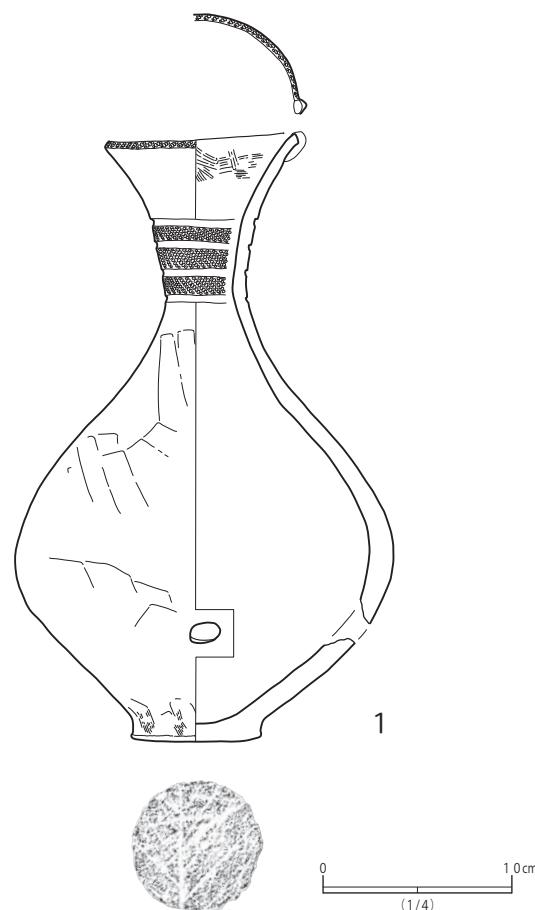
【出土遺物】(第 14・15・16・17 図)

出土遺物は、北・南・東溝及び墳丘より土器が出土した。各周溝内の土層断面から出土状況を確認すると、出土した土器の多くは溝底直上から出土したものと、やや浮いた状態のものが看取され、周溝覆土上層の砂礫層に含まれていたものは東溝で出土した壺 1 点を除いてほとんどみられない。覆土中に大小さまざまな礫が伴っていたことから、高潮などの影響で方台部が崩落し、その流れ込みによって混入した可能性が高い。周溝内の出土遺物は、北溝と東溝に集中しており、北溝は小破片が多く、東溝は完形に近い土器が多い傾向にある。北溝は古代の住居址及び溝状遺構に切られていることもあり、上層には土師器小片も多く混入していた。墳丘からは 3 点の土器片が出土し、そのうち 2 点は縄文土器であった。方形周溝墓を覆っていた上層の砂礫混じりの土と墳丘縁辺部に残存する土手状盛土の土が混濁した中に含まれ、地山面である第 6 層褐色スコリア層直上から出土している。

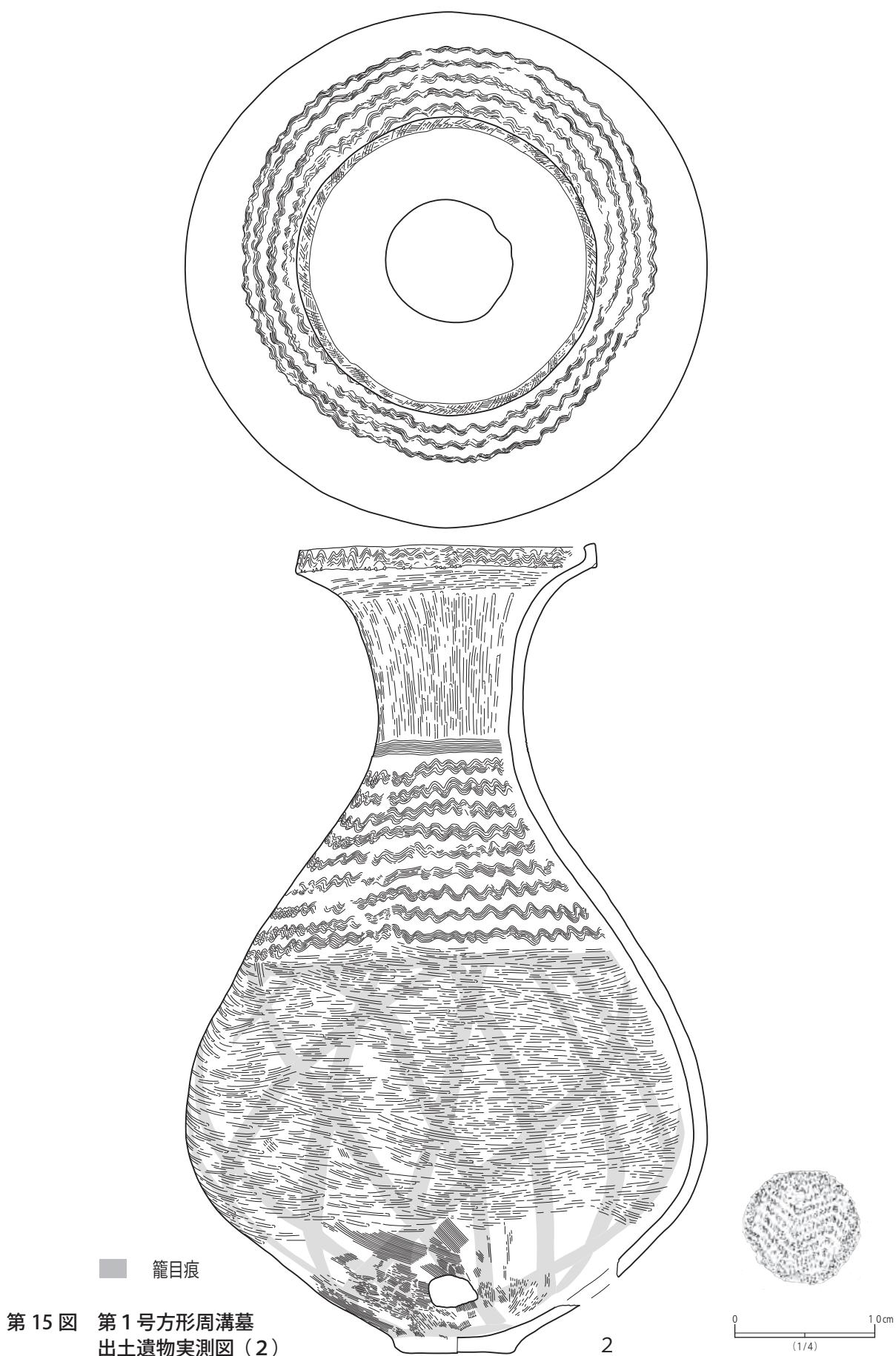
以下、図示が可能であった 14 点について述べていく。1～6 は東溝、7～10 は北溝、11 は南溝から出土したもので、12～14 は墳丘から出土した遺物である。器種は大半を壺（1～9・11・12）が占めるが、北溝からは甕の破片が少量出土する。なお、土器の時期については、萩野谷正宏他 2002『弥生土器の様式と編年 - 東海編 -』「東駿河様式」の編年に従って記述していく。

1 は東溝上層の砂礫層から完形の状態で出土した細頸壺である。胴部はやや丸みを帯びた器形を呈し、胴部中央に最大径をもつ。頸部から口縁部にかけて緩やかに外反する。口唇部と頸部に文様帶を有し、口唇部には単節縄文 (LR) を施し、1箇所に円形浮文を貼付する。頸部に集約される縄文地紋に、太い沈線区画を付加する文様構成は、栗林式の新相に見られる特徴で、中部高地系の土器群からの影響も考慮する必要がある。底面には木葉痕を有しており、胴部下半には径 0.5cm ほどの焼成後穿孔が認められる。時期は東駿河 III-4 期ないし 5 期に属すると推測される。口径 9.8cm、器高 32.2cm、底径 6.6cm、胴部最大径 19.9cm である。

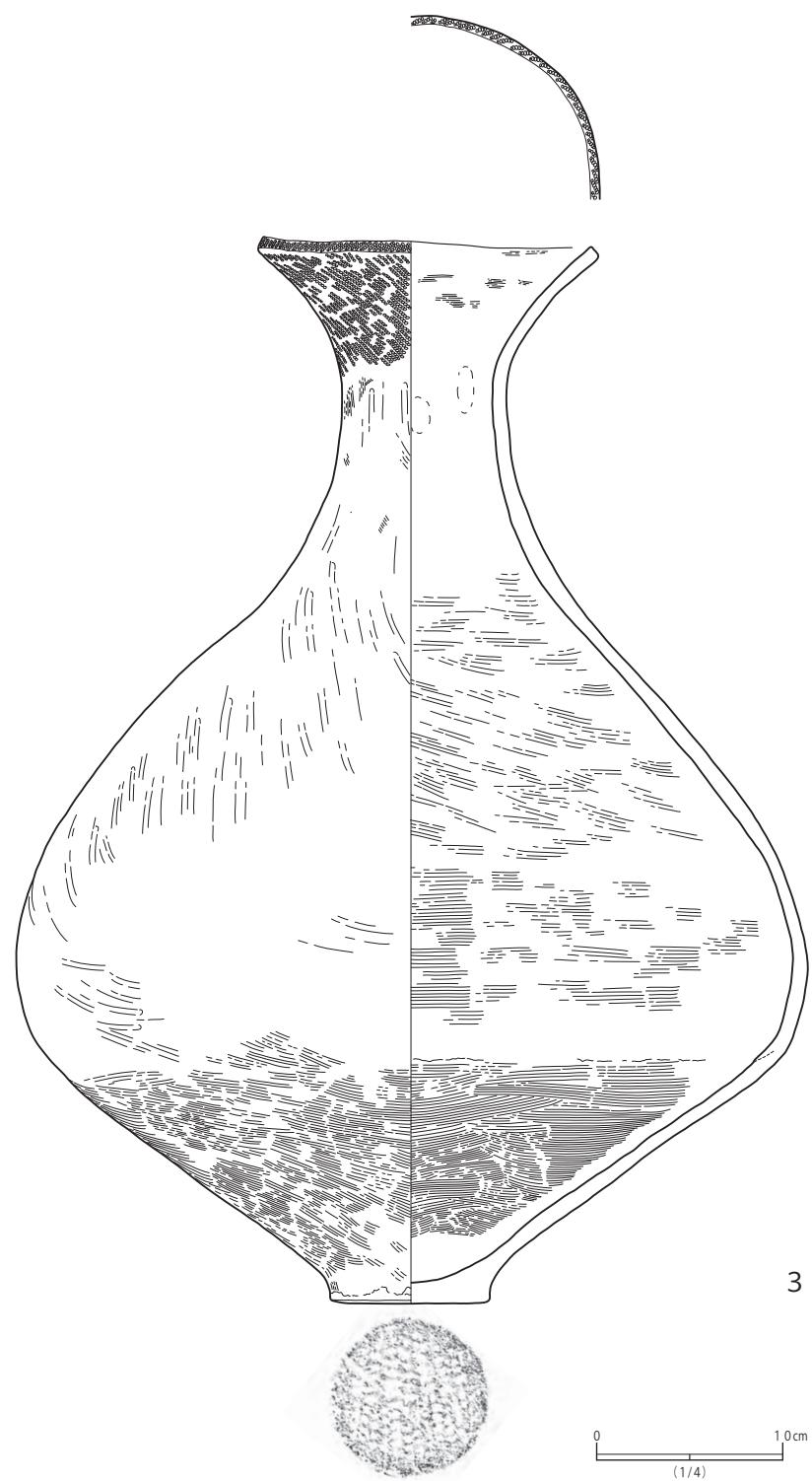
2～4 は東溝北端部の底面からやや浮いた状態で出土したほぼ完形品の壺である。2 は胴部の最大径がやや下がる下膨れ傾向の強い胴部形態をもつ太頸受口壺で、受口は短く直立する。端部にはハケ状工具によるわずかな擦痕が確認され、受口下部に刻みが認められる。櫛描文を主文様として、口縁部に一条の波状文を巡らし、頸部から胴部上半にかけての文様帶は、上から 1 条の櫛描直線文、以下幅広の波状文を 9 段に重ねている。器面全体に赤彩が施される。下膨れの形態、文様構成は東遠江からの影響を強く受けているように推測され、藤枝市清水遺跡出土の大型壺に類似する（藤枝市教育委員会 1992）。無文部分は丁寧に磨かれ、胴部下半には籠目痕が残存する。胴部下部付近には穿孔が確認され、底部に網代痕を有する。内部は外面に比べ、明らかに調整が粗悪で、器面の残存状態は良好とはいえず剥落が顕著である。時期は



第 14 図 第 1 号方形周溝墓出土遺物実測図 (1)



第15図 第1号方形周溝墓
出土遺物実測図（2）

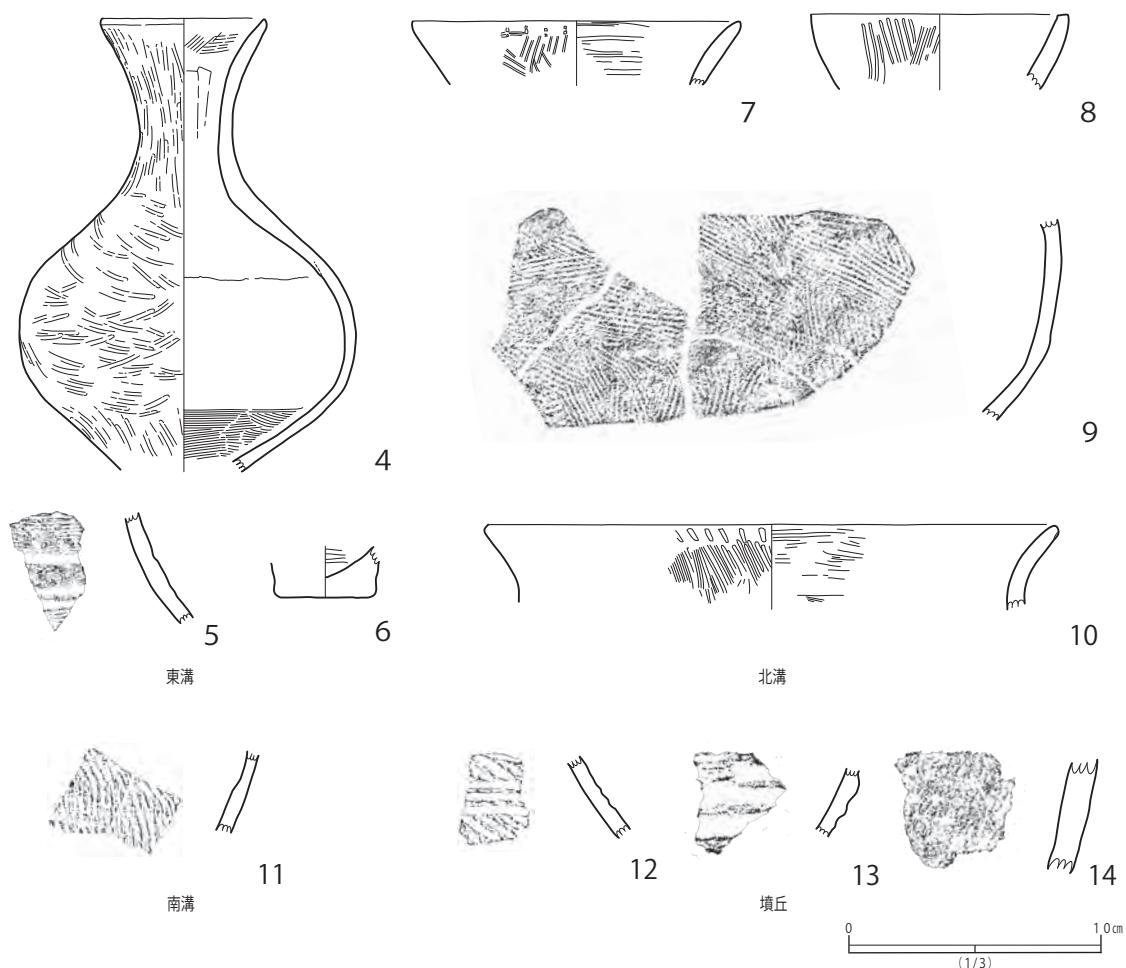


第16図 第1号方形周溝墓出土遺物実測図（3）

東駿河Ⅲ-3 様式に比定されよう。口径 21.0cm、器高 57.7cm、底径 7.0cm である。

3 は、大型壺で胴部中央に最大径をもつ。口唇部に LR の単節縄文、口縁部周辺に RL の単節縄文を施された縄文のみの文様構成である。頸部から胴部上半にかけてミガキで整えられており、胴部下半はハケメ調整が施される。底部には網代痕が認められる。内面はハケメ調整である。口径 17.5cm、器高 57.1cm、底径 7.0cm である。

4 は小型壺である。底部は欠損するがほぼ完形の状態で出土した。やや肩が張ったような胴部形状を呈し、頸部から口縁部にかけて緩やかに外反する。口径 6.7cm、器高 18.1cm、底径は残存値で 4.8cm である。5 は細頸壺の頸部から肩部にかけての破片である。横位の櫛描直線文に太めの沈線で区画して無文帯を配置する。胎土には石英が少量混じり、色調はにぶい黄橙色（10YR7/4）を呈する。弥生時代中期中葉の瓜郷式に比定される。6 は壺底部の一部である。内面にはわずかにハケによる調整が認められる。7 は壺の口縁部の一部である。2 本単位の櫛状工具で斜状沈線を施し、口縁端部には同一の工具で刺突が施される。内面は横位のハケメ調整が認められる。8 は壺の口縁部の一部である。頸部からやや内湾しながら立ち上がる器形を呈し、口縁端部は平坦に整えられている。外面に粗めのハケメによる調整が認められ、内面は丁寧なナデによって整えられている。9 は壺胴部の一部である。丸みを帶びた器形を呈し、外面に粗いハケメによる調整が観察される。内面にはナデ調整を施す。色調は明褐色



第 17 図 第 1 号方形周溝墓出土遺物実測図 (4)

を呈し、焼成は良好である。10は条痕甕の口縁部で端部に刻みを施す。内面はナデで整えている。11は甕胴部の破片である。外面に2段の条痕が認められる。

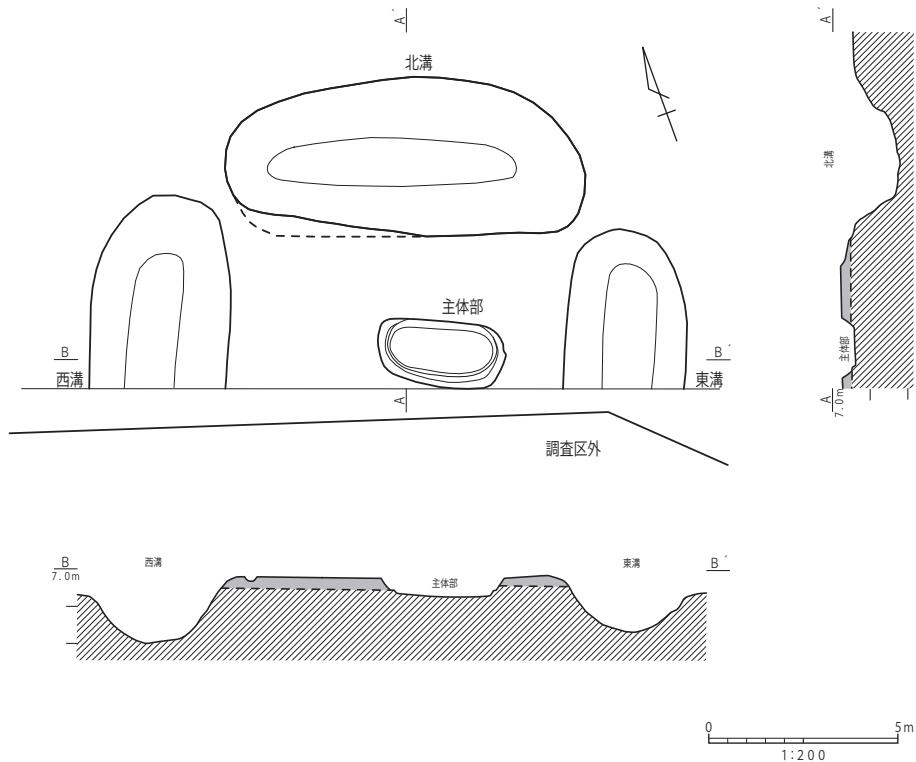
12～14は墳丘部土手状盛土から出土した土器小片である。12は壺の一部である。3条の沈線で区画した上下に斜状の沈線を施文する。器厚は0.6mmとやや薄手で、色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。時期は、施文の特徴から中期中葉頃に帰属するものと考えられる。13は縄文時代晚期の浅鉢の一部である。浮線網状文が施され、色調は内外面ともに黒褐色を呈する。内外面とも丁寧に磨かれている。胎土は緻密で焼成は良好である。14は胴部の破片である。内外面に施文は認められない。器厚は0.5mmで胎土中には石英を含む白色砂粒が混じる。縄文時代の粗製深鉢の一部と推測される。

第6表 第1号方形周溝墓出土遺物観察表

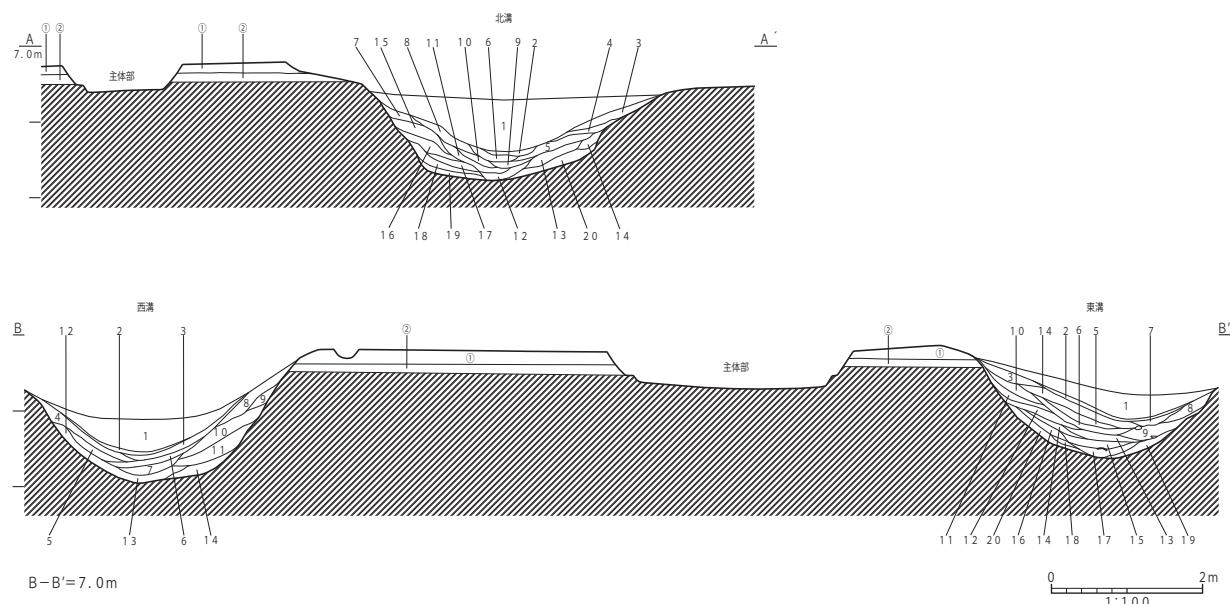
図版番号	遺物番号	出土地点	器種	口径 器高 底径	胎土	焼成	色調	残存	形態の特徴	手法の特徴	備考
14図1	H29-3	東溝覆土	細頸壺	9.8cm	φ 1mm の白色砂粒 3% 含む	良	7.5YR6/6 橙色	口縁部～ 底部	胴部穿孔	外面 ヘラ状工具によるナデ 頸部に4条の沈線による区画内を縄文施文 口唇部にRL縄文、赤彩わずかに残存 内面 口縁部にハケメ調整	弥生時代 中期後葉
				32.2cm							
				6.6cm							
15図2	81	東溝	受口太頸壺	21.0cm	φ 1mm の白色砂粒 3% 含む	良	2.5YR4/8 赤褐色	口縁部～ 底部	胴部穿孔 胴部下膨れ	外面 全体に赤彩 頸部から胴部上半に多段の柳描文波状文 ミガキ 内面 ナデ調整 表面脆弱	弥生時代 中期後葉
				57.7cm							
				7.0cm							
16図3	82	東溝	大型壺	17.5cm	φ 1mm の白色砂粒 3% 含む	良	7.5YR7/6 橙色	口縁部～ 底部	胴部中央部に最大径をもつ	外面 口縁部単節縄文 胴部上半ミガキ 胴部下部ハケメ 内面 口縁部横位ナデ 胴部ハケメ	弥生時代 中期後葉
				57.1cm							
				7.0cm							
17図4	81	東溝	小型壺	6.7cm	φ 1mm の白色砂粒 1% 含む	良	10YR8/6 黄橙色	口縁部～ 胴部下部	口縁部は緩やかに外反する やや肩の張る胴部形状	外面 ミガキ 内面 ミガキ	弥生時代 中期後葉
				18.1cm							
				(4.8cm)							
17図5	104	東溝覆土	壺	— (4.2cm) —	φ 1mm の白色砂粒 2% 石英含む	良	10YR7/4 にぶい黄橙色	頸部	肩部から頸部にかけてやや 外反する	外面 ヘラ描沈線で区画後、上下に柳描直線 内面 ナデ	弥生時代 中期中葉
17図6	815	東溝覆土	壺	— (2.0cm) 4.0cm	φ 1mm の白色砂粒 5% 含む	良	10YR7/4 にぶい黄橙色	底部	底部は突出する	外面 ナデ 内面 ハケ後、ナデ	弥生時代 中期
17図7	—	北溝	壺	13.0cm (2.5cm) —	φ 1mm の白色砂粒 2% 含む	良	5Y6/6 橙色	口縁部	口縁部は外反する	外面 斜位の柳描直線、口唇部に刺突 内面 ハケメ	弥生時代 中期後葉
17図8	—	北溝	壺	9.0cm (3.0cm) —	φ 1mm の白色砂粒 3% 含む	良	7.5Y5/4 にぶい褐色	口縁部	内湾して立ち上がる口縁 口唇部を平坦に整える	外面 斜位の柳描直線 内面 ナデ	弥生時代 中期後葉
17図9	20 22 26	北溝	壺	— — —	φ 1mm の白色砂粒 3% 含む	良	7.5YR5/6 明褐色	胴部	やや丸みを帯びた胴部	外面 粗いハケメ 内面 ハケ後、ナデ調整	弥生時代 中期後葉
17図10	—	北溝	甕	16.0cm (3.4cm) —	φ 1mm の白色砂粒 5% 含む	良	7.5Y5/6 明褐色	口縁部	頸部から口縁部にかけて外 反する	外面 斜位の条痕、口縁部に刻み 内面 横位ハケメ	弥生時代 中期後葉
17図11	100 126	南溝	甕	— (3.2cm) —	φ 1mm の白色砂粒 5% 含む	良	5YR5/6 明赤褐色	胴部	外傾して立ち上がる	外面 粗いハケメ 内面 ナデ	弥生時代 中期後葉
17図12	102	墳丘	壺	— (3.3cm) —	φ 1mm の白色砂粒 3% 含む	良	7.5YR5/4 にぶい褐色	頸部	内傾する	外面 柳描沈線 内面 ナデ	弥生時代 中期後葉
17図13	96	墳丘	浅鉢	— (2.6cm) —	φ 1mm の白色砂粒 2% 石英含む	良	10YR3/10 黒褐色	口縁部	外傾して立ち上がる	外面 浮線文 ミガキ 内面 ミガキ	縄文時代 晚期
17図14	121	墳丘	深鉢	— (4.4cm) —	φ 1mm の白色砂粒 3% 石英、雲母含む	良	10YR5/3 にぶい黄褐色	胴部	外傾して立ち上がる	外面 ナデ 内面 ナデ	縄文時代

第3節 第2号方形周溝墓と出土遺物

調査区中央部の152・153-25~27グリッドから検出され、HD01の南東に位置している。調査区外となるため、北溝と東溝及び西溝の一部を確認した。遺構の規模は確認部分で東西15.8m、南北8.3mを測る。周溝は隅が切れるタイプで、墳丘側は直線的で外辺は弧状に膨らむ形を呈する。全体の形態はHD01と同様であると推測される。



第18図 第2号方形周溝墓平面図・断面図



第19図 第2号方形周溝墓土層断面図

【方台部】

方台部の規模は東西 11.3m、南北は測定値で 5.4m を測り、形状はほぼ正方形を呈すると考えられる。調査区南壁面の断面観察から、確認面の第 6 層褐色スコリア層直上から墳丘の盛土と推測される約 0.2m の堆積土が確認された。周溝底面からの高さは最大 1.7m である。方台部からは主体部を 1 基確認した。

【周溝】

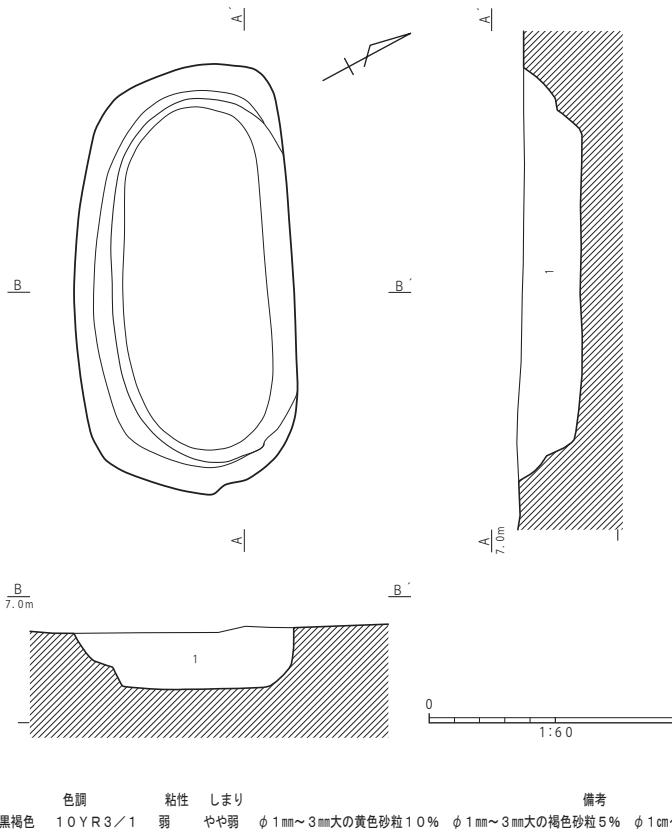
周溝は隅が切れるタイプで方形に廻る。墳丘側は直線的で外辺は弧状に膨らむ形を呈する。北溝は長さ 9.5 m、幅 4.2m、確認面からの深さは約 1.2m を測る。確認面の海拔高は 6.5m である。断面形状は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦となっている。立ち上がり部分は墳丘側がきつく、外側は大きく開く。東溝は確認部分で長さ 4.3 m、幅 3.2m、確認面からの深さ約 1.1m を測る。確認面の海拔高は 6.3m である。断面は逆台形を呈し、底面は緩く丸みを帯びる。立ち上がりは墳丘側がきつく、外側が開いて

北溝	色調	粘性	繰り	備考
1 灰白色	7.5 Y	弱	弱	φ 5mm～10mm 大の砂礫
2 黒色	7.5 YR2/1	強	やや強	φ 1mm～3mm 大の黄色砂粒 5% スコリア粒を少量含むシルト質土
3 黒色	7.5 YR2/1	やや強	やや強	φ 1mm～3mm 大の黄色砂粒 3% スコリア粒を少量含むシルト質土
4 暗褐色	5.5 YR3/3	やや強	やや強	φ 1mm～3mm 大の黄色砂粒 3% 褐色スコリア 5%
5 暗褐色	7.5 YR3/2	やや強	やや弱	φ 1mm～3mm 大の黄色砂粒 5% 褐色スコリア 3% 炭化物少量含む
6 暗褐色	7.5 YR3/1	やや弱	やや弱	φ 1mm～3mm 大の黄色砂粒 5% 褐色スコリア 3% 炭化物少量含む
7 暗褐色	7.5 YR3/1	やや強	やや強	φ 1mm～3mm 大の黄色砂粒 3% φ 1cm～3cm 大の小礫 3% スコリア粒混じる
8 黒褐色	7.5 YR3/1	やや強	やや強	φ 1mm～3mm 大の黄色砂粒 3% φ 1cm～3cm 大の小礫 5% スコリア粒混じる
9 黒褐色	5YR3/1	やや弱	やや強	φ 1mm～3mm 大の黄色砂粒 3% φ 1cm～3cm 大の小礫 3% 褐色スコリア 5%
10 灰褐色	7.5 YR4/2	やや弱	やや弱	φ 1mm～3mm 大の黄色砂粒 5% φ 3cm～5cm 大の小礫 5% 褐色スコリア 5%
11 黒色	7.5 YR2/1	やや弱	やや強	φ 1mm～5mm 大の黄色砂粒 5% φ 3cm～5cm 大の小礫 5% 褐色スコリア 7% 炭化物混じる
12 黒色	7.5 YR2/1	やや強	強	φ 1mm～5mm 大の黄色砂粒 5% φ 3cm～5cm 大の小礫 7% 褐色スコリア 5% 炭化物混じる
13 黒褐色	7.5 YR3/1	やや強	やや強	φ 1mm～3mm 大の黄色砂粒 3% φ 1cm～3cm 大の小礫 3% 褐色スコリア 3%
14 暗褐色	5YR3/3	やや強	やや弱	φ 1mm～3mm 大の黄色砂粒 5% φ 3cm～5cm 大の小礫 5% 褐色スコリア 1%
15 黒褐色	7.5 YR3/1	やや強	やや強	φ 1mm～3mm 大の黄色砂粒 7% φ 1cm～3cm 大の小礫 3% スコリアを含む砂質土がブロック状に混じる
16 黒褐色	7.5 YR3/2	やや強	やや強	φ 1mm～3mm 大の黄色砂粒 5%、φ 10cm～15cm 大の小礫 3% スコリアを含む砂質土がブロック状に混じる
17 黒褐色	7.5 YR3/1	やや強	やや強	φ 1mm～3mm 大の黄色砂粒 3%、φ 1cm～3cm 大の小礫 5% スコリアを含む砂質土がブロック状に混じる
18 黒褐色	7.5 YR3/2	やや強	やや強	φ 1mm～3mm 大の黄色砂粒 3%、φ 3cm～5cm 大の小礫 5% スコリアを含む砂質土がブロック状に混じる
19 暗褐色	10YR3/2	やや弱	やや弱	φ 1mm～5mm 大の黄色砂粒 5%
20 暗褐色	10YR3/2	やや弱	やや弱	φ 1mm～5mm 大の黄色砂粒 5%

西溝	色調	粘性	繰り	備考
1 灰白色	7.5 Y	弱	弱	φ 5mm～10mm 大の砂礫
2 黒色	7.5 YR2/1	強	やや強	φ 1mm～3mm 大の黄色砂粒 5% スコリア粒を少量含むシルト質土
3 暗赤灰色	2.5 YR3/1	やや弱	やや弱	φ 1mm～3mm 大の黄色砂粒 3%
4 黒褐色	5YR3/1	やや強	やや弱	φ 1mm～3mm 大の黄色砂粒 5% 褐色スコリア 1% 炭化物少量含む
5 暗褐色	10YR3/3	やや強	やや強	φ 1mm～5mm 大の黄色砂粒 3% φ 1cm～3cm 大の小礫を微量に含む
6 赤灰色	2.5 YR4/1	やや弱	弱	φ 1mm～3mm 大の黄色砂粒 3% φ 3cm～5cm 大の小礫 7% 褐色スコリア 1%
7 黒色	10YR2/1	やや強	やや強	φ 3mm～5mm 大の黄色砂粒 3% φ 3cm～5cm 大の小礫 7%
8 暗赤灰色	2.5 YR3/1	やや強	やや強	φ 1mm～3mm 大の黄色砂粒 7% φ 1cm～3cm 大の小礫 3% スコリアを含む砂質土がブロック状に混じる
9 黒褐色	10YR3/1	やや強	やや弱	φ 1mm～3mm 大の黄色砂粒 5% φ 10cm～15cm 大の小礫 3% スコリアを含む砂質土がブロック状に混じる
10 黒褐色	7.5 YR3/2	やや強	やや強	φ 1mm～3mm 大の黄色砂粒 3% φ 1cm～3cm 大の小礫 5% スコリアを含む砂質土がブロック状に混じる
11 黒褐色	10YR3/1	やや強	やや強	φ 1mm～3mm 大の黄色砂粒 3% φ 3cm～5cm 大の小礫 5% スコリアを含む砂質土がブロック状に混じる
12 暗赤灰色	2.5 YR3/1	やや強	やや強	φ 1mm～3mm 大の黄色砂粒 3% φ 1cm～3cm 大の小礫 5% スコリア粒 7% 混じる
13 にぶい黄褐色	10YR4/3	やや弱	やや弱	φ 3mm～5mm 大の黄色砂粒 3% スコリア粒を少量含む
14 関灰色	10YR4/1	弱	弱	φ 3mm～5mm 大の黄色砂粒 3% スコリア粒を多量に含む 炭化物を少量含む

東溝	色調	粘性	繰り	備考
1 灰白色	7.5 Y	弱	弱	φ 5mm～10mm 大の砂礫
2 黒色	7.5 YR2/1	強	やや強	φ 1mm～3mm 大の黄色砂粒 5% スコリア粒を少量含むシルト質土
3 黒褐色	10YR3/2	やや強	やや強	φ 1mm～3mm 大の黄色砂粒 5% 炭化物少量含む
4 黒褐色	10YR3/1	やや弱	やや弱	φ 1mm～3mm 大の黄色砂粒 5% φ 1cm～3cm 大の小礫を微量に含む
5 黒褐色	7.5 YR3/1	やや弱	やや強	φ 1mm～3mm 大の黄色砂粒 5% φ 10cm の小礫を微量に含む
6 黒色	7.5 YR2/1	やや弱	やや弱	φ 1mm～3mm 大の黄色砂粒 5% 褐色スコリア少含む φ 1cm の小礫を微量に含む
7 黒色	7.5 YR2/1	やや強	やや強	φ 1mm～3mm 大の黄色砂粒 3% φ 3cm～5cm 大の小礫 5% 褐色スコリア 3%
8 黒褐色	7.5 YR3/1	やや弱	やや弱	φ 1mm～3mm 大の黄色砂粒 5% φ 1cm～3cm 大の小礫 3% 褐色スコリア 3%
9 黒褐色	7.5 YR2/2	やや強	やや強	φ 1mm～3mm 大の黄色砂粒 3% φ 5cm～10cm 大の小礫 7% 褐色スコリア 3%
10 黒色	10YR2/1	やや弱	やや強	φ 1mm～3mm 大の黄色砂粒 3% φ 5cm～10cm 大の小礫 1% スコリアを含む砂質土がブロック状に混じる
11 黒褐色	7.5 YR3/1	やや強	やや弱	φ 1mm～3mm 大の黄色砂粒 3% φ 3cm～5cm 大の小礫 3% スコリアを含む砂質土がブロック状に混じる
12 黒褐色	7.5 YR3/1	やや強	やや弱	φ 1mm～3mm 大の黄色砂粒 3% φ 1cm～3cm 大の小礫 7% スコリアを含む砂質土がブロック状に混じる
13 黒褐色	10YR2/2	やや弱	やや弱	φ 1mm～5mm 大の黄色砂粒 3% 褐色スコリア 2% 炭化物、軽石少量含む
14 黒褐色	10YR3/1	弱	弱	φ 1mm～5mm 大の黄色砂粒 3% スコリア粒を多量に含む 炭化物を少量含む
15 黒褐色	7.5 YR3/1	やや強	やや弱	φ 1mm～5mm 大の黄色砂粒 5% φ 1cm～3cm 大の小礫 3% 褐色スコリア 3%
16 黒褐色	7.5 YR2/1	やや弱	やや弱	φ 1mm～5mm 大の黄色砂粒 5% φ 1cm～3cm 大の小礫 3% 褐色スコリア 3% 炭化物少量含む
17 黒褐色	7.5 YR2/1	やや強	やや強	φ 1mm～5mm 大の黄色砂粒 5% φ 1cm～5cm 大の小礫 7% 褐色スコリア 3% 炭化物少量含む 遺物混じる
18 黒色	10YR2/1	やや弱	やや弱	φ 1mm～5mm 大の黄色砂粒 5% 褐色スコリア 3% 炭化物少量含む
19 黒褐色	10YR3/1	やや弱	やや弱	φ 1mm～5mm 大の黄色砂粒 5%
20 黒色	10YR2/1	やや弱	やや弱	φ 1mm～5mm 大の黄色砂粒 5%

墳丘	色調	粘性	繰り	備考
① 暗赤褐色	5YR3/2	やや強	やや強	φ 1mm～3mm 大の黄色砂粒 3% φ 1mm 大の小礫 7% 褐色スコリア 7%
② 黒褐色	2.5 YR3/2	弱	やや弱	φ 1mm～3mm 大の黄色砂粒 10% 褐色スコリア 2%



第20図 第2号方形周溝墓主体部平面図・断面図

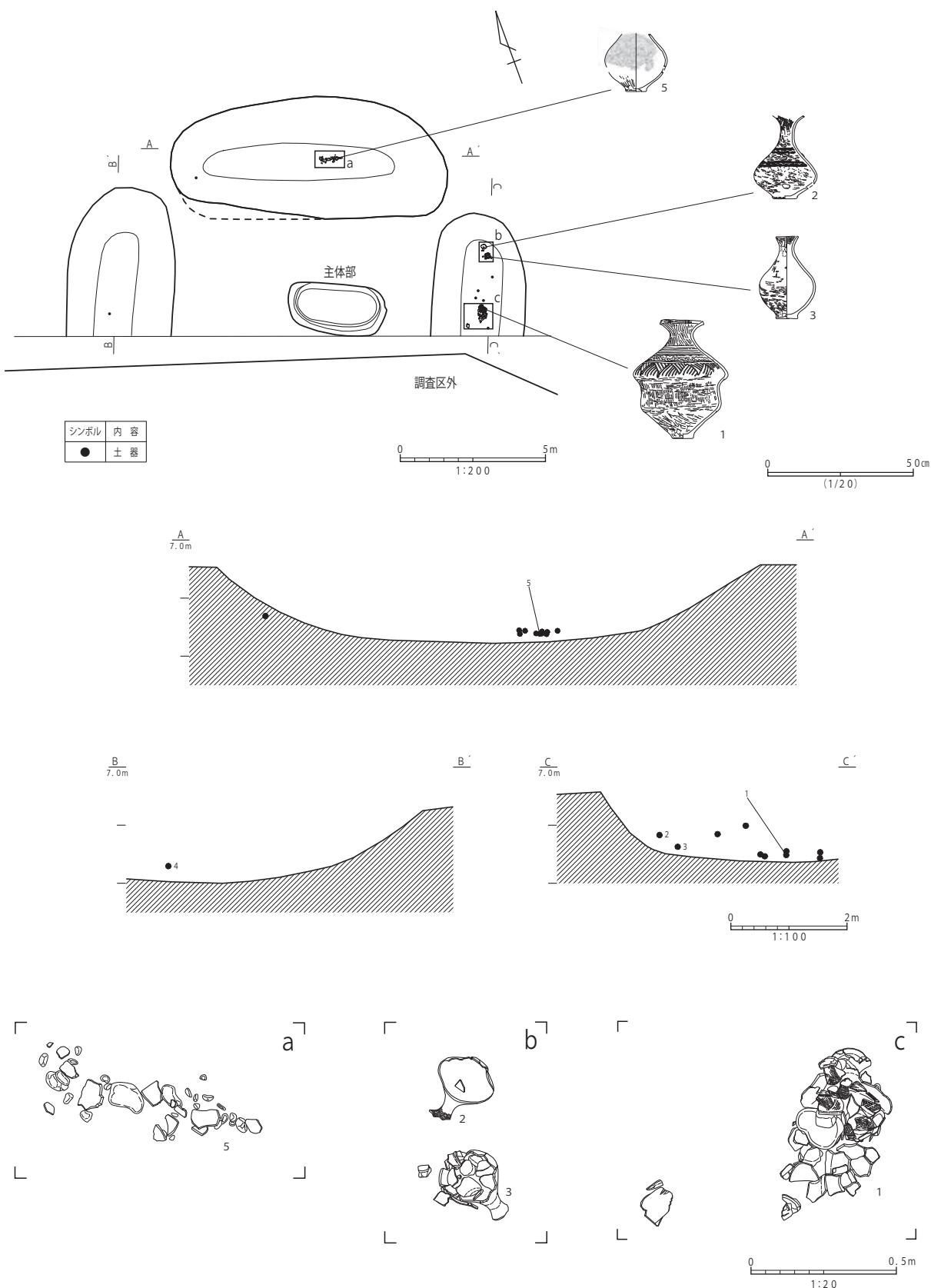
立ち上がる。墳丘側の覆土に砂礫混じりの黒色土・黒褐色土が多く堆積しており、墳丘の崩落による堆積の可能性がある。西溝は確認部分で長さ 5.2 m、幅 3.6m、確認面からの深さ約 1.2m を測る。確認面の海拔高は 6.4m である。断面は逆台形を呈し、底面は緩く丸みを帯びる。墳丘側がきつく立ち上がる。
【主体部】

主体部は方台部中央やや北東寄りに検出された。長さ 3.24m、幅 1.71m の隅丸長方形を呈するもので、墳丘上から 0.46m 下の褐色スコリア層まで掘り込んでいる。長軸方位は N-65° -W である。立ち上がりは、南縁辺部を中心にコの字状に段を有し緩やかに立ち上がる。底面は平坦となっていた。副葬品は確認されなかった。

【出土遺物】(第 22・23・24 図)

遺物は、北・東・西溝より土器を出土している。西溝から出土した土器は小片 1 点を除いて、遺物は北側・東溝に集中する。遺物は大半が溝底付近の堆積土に含まれており、上層の砂礫層に含まれる遺物はごく少数である。中層以下の覆土には 5 cm 大以上の礫も多く混じっており、特に北溝から出土した遺物は礫と混じった土器片が多く、流れ込んだ際に破碎したものと推測される。東溝からは壺形土器が 3 点出土しており、3 点とも破碎されながらもまとまった状態で出土しており、ほぼ完形に近い状態に復元された。いずれも溝底面からわずかに浮いている状態であったことから、もともと墳丘上に置かれていたが周溝内に流れ込んでしまったものと思われる。

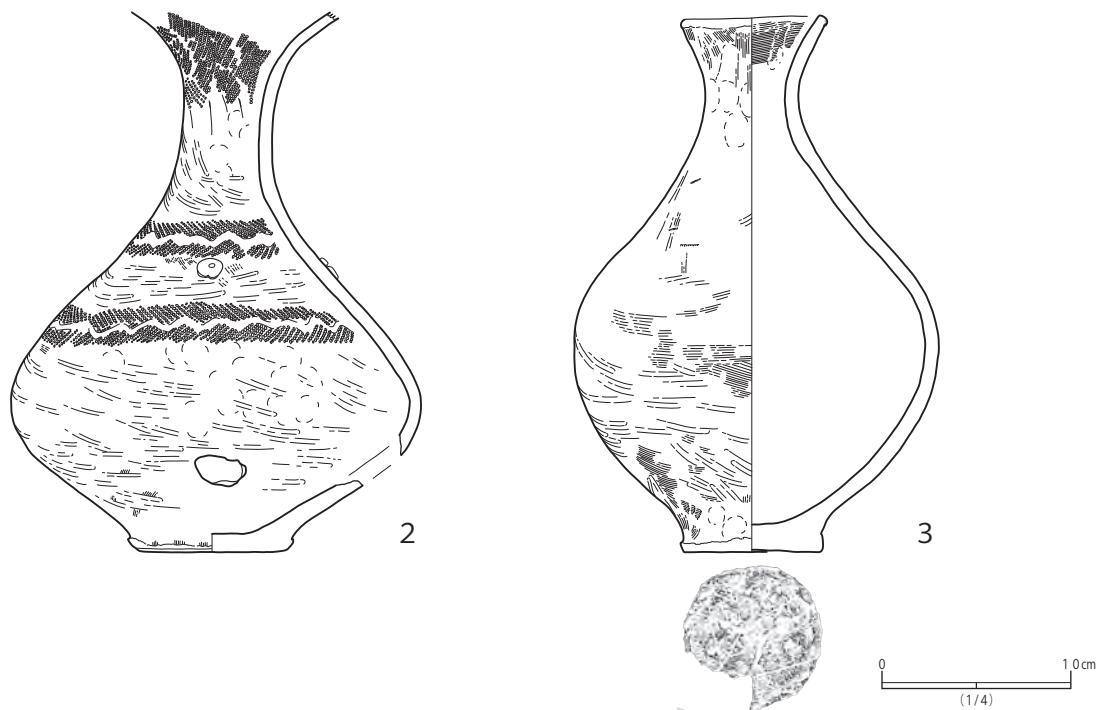
以下、図示が可能であった 6 点について述べる。器種はすべて弥生時代中期の壺で、1～3 はほぼ完形品、4 は壺の口縁部、5 は壺の胴部から底部にかけての破片である。



第21図 第2号方形周溝墓遺物出土状況図



第 22 図 第 2 号方形周溝墓出土遺物実測図（1）



第23図 第2号方形周溝墓出土遺物実測図（2）

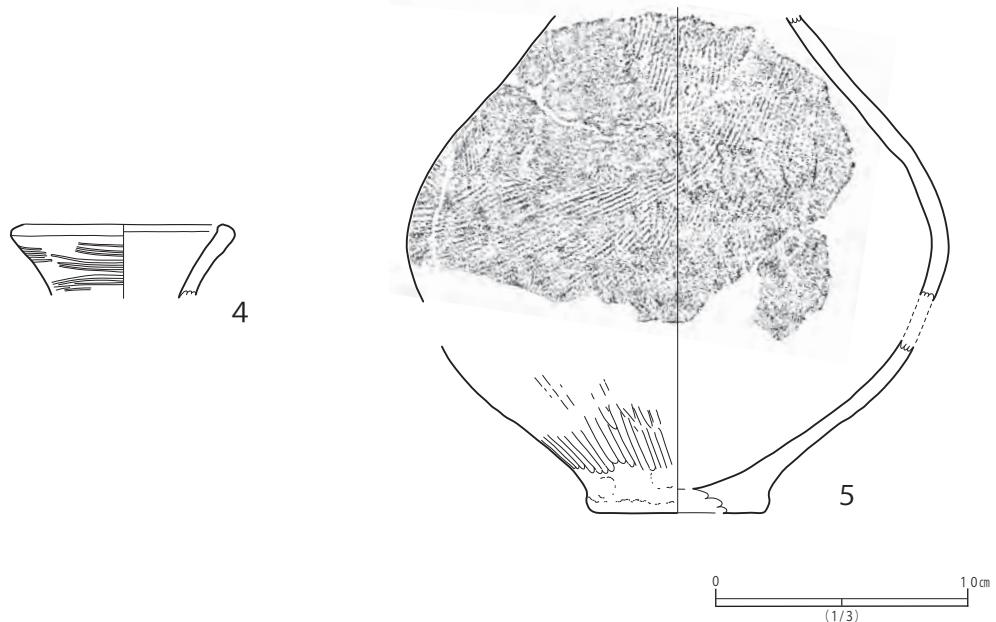
1は東溝底面直上から出土した特異な器形を呈する壺形土器である。壺と甕を組み合わせたような器形を呈し、肩部に最大径をもつ。突出した底部は大きく外傾して開き、胴部下半で屈曲し、内湾しながら肩部にむかって立ち上がる。口縁部は縁を取りした単純口縁で、口縁部から肩部にかけて文様帯を有する。口縁部には擬似流線文を施し、頸部から肩部にかけては、上から6条1単位の櫛描沈線を横位に4段巡らし、さらに2段の櫛描波状文を施す。下位には櫛描直線を横位に1段区画したのち、ヘラ描沈線による複合鋸歯文を肩部最大径まで充填される。下位に区画線は施されない。櫛描施文に用いられた施文具は6本1単位が共通しており、同一の施文具を使用されていたと推測される。外面調整はハケメを基調として、胴部にはヨコミガキが認められる。内面は口縁部周辺にハケ調整が認められるが、その他の内面の状態は粗悪で脆弱な印象を受ける。胴部下位には欠損部分が認められるが、意図的に打ち欠いたものであるかは判断が難しい。口径 14.0cm、器高 40.9cm、底径 6.5cm、胴部最大径 32.8cm である。

2は東溝北端部底面付近からやや浮いた状態で出土した細頸壺である。口縁は「ハ」の字状に大きく開き口縁端部は欠損している。頸部は細身を帶びて、胴部は中央に最大径をもつ算盤状の器形を呈し、底部は突出する。文様構成は口縁部と頸部から胴部にかけて文様帯を有し、口縁部にはLR単節縄文が施される。頸部から胴部にかけては羽状縄文とその中央に一本描きの波状沈線を横位付加する縄文帯が2段認められ、宮ノ台式に影響を受けていると推測される。上段の縄文帯直下には有孔円形浮文が1つ貼付される。外面調整は全体的にミガキが施されており、頸部には斜めミガキ、胴部にはヨコミガキが認められる。胴部下半に穿孔が確認される。時期は東駿河Ⅲ-4・5様式期に属する。器高 28.5cm、底径 7.0cm、胴部最大径 21.7cm である。

3は東溝北端部から出土した無文の壺である。やや肩の張った丸みのある胴部形態で底部は突き出した器形を呈する。外面全体ハケメ調整を施したのち、頸部をタテミガキ、胴部をヨコミガキ、胴部下部に斜めミガキによって整える。口縁部には指頭痕が観察される。頸部にはわずかに赤彩が残存する。内面調整は口縁部周辺をヨコハケメで整え、全体はナデ調整である。底部には木葉痕が認められる。口径7.4cm、器高28.3cm、底径7.2cm、胴部最大径19.2cmである。

4は西溝覆土から出土した壺の口縁部である。口縁部は外傾してハの字状に開き、口唇部をやや内側に折り返すように整形する。内外面ともにナデによる調整を施したのち、外面に櫛描沈線を施文する。口径8.9cmである。

5は壺の頸部から底部にかけての破片である。胴部及び底部は接合しなかったものの、出土状況から同一個体と認識し図面復元した。外面はナデによる調整後、沈線で区画のない縄文帯を施文する。横位に巡る縄文帯を基本とするが、部分的に縦位に走る縄文施文が散見され、規則性に乏しい。底部は突き出し、内湾しながら立ち上がる。外面はミガキで仕上げられ、内面はナデ調整である。



第24図 第2号方形周溝墓出土遺物実測図（3）

第7表 第2号方形周溝墓出土遺物観察表

図版番号	遺物番号	出土地点	器種	口径 器高 底径	胎土	焼成	色調	残存	形態の特徴	手法の特徴	備考
22図1	61	東溝	壺	14.0cm	ϕ 1mm の白色砂粒 3% 含む	良	10YR8/6 黄橙色	ほぼ完形	肩部に最大径を有し大きく張る 胴部でくびれ底部にむかって直 線的に窄まる	外面 ハケ調整後、口縁部に疑似流水文 肩部に櫛描直線と波状文 ヘラ描複合鋸歯文の組み合わせ 内面 ナデ調整 表面脆弱	弥生時代 中期後葉
				40.9cm							
				6.5cm							
23図2	59	東溝	細頸壺	—	ϕ 1mm の白色砂粒 黒色砂粒チャート 3% 含む	良	7.5YR7/6 橙色	頸部～底部	口縁部は大きく外反する 胴部穿孔	外面 胴部上半に区画のない2段の羽状縄文 口唇部に RL 繩文 有孔円形浮文 無文部ミガキ 内面 ナデ調整 口縁部にヨコハケメ残存	弥生時代 中期後葉
				28.5cm							
				7.0cm							
23図3	60	東溝	短頸壺	7.4cm	ϕ 1mm の白色砂粒 黒色砂粒チャート 2% 含む	良	7.5YR7/6 橙色	ほぼ完形	口縁部はやや外傾する 頸部に赤彩わずかに残存	外面 ハケ調整後、ミガキ 内面 口縁部横位ハケ	弥生時代 中期後葉
				28.3cm							
				7.2cm							
24図4	63	西溝	壺	(8.9cm)	ϕ 1mm の白色砂粒 5% 含む	良	10YR6/4 にぶい黄橙色	口縁部	口縁部は外傾し、口唇部を折り 返す	外面 横位の櫛描沈線 内面 ナデ	弥生時代 中期後葉
				(2.8cm)							
				—							
24図5	71	北溝	壺	—	ϕ 1mm の白色砂粒 2% 黒色砂粒 5% 含む	良	10YR7/4 にぶい黄橙色	肩部～底部	丸みを帯びた胴部に底部は突出 する	外面 区画の無い縄文帯 胴部下部にタテミガキ 内面 ナデ	弥生時代 中期後葉
				(20.1cm)							
				(6.8cm)							

第4節 第3号方形周溝墓と出土遺物

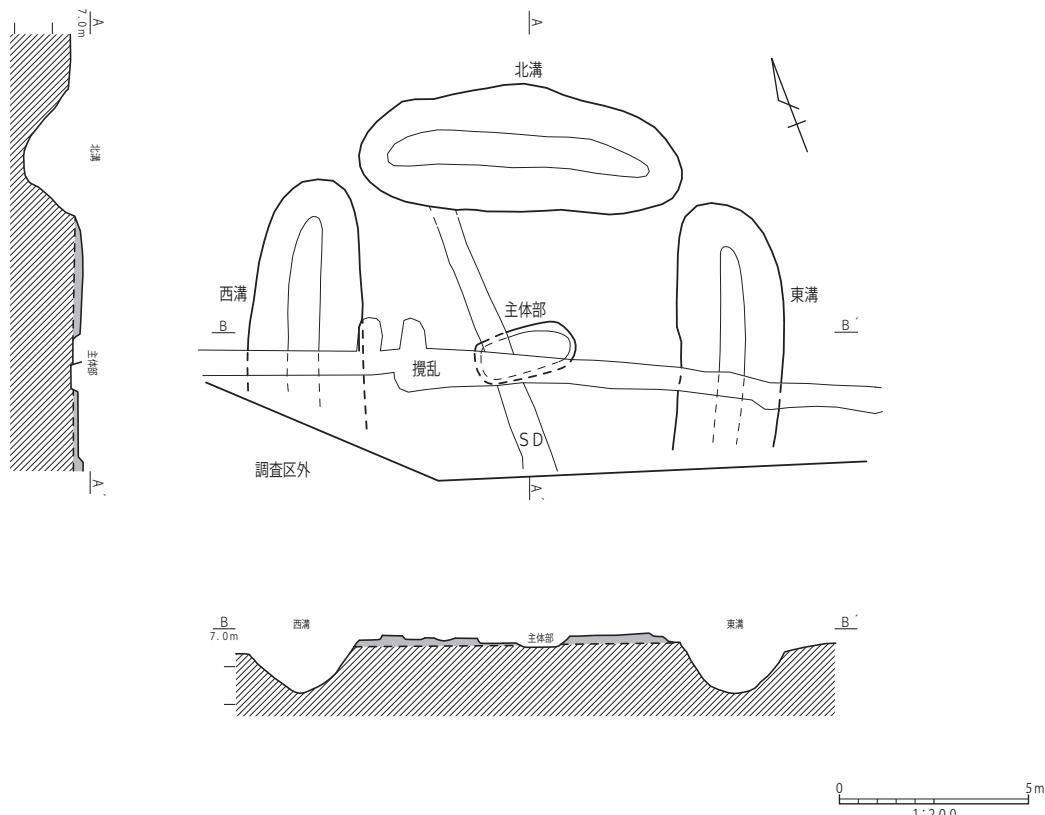
調査区中央部の154・155-25・26グリッドから検出され、HD02の東側に隣接する。調査区外となるため、北側周溝と東側及び西側周溝の一部を確認した。遺構の規模は確認部分で東西14.2m、南北10.3mを測り、周溝は隅が切れるタイプで方形に廻る。墳丘側は直線的で外辺は弧状に膨らむ形を呈する。全体はHD01と同様の形態であると推測される。

【方台部】

方台部の規模は東西10.6m、南北8.2mで、ほぼ正方形を呈すると考えられる。周溝底面からの高さは最大1.6mである。東西に水道管による攪乱、南北には後世の溝状遺構が重複し欠損箇所が多い。HD02同様、墳丘の盛土と推測される約0.2mの堆積土が第6層褐色スコリア層直上に残存していることが確認された。主体部は方台部中央に1基確認した。

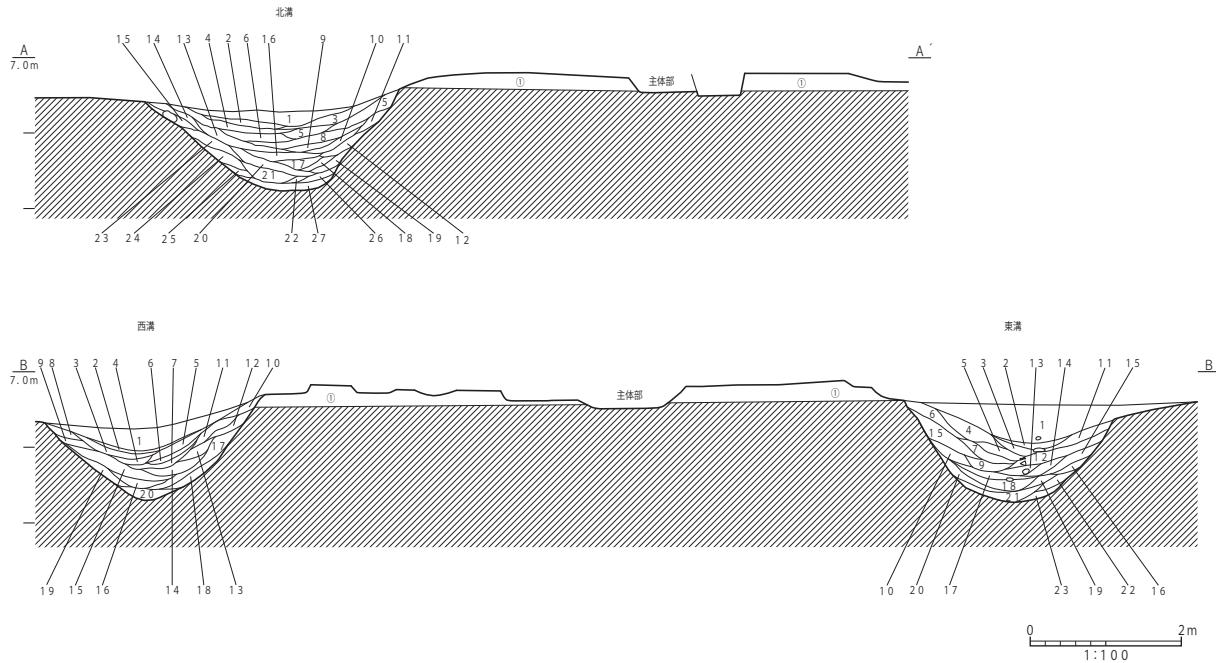
【周溝】

北溝は長さ8.6m、幅3.4m、確認面からの深さ約1.3mを測る。確認面の海拔高6.5mである。断面は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦となっている。立ち上がり部分は古代の住居址や溝状遺構と重複し、明確には確認できない。東溝は確認部分で長さ7.1m、幅2.8m、確認面からの深さ約1.3mを測る。確認面の海拔高は6.4mである。その他の周溝に比べ北側端部がやや膨らむ。断面は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦で、墳丘側がきつく立ち上げるが、外側は大きく開く。墳丘側の覆土に砂礫混じりの黒色土・黒褐色土が多く堆積しており、墳丘の崩落による堆積の可能性がある。西溝は確認部分で長さ6.6m、幅2.9m、確認面からの深さ約1.1mを測る。確認面の海拔高6.6mである。断面は逆台形を呈する。底面はやや平坦で墳丘側がきつく立ち上がる。



第25図 第3号方形周溝墓平面図・断面図

第Ⅲ章 調査結果



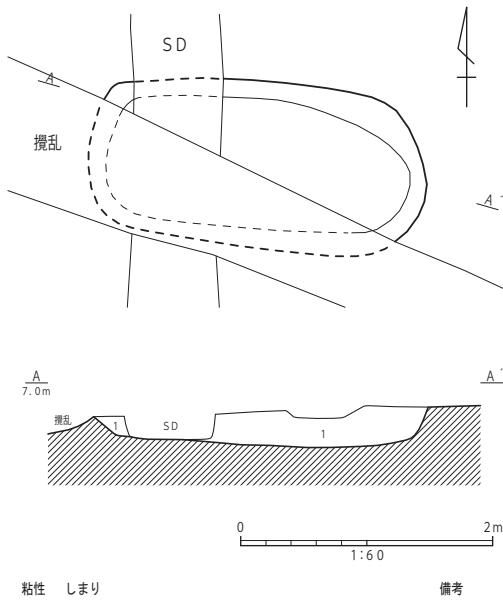
北溝	色調	粘性	繰り	備考
1 黒色	10 YR 1.7 / 1	弱	弱	φ 1mm~10mm大の砂礫 10% 褐色スコリア 7%
2 灰白色	7.5 Y	弱	弱	φ 1mm~5mm大の緑黄色砂粒 2% φ 1cm大の小礫 10%
3 黒色	10 YR 2 / 1	やや弱	やや弱	φ 1mm~5mm大の砂粒 1.5% 褐色スコリア 10%
4 黒褐色	10 YR 2 / 2	やや弱	やや強	φ 1mm~3mm大の砂粒 7% 褐色スコリア 10% φ 1cm大の小礫含む
5 黒色	7.5 YR 2 / 1	やや弱	やや強	φ 1mm~5cm大の小礫 5% 褐色スコリア 3% 炭化物少量含む
6 黒褐色	7.5 YR 3 / 1	やや強	やや強	φ 1mm~5mm大の黄色砂粒 7% φ 1cm大の小礫 5% 褐色スコリア 10%
7 黒褐色	7.5 YR 2 / 2	やや弱	やや強	φ 1mm~3mm大の黄色砂粒 10% φ 1cm~3cm大の小礫 5% 褐色スコリア 7%
8 黒褐色	7.5 YR 3 / 2	やや強	やや強	φ 1mm~3mm大の黄色砂粒 1.0% φ 1cm大の小礫 5% 褐色スコリア 15%
9 黒褐色	7.5 YR 3 / 1	やや弱	やや強	φ 1mm~3mm大の黄色砂粒 7% φ 1cm~3cm大の小礫含む 褐色スコリア 7%
10 黒褐色	7.5 YR 3 / 1	やや強	やや強	φ 1mm~3mm大の黄色砂粒 5% 褐色スコリア 3% φ 1cm大の小礫含む
11 黒褐色	7.5 YR 3 / 2	やや弱	やや弱	φ 1mm~3mm大の黄色砂粒 7% 褐色スコリア 10%
12 黒褐色	10 YR 3 / 2	やや弱	やや弱	φ 1mm~3mm大の黄色砂粒 5% φ 1cm大の小礫混じる
13 黒色	10 YR 2 / 1	やや弱	やや強	φ 1mm~3mm大の黄色砂粒 5% 褐色スコリア 3% φ 1cm大の小礫少量含む
14 黒褐色	7.5 YR 3 / 2	やや弱	やや弱	φ 1mm~5mm大の黄色砂粒 5% 褐色スコリア 5%
15 黒褐色	10 YR 3 / 1	弱	弱	φ 1mm~3mm大の黄色砂粒 1.5% φ 2.0cm大の礫含む
16 黒色	7.5 YR 2 / 1	強	強	φ 1mm~5mm大の黄色砂粒 3% φ 1cm~3cm大の小礫 7% 褐色スコリア 3% 炭化物少量混じる
17 黒色	7.5 YR 2 / 2	強	強	φ 1mm~5mm大の黄色砂粒 3% φ 1cm~3cm大の小礫 10% 褐色スコリア 3% バシス含む
18 黒褐色	10 YR 3 / 2	やや弱	やや弱	φ 1mm~3mm大の黄色砂粒 5% 褐色スコリア 3%
19 黒褐色	10 YR 3 / 2	弱	やや弱	φ 1mm~3mm大の黄色砂粒 5%
20 黒色	7.5 YR 2 / 1	やや強	やや強	φ 1mm~5mm大の黄色砂粒 10% 黄色砂粒 3% 褐色スコリア 5% バシス含む
21 黒褐色	7.5 YR 3 / 1	強	強	φ 1mm~5mm大の黄色砂粒 5% φ 1cm~5cm大の小礫 15% 褐色スコリア 10%
22 黒褐色	10 YR 3 / 1	やや弱	やや弱	φ 1mm~3mm大の黄色砂粒 3% φ 1cm大の小礫含む
23 黒褐色	10 YR 3 / 1	やや強	やや強	φ 1mm~5mm大の黄色砂粒 10% 黄色砂粒 1% 上部に褐色スコリア多く 5%
24 灰黄褐色	10 YR 4 / 2	弱	弱	φ 1mm~5mm大の黄色砂粒 3% φ 1cm~5cm大の砂礫 3%
25 灰黄褐色	10 YR 5 / 2	弱	弱	φ 1mm~3mm大の黄色砂粒 3%
26 灰黄褐色	10 YR 4 / 2	弱	弱	φ 1mm~5mm大の黄色砂粒 1.5%
27 灰オリーブ色	5 Y 4 / 2	弱	弱	φ 1mm~3mm大の緑黄色砂粒 10% 黑色砂粒混じる

西溝	色調	粘性	繰り	備考
1 灰白色	7.5 Y	弱	弱	φ 5mm~10mm大の砂礫
2 黒色	7.5 YR 2 / 1	強	やや強	φ 1mm~3mm大の黄色砂粒 5% スコリア粒を少量含むシルト質土
3 黒褐色	7.5 YR 3 / 1	やや強	やや強	φ 1mm~5mm大の黄色砂粒 5% φ 5cm大の小礫 5% 褐色スコリア 3%
4 黒褐色	7.5 YR 3 / 1	やや強	やや強	φ 1mm~5mm大の黄色砂粒 7% 褐色スコリア 5%
5 黒色	10 YR 2 / 1	弱	弱	φ 1mm~3mm大の黄色砂粒 2.0% φ 1cm大の小礫 10% 褐色スコリア 5%
6 黒褐色	10 YR 2 / 2	弱	やや弱	φ 1mm~3mm大の黄色砂粒 1.5% φ 1cm~3cm大の小礫 7% 褐色スコリア 5%
7 黒色	10 YR 2 / 1	弱	弱	φ 1mm~3mm大の黄色砂粒 1.5% φ 1cm~3cm大の小礫 5% 褐色スコリア 3%
8 黒褐色	7.5 YR 3 / 2	やや強	強	φ 1mm~5mm大の黄色砂粒 7% φ 1cm~5cm大の小礫 10% 褐色スコリア 5%
9 黒褐色	7.5 YR 2 / 1	やや強	強	φ 1mm~3mm大の黄色砂粒 1.0% φ 1cm~5cm大の小礫 10% 褐色スコリア 3%
10 黒色	10 YR 2 / 2	やや弱	やや弱	φ 1mm~3mm大の黄色砂粒 5% φ 1cm大の小礫 1% 褐色スコリア 7%
11 黒褐色	10 YR 2 / 2	やや弱	やや弱	φ 1mm~3mm大の黄色砂粒 5% 褐色スコリア 5% φ 1.0cm以上の礫含む
12 黒褐色	10 YR 2 / 2	やや弱	やや弱	φ 1mm~3mm大の黄色砂粒 3% φ 1cm~5cm大の小礫 10% 褐色スコリア 5%
13 黒褐色	7.5 YR 3 / 1	やや弱	やや弱	φ 1mm~3mm大の黄色砂粒 3% φ 1cm~5cm大の小礫 5%
14 黒色	7.5 YR 2 / 1	やや弱	やや弱	φ 1mm~3mm大の黄色砂粒 1.0% φ 1cm~3cm大の小礫 10% 褐色スコリア 7%
15 黒色	7.5 YR 2 / 1	やや強	やや弱	φ 1mm~3mm大の黄色砂粒 1.0% φ 1cm~5cm大の小礫 10% φ 5cm以上の礫 3% 褐色スコリア 4% 炭化物含む
16 黒色	7.5 YR 2 / 1	やや弱	やや弱	φ 1mm~3mm大の黄色砂粒 7% φ 1cm~5cm大の小礫 7% 褐色スコリア 5% 炭化物少量混じる
17 黒褐色	7.5 YR 2 / 2	やや強	やや強	φ 1cm~5cm大の小礫 1% スコリアを含む質土がブロック状に混じる
18 黒褐色	10 YR 3 / 1	やや弱	やや弱	φ 1mm~3mm大の黄色砂粒 5% φ 1cm~3cm大の小礫 5% スコリアを含む砂質土がブロック状に混じる
19 黒褐色	10 YR 3 / 1	弱	弱	φ 1mm~3mm大の黄色砂粒 7% φ 1cm~3cm大の小礫 3%
20 黒色	7.5 YR 2 / 1	弱	弱	φ 1mm~3mm大の黄色砂粒 7% φ 1cm~5cm大の小礫 3% 炭化物混じる

第26図 第3号方形周溝墓土層断面図

東溝	色調	粘性	繰り	備考
1 灰白色	7. 5 Y	弱	弱	$\phi 5\text{mm} \sim 10\text{mm}$ 大の砂礫
2 黒色	7. 5 YR 2/1	強	やや強	$\phi 1\text{mm} \sim 3\text{mm}$ 大の黄色砂粒 5% スコリア粒を少量含むシルト質土
3 黒色	7. 5 YR 2/1	やや弱	やや弱	$\phi 1\text{mm} \sim 3\text{mm}$ 大の黄色砂粒 5% 褐色スコリア 5% $\phi 1\text{cm} \sim 3\text{cm}$ 大の小礫を微量に含む 岩化物少量含む
4 黒褐色	7. 5 YR 3/1	弱	やや弱	$\phi 1\text{mm} \sim 3\text{mm}$ 大の黄色砂粒 5% 褐色スコリア 5%
5 黒褐色	7. 5 YR 2/2	やや弱	やや強	$\phi 1\text{mm} \sim 3\text{mm}$ 大の黄色砂粒 5% 褐色スコリア 5%
6 黒褐色	10 YR 3/2	やや強	やや強	$\phi 1\text{mm} \sim 3\text{mm}$ 大の黄色砂粒 7% $\phi 1\text{mm} \sim 3\text{cm}$ 大の小礫 5% スコリアを含む砂質土がブロック状に混じる
7 黒色	7. 5 YR 2/1	弱	弱	$\phi 1\text{mm} \sim 3\text{mm}$ 大の黄色砂粒 5% $\phi 1\text{cm} \sim 3\text{cm}$ 大の小礫 3% スコリアを含む砂質土がブロック状に混じる
8 黒褐色	7. 5 YR 2/2	やや強	やや強	$\phi 3\text{mm} \sim 5\text{mm}$ 大の黄色砂粒 5% $\phi 1\text{cm} \sim 3\text{cm}$ 大の小礫 5% スコリアを含む砂質土がブロック状に混じる
9 黒色	7. 5 YR 2/1	弱	弱	$\phi 3\text{mm} \sim 5\text{mm}$ 大の黄色砂粒 7% $\phi 1\text{cm} \sim 3\text{cm}$ 大の小礫 3% スコリアを含む砂質土がブロック状に混じる
10 黒褐色	7. 5 YR 2/1	やや強	やや強	$\phi 3\text{mm} \sim 5\text{mm}$ 大の黄色砂粒 5% $\phi 1\text{cm} \sim 3\text{cm}$ 大の小礫 3% スコリアを含む砂質土がブロック状に混じる
11 黒褐色	7. 5 YR 3/2	強	強	$\phi 1\text{mm} \sim 3\text{mm}$ 大の黄色砂粒 5% $\phi 1\text{cm} \sim 3\text{cm}$ 大の小礫 5% 褐色スコリア 5% 1.5cm以上の大礫混じる
12 黒褐色	7. 5 YR 3/1	強	強	$\phi 3\text{mm} \sim 5\text{mm}$ 大の黄色砂粒 5% $\phi 3\text{cm} \sim 5\text{cm}$ 大の小礫 7% 褐色スコリア 5% 岩化物 遺物含む
13 黒色	10 YR 2/1	弱	やや強	$\phi 3\text{mm} \sim 5\text{mm}$ 大の黄色砂粒 5% $\phi 3\text{cm} \sim 5\text{cm}$ 大の小礫 10% 褐色スコリア 7% 岩化物 遺物含む
14 黒色	7. 5 YR 2/1	やや強	やや強	$\phi 3\text{mm} \sim 5\text{mm}$ 大の黄色砂粒 5% $\phi 3\text{cm} \sim 5\text{cm}$ 大の小礫 10% 褐色スコリア 5% 岩化物含む
15 黒褐色	10 YR 3/1	やや弱	やや強	$\phi 3\text{mm} \sim 5\text{mm}$ 大の黄色砂粒 3% $\phi 3\text{cm} \sim 5\text{cm}$ 大の小礫 5% 褐色スコリア 3%
16 黒褐色	10 YR 2/2	弱	弱	$\phi 1\text{mm} \sim 3\text{mm}$ 大の黄色砂粒 5% 褐色スコリア 5%
17 黒色	10 YR 2/1	弱	弱	$\phi 1\text{mm} \sim 3\text{mm}$ 大の黄色砂粒 5% 褐色スコリア 3%
18 黒色	10 YR 2/1	弱	弱	$\phi 3\text{mm} \sim 5\text{mm}$ 大の黄色砂粒 3% スコリア粒を少量含む
19 黒褐色	10 YR 2/2	弱	弱	$\phi 1\text{mm} \sim 3\text{mm}$ 大の黄色砂粒 5% 褐色スコリア 5%
20 黒色	10 YR 2/1	弱	弱	$\phi 1\text{mm} \sim 3\text{mm}$ 大の黄色砂粒 5% 褐色スコリア 5%
21 黒褐色	10 YR 2/2	弱	弱	$\phi 1\text{mm} \sim 3\text{mm}$ 大の黄色砂粒 5% $\phi 1\text{cm} \sim 3\text{cm}$ 大の小礫 5% 褐色スコリア 5%
22 黒褐色	10 YR 3/1	やや弱	やや弱	$\phi 3\text{mm} \sim 5\text{mm}$ 大の黄色砂粒 10% スコリア粒を少量含む
23 黒褐色	10 YR 3/1	やや弱	やや弱	$\phi 3\text{mm} \sim 5\text{mm}$ 大の黄色砂粒 7% スコリア粒を少量含む

墳丘	色調	粘性	繰り	備考
① 暗赤褐色	5 Y 3/2	やや強	やや強	$\phi 1\text{mm} \sim 3\text{mm}$ 大の黄色砂粒 7% $\phi 1\text{cm} \sim 3\text{cm}$ 大の小礫 5% 褐色スコリア 5% 墳丘盛土?

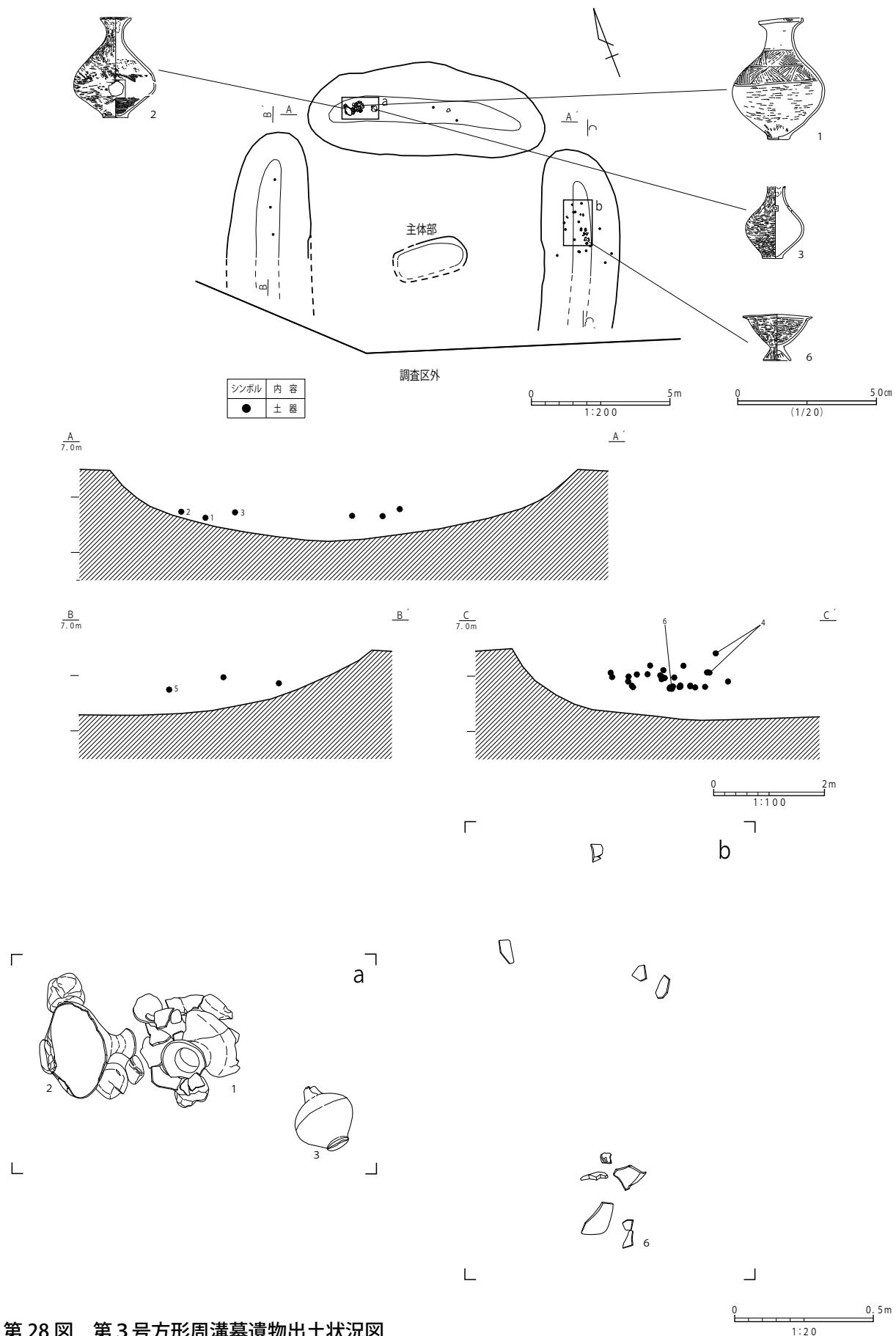


色調 粘性 しまり 備考
1 黒褐色 10 YR 3/1 弱 やや弱 $\phi 1\text{mm} \sim 3\text{mm}$ 大の黄色砂粒 5% $\phi 1\text{mm} \sim 3\text{mm}$ 大の褐色砂粒 7% $\phi 1\text{cm} \sim 3\text{cm}$ 大の小礫 5% 岩化物少量含む

第 27 図 第 3 号方形周溝墓主体部平面図・断面図

【主体部】

主体部は方台部のほぼ中央より検出された。しかしその大半が、攪乱と後世の溝状遺構により削平を受けており、残存するのは全体の 1/3 程度で全容を把握するには至らなかった。確認部分での長さは 2.7m、幅 1.32m、平面形態は隅丸長方形を呈するもので、墳丘上面から 0.3m 下の砂礫層まで掘り込んでいる。長軸方位は N-87° -W であり、HD01、HD02 に比べると長軸方向はやや異なる。底面は全体的に平坦となっているが、東側がやや低く傾斜する。副葬品は確認されなかった。



第28図 第3号方形周溝墓遺物出土状況図

【出土遺物】(第 29 図・30 図)

北溝・東溝より土器を出土している。北溝からは 3 点の壺形土器が西端底面付近からまとまって出土した。HD01・HD02 と同様に大礫が伴って出土する状況であった。そのうち第 30 図 -3 はやや浮いた状態で出土している。東溝からは、覆土中層より多数の土器片が出土した。後の整理作業で土器片の大半が接合され、高坏が完形に近い状態に復元されたことから、流れ込みの段階で破碎したものと推測される。

以下、図化した 6 点について述べる。器種は、1～3 が完形の壺、4・5 は壺小片、6 は高坏である。1 は北溝西端部から出土した受口状口縁の太頸壺である。出土時には土圧や伴った礫によって潰された状態であったが、破碎された土器片を接合してほぼ完形近く復元された。胴部は丸みを帯びた器形を呈し、胴部中央に最大径をもつ。器面全体に赤彩が施される。肩部から胴部上半にかけて文様帶を有し、櫛状工具による 3 本 1 単位の沈線を横位に 3 段巡らして区画し、その間を 2 段の複合鋸歯紋で充填する。無文帶の口縁部から頸部にはタテミガキ、胴部下半にはヨコミガキが加えられており、底部周辺にはハケメがわずかに残る。内面器面の残存状態は極めて悪く、剥落が顕著である。口径 15.8cm、器高 43.8cm、底径 7.0cm、胴部最大径 44.1cm である。

2 は北溝西端部から出土した壺である。胴部は丸みを帯びた器形を呈し、最大径はやや下部に下がる。口縁部は外反しながら立ち上がり、口唇部端部は面取りされ、やや平坦に整えられる。文様は施文されない無文の壺であり、全体をハケ状工具で整えたのち、頸部から肩部にタテミガキ、胴部にヨコミガキを丁寧に加えている。頸部に赤彩がわずかに残存する。口縁部の一部に指頭痕が認められる。内面は口縁部周辺、及び胴部下半にハケメ調整が観察される。胴部中央部は径 5.1cm を測る胴部穿孔が 1 箇所確認される。口径 10.8cm、器高 36.1cm、底径 8.8cm、胴部最大径 29.2cm である。

3 は北溝西端部から出土した壺である。口縁部を欠くが、頸部から底部まで残存し、胴部はやや肩の張った器形を呈する。文様は施文されない無文の壺であるが、ハケメ調整の後、頸部をタテミガキ、胴部ヨコミガキ、胴部下部を斜めミガキで丁寧に整えている。頸部内面には指頭痕がわずかに観察される。胴部上半に径 0.8cm 程の穿孔が 1 箇所認められ、底部には木葉痕を有する。器高 26.0cm、底径 6.4cm、胴部最大径 20.3cm である。

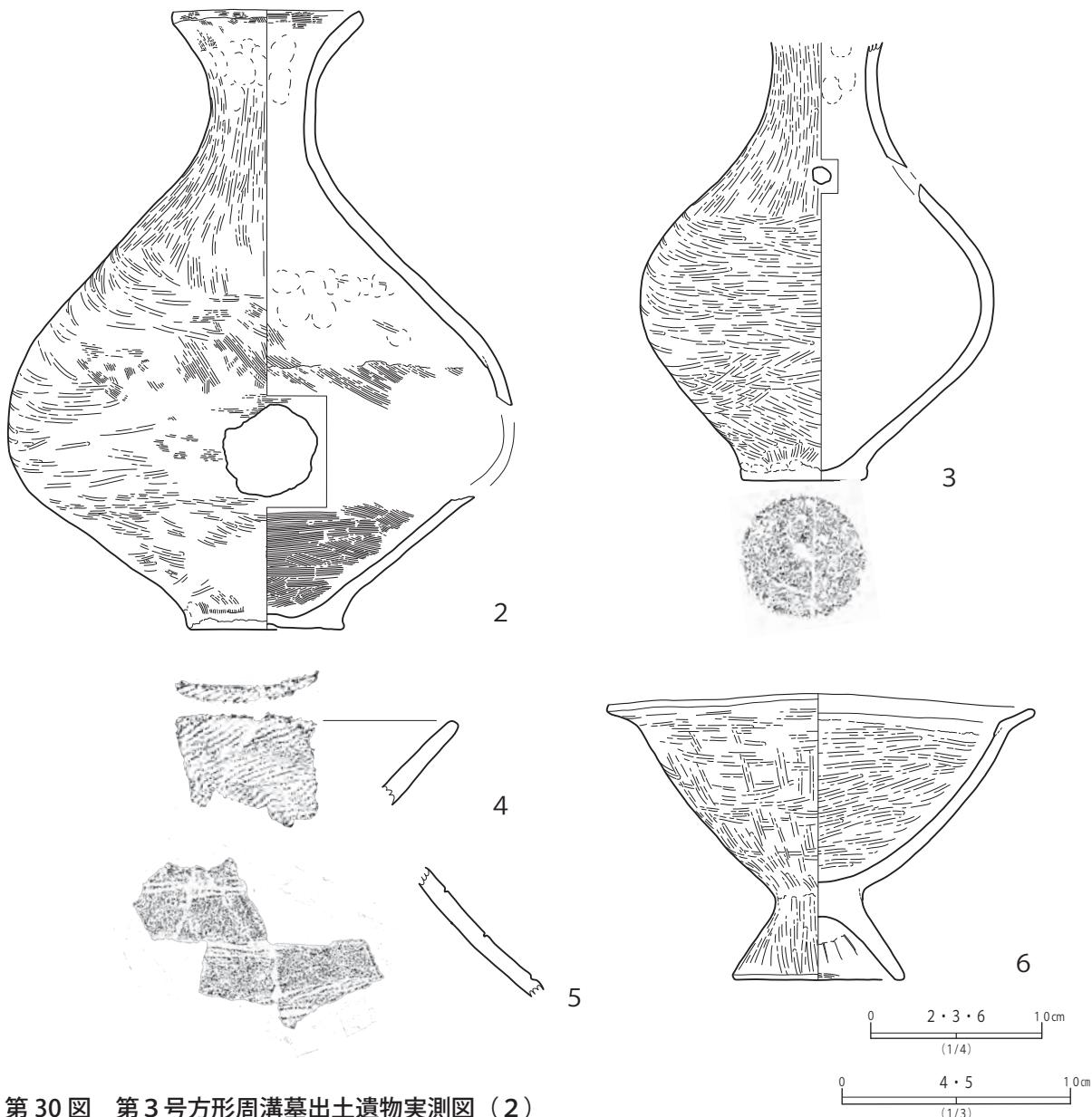
4 は東溝覆土上層から出土した壺の口縁部の一部である。口縁部は外傾して大きく開く。口縁部直下に繩文帯をもち、LR 繩文 2 段が確認される。器面には赤彩が施され、入念にミガキ調整が加えられる。胎土には石英と雲母が含まれる。

5 は壺の胴部破片である。ヘラ状工具による沈線を矢羽根状に 2 段、横位に巡らす文様帶を有するようである。内外面ともにナデで整えられ、胎土には石英・雲母が含まれている。

6 は全体に赤彩が施される高坏である。東溝中層より大型の破片がまとまった状態で出土しており、ほぼ完形に復元された。同一層には大小様々な礫が伴っていたため、周溝内に流れ込んだ段階で破碎したものと推測される。器形はやや内湾しながら立ち上がり、口縁部直下で屈曲し、口縁部は大きく外傾する。外面は胴部にヨコミガキを施したのち、脚部を含む全体にタテミガキを加えている。内面はヨコミガキにより仕上げている。脚部内面にはヘラ状工具により整えた痕跡が観察される。胎土には石英と雲母が多く含まれる。口径 24.4cm、器高 16.7cm、底径 9.7cm である。



第29図 第3号方形周溝墓出土遺物実測図（1）



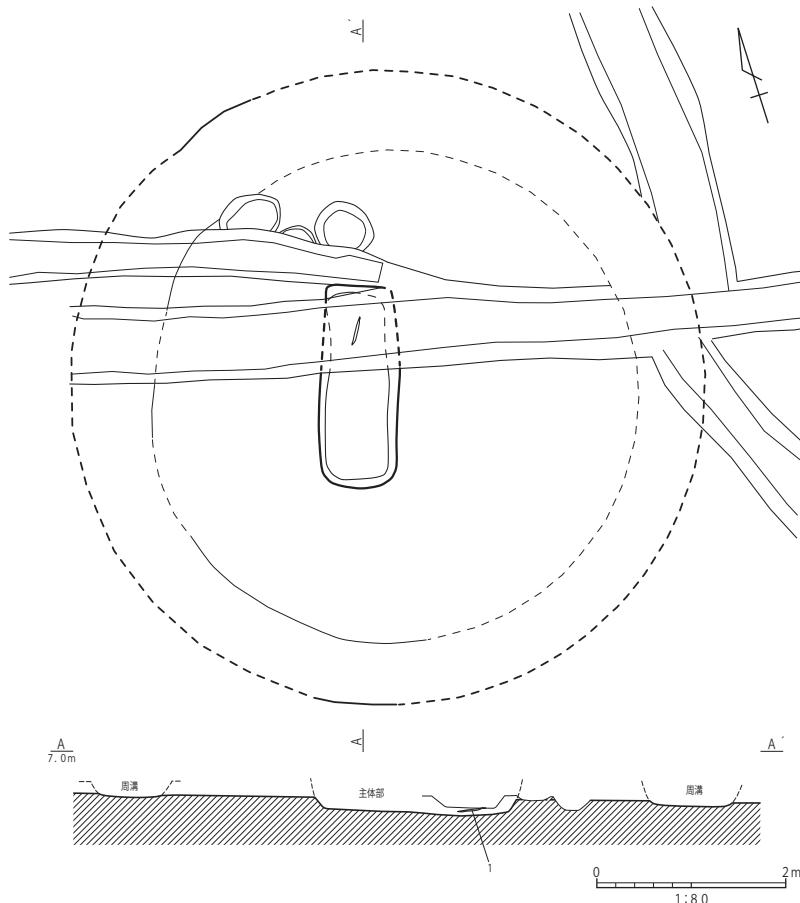
第30図 第3号方形周溝墓出土遺物実測図（2）

第8表 第3号方形周溝墓出土遺物観察表

図版番号	遺物番号	出土地点	器種	口径 器高 底径	胎土	焼成	色調	残存	形態の特徴	手法の特徴	備考
29図1	66	北溝	受口太頸壺	15.8cm 43.8cm 7.0cm	φ 1mm の白色砂粒、軽石、 石英含む	良	2.5YR4/6 赤褐色	完形	受口状口縁 胸部中央に最大径をもつ 全体に赤彩	外面 頸部から胸部上半に櫛描沈線で区画する2段 の櫛描複合鋸歯文 内面 ナデ調整 表面脆弱	弥生時代 中期後葉
30図2	65	北溝	壺	10.3cm 36.1cm 8.8cm	φ 1mm の白色砂粒、黒色砂 粒、チャート含む	良	7.5YR6/6 橙色	完形	胸部穿孔 頸部赤彩残存	外面 口唇部側面を平坦に整える 頸部～胸部上半ミガキ 胸部下半ハケメ 内面 ハケメ調整	弥生時代 中期後葉
30図3	31	北溝	壺	— 26.0cm 6.4cm	φ 1mm の白色砂粒 3% 含む	良	7.5YR7/6 橙色	完形	胸部穿孔	外面 ミガキ調整 底部にわずかにハケメ残存 木葉痕あり 内面 ナデ調整	弥生時代 中期後葉
30図4	79・83	東溝 覆土	壺	— (3.8cm) —	φ 1mm の白色砂粒 1%、雲 母含む	良	5YR4/6 赤褐色	口縁部	口縁部は大きく外傾する	外面 2段の繩文帯 内面 ミガキ	弥生時代 中期後葉
30図5	34	西溝	壺	— (3.4cm) —	φ 1mm の白色砂粒 2%、石英、 雲母含む	良	10YR5/4 にぶい黄褐色	胸部	やや内傾して立ち上がる	外面 斜位のヘラ描直線 内面 ナデ	弥生時代 中期後葉
30図6		東溝 覆土	高坏	24.4cm 16.7cm 9.7cm	φ 1mm の白色砂粒 1%、雲 母含む	良	5YR4/6 赤褐色	完形	頸部は外傾して立ち上がる 口縁部は屈曲して大き くひらく	外面 タテミガキ+ヨコミガキ 内面 ヨコミガキ	弥生時代 中期後葉

第5節 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は、古墳2基を確認した。いずれも残存状況は良好とはいえず、別の遺構との重複関係が複雑で検出作業が困難であった。円形の周溝が確認できたのは1基のみで、もう一方は主体部のみの検出にとどまった。



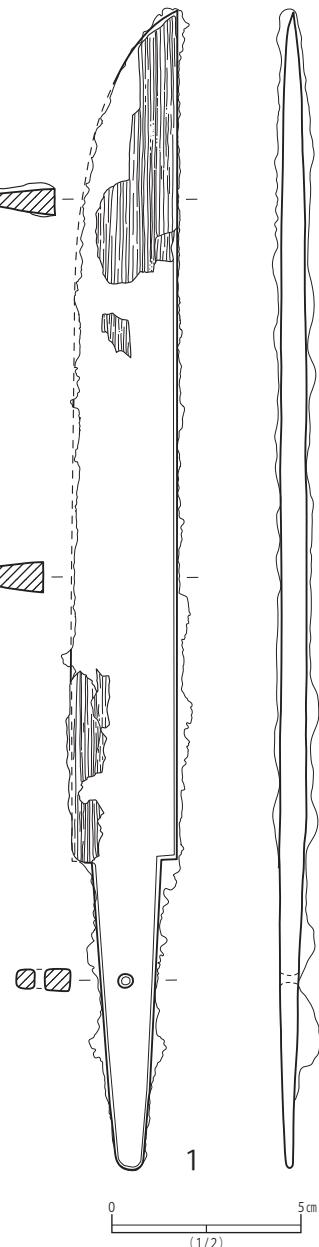
第31図 第1号墳平面図・断面図

【SZ01】

調査区西端の148-27グリッドに位置する。主体部と思われる長方形を呈する土坑と円形の周溝が確認されたが、土地改変による削平を受けているとともに、古代の溝状遺構と重複し、主体部の一部と周溝の底面がわずかに残存する程度である。検出された土坑は南北方向に長軸をもち、長軸2.1m、短軸0.8mを測る。深さは最も深いところで0.2mであり、副葬品と思われる小刀が1点出土した。確認面は方形周溝墓と同様に第6層（褐色スコリア層）であるが、実際はさらに上層から掘り込まれていたと考えられる。周溝は検出された形状から復元値で直径6.7mの円形を呈する。深さは0.1mにも満たず凹みが確認できた程度でその詳細は不明である。

第9表 第1号墳出土小刀観察表

図版 番号	遺物 番号	種別	部位	閔形状	全長(cm)	刀身部			茎部			備考
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	
32図 1	3257	小刀	刀身部～茎部	直下両閔	30.6	22.4	2.8	0.9	8.2	1.4	0.5	直刀 刀身部に鞘の木質残存



第32図
第1号墳出土小刀実測図

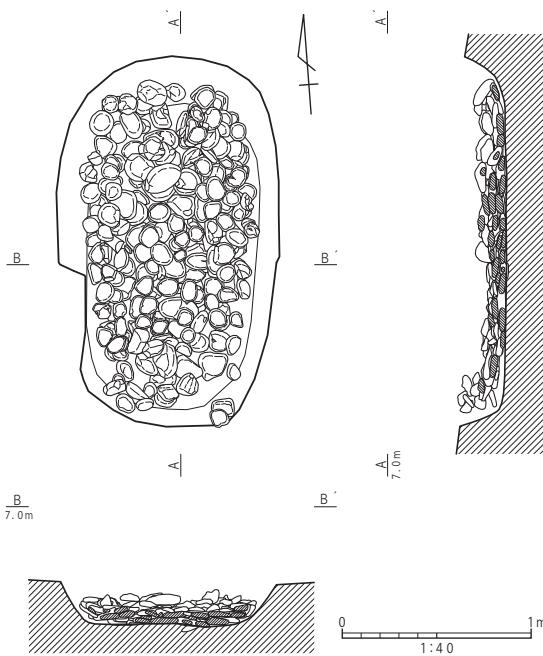
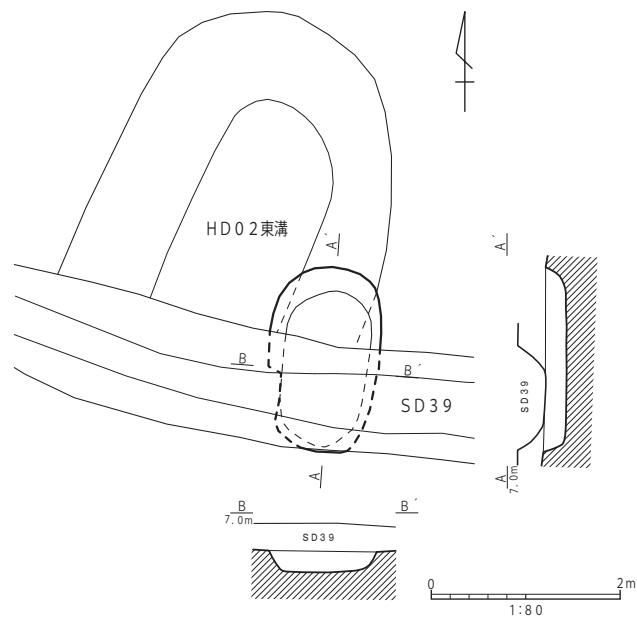
【出土遺物】

1は小刀で反りのない直刀である。切先を南に向け、土坑の北側中央部から出土した。床面に対して、切先がやや下を向き、茎尻が浮く状態であった。全長は30.6cm、刀身部長22.4cm、刀身部幅（刀身部中央）2.8cm、茎部長8.2cm、茎部幅（目釘穴付近）1.4cmを測り、切先から刀身部の刃部側がやや欠損するものの、ほぼ完形に近い状態である。関は直角両関で、茎はやや細くなりながらも直線的に茎尻に向かう。茎部の断面形状は長方形で目釘穴を1か所有する。刀身部には鞘の木質が残存する。

【SZ02】

調査区南端の154-25グリッドに位置す 第33図 第2号墳平面図・断面図
る。HD02の東溝と重複関係にある。上部は既に削平を受けて失われていた。検出面が砂礫層であったことから、検出作業は非常に困難で周溝を確認することはできなかったが、主体部と考えられる土坑が礫床を伴って検出されたため古墳と判断した。

主体部の平面形は長方形を呈し、端部は弧状に張り出している。長軸は南北方向に1.96m、短軸は東西方向に1.12mである。後世の削平により上部を失っているが、深さは最も深いところで0.24mを測る。HD02 東溝に厚く堆積する砂礫層を掘り込む。床面には拳大の海浜礫を使用した礫床が確認された。SZ01に比べ覆土及び掘り込まれた堆積土は、ほとんど土を含まない砂礫で構成されていることから壁面は非常に崩れやすい。そのため、底面に敷石を密に施し、棺を安置できるように整えたものと判断される。副葬品は確認されなかった。



第34図 第2号墳礫床平面図・断面図

第IV章 調査成果

第1節 調査成果と課題

中原遺跡は古墳時代後半から奈良・平安時代にかけて営まれた集落遺跡として周知されてきた。しかし、今回報告した10区の調査では弥生時代中期後半に方形周溝墓が群として展開し、古墳時代後期には古墳が点在することが新たに確認された。これまで古代の集落跡として認識されてきた中原遺跡であるが、古代の集落が形成される以前に、この地に弥生時代中期と古墳時代の墓域が形成されていたという新たな知見を得ることができた。

以下、今回得られた調査成果を時代ごとに述べていく。そして次節で中原遺跡の方形周溝墓について改めて触れ、本書のまとめとしたい。

【縄文時代以前】

縄文時代以前に属する明確な遺構は確認されなかったが、出土した遺物の中に縄文時代晚期の土器片が含まれていた。方形周溝墓の盛土から出土したもので、縄文時代晚期頃に中原遺跡では少なくとも人の活動が示唆され、後の方形周溝墓築造段階に混入したものと判断される。

【弥生時代】

今回の調査で弥生時代中期後半の方形周溝墓3基が確認された。今回の調査での最大の成果はHD01の発見であろう。最大長26mを超える大型方形周溝墓は寺尾原遺跡第2号方形周溝墓を除いてHD01のみで、且つ遺構の全容が把握できる遺存状態であるのは県内に例を見ない。墓域はHD02・HD03が連接し、さらに南東方向に展開する様相を確認できた。詳しくは次節で記述するが、墳丘上には主体部が残存し、周溝内には少量ながら供献されたと推測される土器が出土した。居住域や生産域との関係については今後の検討課題ではあるが、今回得られた新たな情報は、この地の弥生時代中期における墓制の様相を明らかにするために不可欠な資料となるものと考えられる。

【古墳時代】

今回古墳時代の遺構としては、古墳2基を報告した。千本砂礫州上の古墳については、松長古墳群や大塚古墳群など、径6mほどの円墳が広く点在していることが知られている。本報告の2基(SZ01・SZ02)についても、その形状や規模から概ね同時期と判断してよいと思われる。SZ02では築造面が砂礫上のため、礫床を設け安定を図ったのに対して、比較的高山が固く安定していたSZ01は主体部に礫床を設げず、立地環境によって主体部の構築に差異が認められた。

古墳時代に後続する古代の集落跡については、HD01の北構に住居址が1軒重複するが、それ以外はすべて避けるように北側から北西方向に展開する。方形周溝墓の埋没後、古代に至るまでこの範囲が意図的に避けて集落が形成される要因があったのかは判断が難しいが、今後、集落跡について報告する際の検討課題としたい。

第2節 中原遺跡の方形周溝墓について

前節では、本報告分の時期ごとの様相を簡単にまとめた。ここでは、とくに重要な成果を得られた方形周溝墓を中心に報告の補足と所見を述べていく。はじめに中原遺跡における方形周溝墓の分布・規模、埋葬施設、出土土器に焦点を当て、最後にその変遷について触れていく。

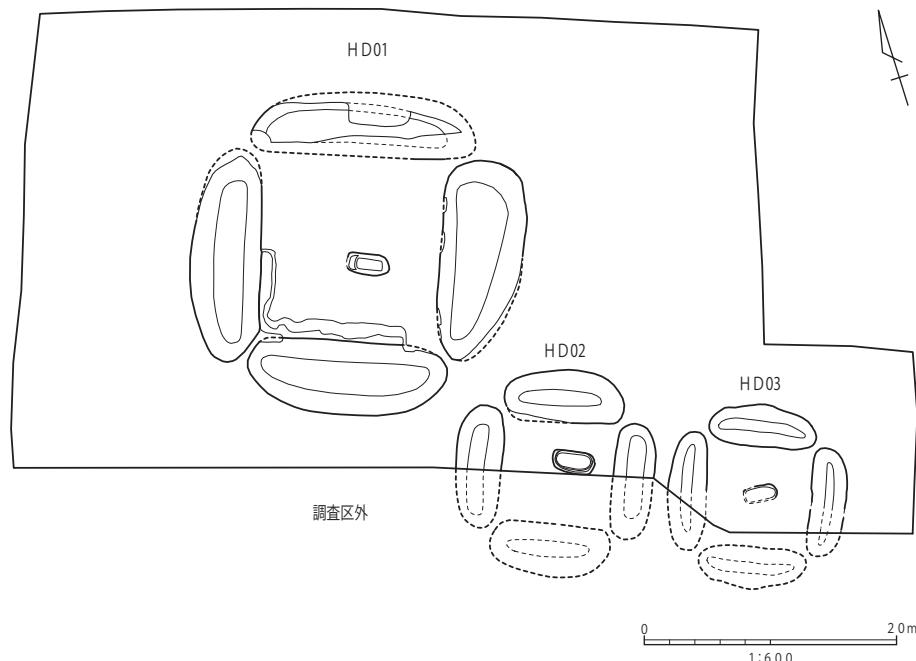
【分布・規模について】

今回の調査で確認された方形周溝墓は総数3基(HD01～03)であった。10区のほぼ中央部、標高6m前後に分布するこれらの方形周溝墓群は、溝幅を含む東西軸26.2m×南北軸25.6mと卓越した規模をもつ第1号方形周溝墓(HD01)を北限に、第2号方形周溝墓(HD02)・第3号方形周溝墓(HD03)

が南東方向に続くかたちで展開する。しかしながら、HD02 及び HD03 は南側部分が調査区外に及ぶため全容は判然としない。そこで、検出された部分から平面形態の復元を試み、復元図を第 35 図に示した。この図を見ると、3 基の平面形態は共通して「四隅切れ」の形態を有し方台部のプロポーションは、ほぼ正方形を呈する。長軸方位も共通すると考えられ、一定の規則性・親和性をもった墓域であることが理解できる。軸を揃え整然と配置される事象は、遠江・西駿河地域でも認められるように広く浸透する墓制の様相を示す。篠原和大氏は方形周溝墓に関して、築造や葬送儀礼の祭祀の中に、集落の成員を結びつけ共同意識の高まりを担う側面を有していると指摘している（篠原 2017）。中原遺跡も周辺地域同様に、西から伝播したこのような社会や文化を享受した集団であったと考えられる。

次に、個々の規模に視点を移すと、HD01 と他の 2 基の差異は明瞭となる。先述のとおり HD01 は他の方形周溝墓とは画した大型方形周溝墓であることがわかる。安藤広道氏は溝幅を含めた一辺 20 m 以上の規模が他から分離されるものを大型方形周溝墓として、その被葬者は周辺地域の中心人物的な有力者の性格をもつと推定している（安藤 1996）。

東駿河地域における弥生時代中期の主要遺跡で確認された方形周溝墓の規模を比較したグラフを第 36 図に示した。これによると、大半の方形周溝墓は 5 ~ 15m の規模の範囲に群集する。渡井英誉氏はこの規模の方形周溝墓群を静岡県内の事象として指摘しており（渡井 2002）、この規模が当時の「一般的な方形周溝墓」であったと考えられる。その中で寺尾原遺跡第 2 号周溝墓は傑出した規模を測り、HD01 は寺尾原遺跡第 2 号方形周溝墓の規模に劣りながらも、やはり「一般的な方形周溝墓」の規模から逸出した位置に分布する。このことから、HD01 の被葬者は、生活圏を共有する諸集団の中から輩出された中心人物であったことは想像に難くなく、その背景には、浮島沼周辺一帯に大型方形周溝墓の構築を可能にするほどの集団規模の存在、その生活基盤の確立がうかがえる。しかし、中原遺跡では居住域及び生産域は確認されておらず、依然として不明な点が多い。集落の全体像を明らかにするためには、今後の調査事例の蓄積と周辺遺跡との比較検討を重ねていく必要がある。



第 35 図 方形周溝墓復元全体図

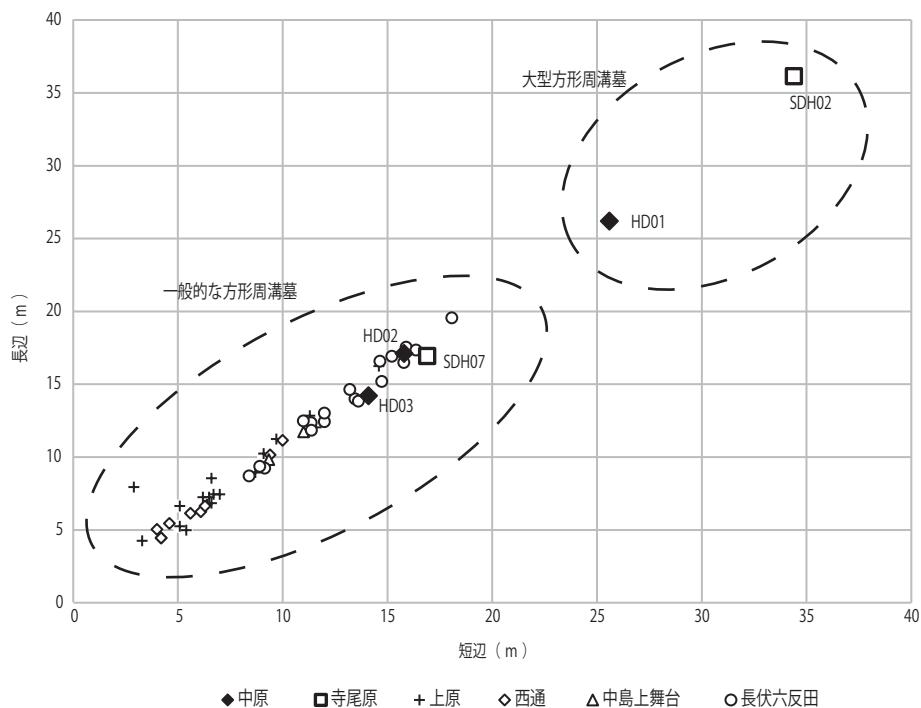
【埋葬施設について】

次に、方形周溝墓3基すべてで確認された主体部について述べていく。主体部は、方台部のほぼ中央に単独で構築されていた。このような单数埋葬は、静岡県内で一様に受け入れられる埋葬形態である（松井 1998）。主体部の主軸は方台部の長軸に対して直交し東西に主軸をとる。副葬品が伴わないので被葬者の埋葬方位は不明であるが、3基の分布の特徴で示した規則性を考慮するならば、被葬者は同一方位を向いて埋葬されたものと判断される。主体部は長軸が3m前後で、下端でも2m程度を測る。松井一明氏は、主体部規模が長軸2.5m前後のものに対し、長軸1.7m以上の伸展葬可能な木棺が伴う傾向を示しており（松井前掲 1998）、このことから、3基の方形周溝墓からは木棺痕跡は確認できなかったものの、示唆的ではあるが埋葬に木棺が用いられた可能性が考慮される。

【出土土器について】

方形周溝墓から出土した遺物は土器を中心であり、大半が周溝内からの出土である。器種は壺形土器が大半を占めていた。壺の中には胴部に穿孔が認められるものがあり、何らかの祭祀行為が行われた痕跡を示している。出土位置は各周溝墓の北構・東溝に集中し、とくに完形に近い個体のほとんどが溝底かやや浮いた状態の位置から出土している。したがって、周溝構築後からまもなく溝内へ遺棄されたか、自然と流れ込んだものと判断される。また、周溝内には拳大の礫混じりの土砂が堆積した状況は、高潮や洪水に起因するものと示唆される。墳丘上に設置された土器が南西からの高潮などの作用により押し流されて北東溝に流れ込んだものと考えられ、周溝内の土器が比較的下層付近に集中するのは、こうした外的要因によって構築後の儀礼行為を経ることなく、短期間のうちに埋没した推測される。

HD01から4点の壺が出土した。HD01-1が、確認面付近の覆土上層から出土していることを考慮すれば、HD01に確実に伴う土器群はHD01-2～HD01-4になる。櫛描文や縄文を主体とする文様構成は東駿河III-3様式に比定されるもので、HD01-2は施文単位や内面の調整精度に若干の差異が認められるものの、藤枝市清水遺跡から出土した西駿河IV-3様式の受口状口縁の太頸壺と非常に類似し、何らかの影響を受けていることは間違いない。一方で、HD01-3は口縁部のみに縄文が施され、文様帶の集約



周溝墓 時期区分	HD01	HD02	HD03
III-3期	HD01-2 	HD02-1 	HD03-1 
III-4・5期	HD01-3  HD01-4  HD01-1 	HD02-2  HD02-3 	HD03-3  HD03-2 

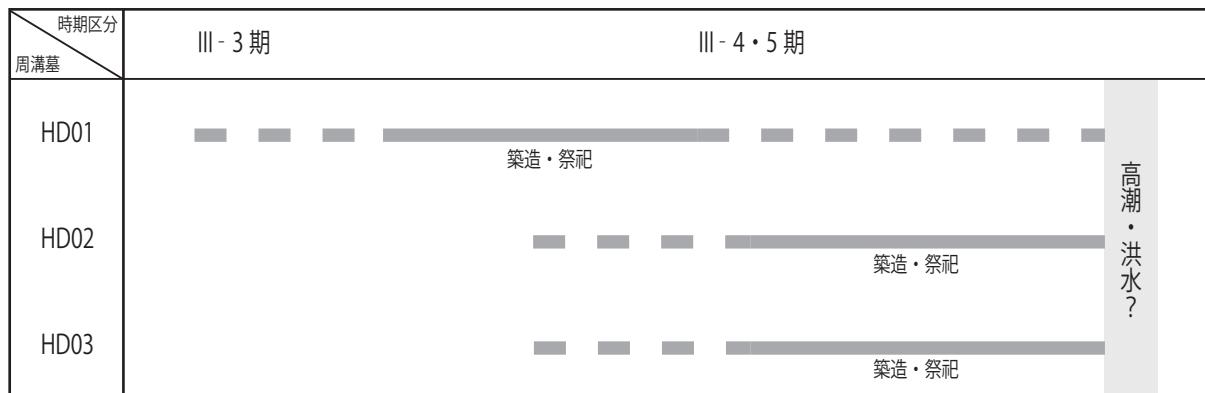
第37図 中原遺跡出土土器の時期的位置付け

化・簡素化に向かうIII-4様式以降の特徴がみられる。底部には網代痕をもつなど新しい段階では減少傾向にある伝統的要素も認められる。唯一、周溝覆土上層から出土したHD01-1は文様帯が頸部に集約され太い沈線で区画される細頸壺である。この頸部の文様帯は、栗林式にみられる特徴で、中部高地からの影響が示唆される。出土状況からHD01に伴うものではなく、HD02・HD03、もしくはさらに南方に展開する周溝墓からの流入と判断される。

HD02から出土した3点の土器はHD01同様、櫛描文と縄文主体の土器が認められる。しかし、縄文を施したHD02-2には、宮ノ台式からの影響を受けた羽状縄文が施され、HD01よりも新しい時期の様相を示す。また、HD02-1は周溝底面に破碎された状態で出土しており、施文については、縄文を組み合わせない点は異なるものの、川合遺跡2号方形周溝墓と類似する文様構成を採用している。しかし、瓢型と呼ぶにはシャープさを欠く器形を呈し、壺と甕を合わせた土器棺を模倣したともいえるそのプロポーションは、日用品から供献土器に用いられたというよりは、当初から葬送祭祀を意図して製作された感が否めない。

HD03出土の壺は、HD01・HD02に比べ無文の割合が多く、器面のミガキ調整が卓越するIII-5様式に該当する傾向が看取される。一方で、HD01-2のようにIII-3様式を踏襲した櫛描文が施文される個体も認められるが、施文方法の規則性が弱いうえに、内面の器面剥落が著しく、施文・調整ともに簡略・形骸化された印象が強い。また、櫛描文を主体とする土器については、各個体の器形・文様構成こそ様々ではあるが、先述したとおり、其伴する個体と比べ内面調整の希薄さによる器面剥落が顕著であることが共通項として見いだせる。さらに、これらが1点ずつ、比較的時期が新しい様相を示す土器とセット関係にある出土状況は非常に興味深い(第37図)。葬送祭祀に由来する事象であるかは判断できないが、今後周辺事例との比較から検討を重ねていきたい。

以上、方形周溝墓から出土した土器群について概観してきた。その結果、いずれの周溝墓もIII-3様式的特徴を踏襲する櫛描文壺が含まれるもの、III-4・5期を主体とする傾向が強いようである。その



第38図 中原遺跡方形周溝墓の変遷

中で HD01 は比較的時期の古い様相を示し、HD02、HD03 の土器群は東駿河Ⅲ-4・5 期に特徴づけられる新しい様相を示している。したがって、HD01 はⅢ-3 期からⅢ-4 期にかけて構築・祭祀がはじまり、HD02・HD03 はやや遅れたⅢ-4・5 期主体の時期に構築されたと判断される。そして構築後は、十分な供獻期間を経ることもなく、高潮などの影響を受け短期間で埋没したものと想定される（第 38 図）。

第3節 周辺地域にみる中原遺跡方形周溝墓の位置付け

中原遺跡で確認された方形周溝墓群は、沼津市域において本発掘調査で初めて確認された弥生時代中期後葉の方形周溝墓である。これまで当該期の様相はあまり検討されることはなく、沼津市域での弥生時代中期について不明な点が多くかった。本節では静岡東部及び沼津市域の弥生時代中期における遺跡様相を見ながら、中原遺跡の方形周溝墓群についての歴史的位置づけやその意義についてみていくたい。

1 これまで確認してきた静岡県東部における弥生時代中期の様相

前節のとおり、中原遺跡で確認された方形周溝墓群は調査範囲の関係からこれまで3基が確認されている。いずれも周溝が一周せずに四隅が切れるタイプであり、また、出土した土器の特徴からも弥生時代中期後葉（東駿河Ⅲ-3～4・5 様式期）に帰属するものと判断される。

この方形周溝墓群が帰属する弥生時代中期よりも前の時期については、これまで静岡県東部において確認されている遺跡数が絶対的に少なく全体的に判然としない状況であった。特に縄文時代晚期から弥生時代前期の遺跡は散在的な確認にとどまり、まとまった集落が当該地域では確認されていない。これは、縄文時代後期後半から晩期に富士山や天城カワゴ平で生じた火山噴火や、縄文時代晚期に発生したとされる富士山の山体崩壊に伴う黄瀬川扇状地堆積物（御殿場泥流）の堆積などという自然災害に伴う環境変化（悪化）によることが主な要因と考えられる。

その後の弥生時代中期中葉に入ると遺跡がやや増加し、特に伊豆半島の中央部を源とする狩野川の流域では箱根西麓などから流れ込む小河川による堆積作用で田方平野と呼ばれる平野部が形成されており、三島市や函南町一帯に方形周溝墓が存在する多数の遺跡が確認されている。これらの遺跡の動態については近藤舞氏による研究（近藤 2000）が詳しいが、中でも第2節で方形周溝墓の規模を比較する際に取り上げた長伏六反田遺跡（三島市）、箱根西麓の裾部の中島上舞台遺跡（三島市）、寺尾原遺跡（田方郡函南町）などはよく知られている。これらはいずれもⅢ様式期の遺跡であり、Ⅱ様式期の遺跡は存在しているものの、いずれも遺物のみで明確な遺構は確認されていない。Ⅲ様式期の遺跡のうち寺尾原遺跡では長軸が 36 mにも及ぶ極めて大型の方形周溝墓（SDH02）が確認されており（函南町教育委員会 2022）、その規模は極めて特異な存在といえ、前節で述べたように中原遺跡 HD01 と併せて静岡県

東部で確認されている方形周溝墓の中でもその規模が突出している。このSDH02の具体的な時期については2022年に刊行された報告書で第6章を執筆した篠原和大氏がⅢ-2様式期に築造、Ⅲ-3様式期に土器の供獻等が行われたと時期比定している。この規模の方形周溝墓を築造するのには複数の集落から人員を動員することが必要であったと想定され、埋葬された人物は広範囲に影響力を有した人物と推測されよう。これらのことは、前述した自然災害の後に環境が安定し人が居住できるようになり、別の場所から新たな集団が移住し、複数の集落が形成された結果と考えられる。なお、伊豆半島東岸部では日暮遺跡（伊東市）、姫宮遺跡（河津町）、日詰遺跡（南伊豆町）などで弥生時代中期～後期の方形周溝墓が確認されているが散在的である。

このような状況に比して狩野川の河口域である沼津市域には二ッ洞遺跡、雄鹿塚遺跡、古城遺跡、軒通遺跡、高田第六天遺跡、山王台遺跡、御幸町遺跡、大正免遺跡、灰塚遺跡といった遺跡が市内各所に存在することがこれまで知られていたものの、いずれも住居址や方形周溝墓は確認されておらず、土器などの遺物が散在的に出土するにとどまっていた。このため沼津市域の弥生時代中期の状況について検討されることはほとんどなかった。そのような中で設楽博巳氏が『沼津市史 資料編 考古』（沼津市史編纂委員会・沼津市教育委員会2002）の「第3章 弥生時代」の中で、神奈川県中里遺跡や埼玉県池上遺跡などの関東地方における弥生時代中期中葉の拠点的な集落が忽然と出現したことを例に挙げ、「沼津市域でもいずれこうした内容を持つ集落が検出される可能性は予想しておかなければならぬ」と指摘しており、沼津市域においても弥生時代中期のまとまった遺跡の発見が期待されていたといえる。

2 近年の沼津市域における弥生時代中期の様相

前項で触れた設楽氏の指摘後に発見された当該期の遺跡が沼津市小諏訪地内に所在する西通北遺跡である。西通北遺跡では、2軒の住居址と環濠の可能性も指摘されている大型溝状遺構が検出されており、出土した土器から弥生時代中期中葉（Ⅱ様式期）の集落遺跡と判断された（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2011、沼津市教育委員会2014）。西通北遺跡はまさに設楽氏が指摘したような弥生時代中期中葉の拠点的な集落である可能性を示す遺跡といえる。ただし、調査範囲が限られていることから、弧を描くように続く大型溝状遺構の位置づけや検出された住居址が少なく明確な集落域が未確認であることを含めて不明な点が多い。

また、近年、沼津市桃里地内において実施した試掘調査で方形周溝墓が確認され（沼津市教育委員会2021）、新たに新規登録された上原遺跡では、2020・2021年に静岡県埋蔵文化財センターによって本調査が実施された。27基に及ぶ数の方形周溝墓が密集した状態で検出されるとともに、一部の周溝内からは中期中葉の土器（Ⅱ様式期）が出土している（蔵本2022）。このことから上原遺跡は西通北遺跡と同様に中期中葉の遺跡と判断される。ただし、調査範囲が限られていることから、弥生時代中期中葉の遺構は方形周溝墓群の検出にとどまっており、この方形周溝墓群を築造した集団の集落域は一切確認されておらず、遺跡の全容は不明である。なお、この方形周溝墓群は砂礫で覆われていたことから、高潮ないし津波による災害で墓域としての役割を終えていると判断される。上原遺跡は中原遺跡から西北西約1.2kmとそれほど離れていない距離に立地しており、千本砂礫州上という中原遺跡と同じ遺跡立地環境であることから、時期は異なるものの中原遺跡を考え上で貴重な事例である。このように西通北遺跡は集落の全容と墓域の情報を欠き、上原遺跡は集落域の情報を欠いているものの、この二つの遺跡は中期中葉段階から沼津市域において墓域を伴う集落が存在することを示唆しているといえる。

中期後葉の遺跡については、中原遺跡での方形周溝墓群の発見に続いて、沼津市根古屋地内に所在する古城遺跡・興国寺城跡や沼津市小諏訪地内に所在する西通遺跡において方形周溝墓が相次いで確認されている。古城遺跡・興国寺城跡では方形周溝墓の周溝の一部が検出され、周溝内からはⅢ-3様式期

と推測される土器が出土している（沼津市教育委員会 2020）。また、西通遺跡では 9 基からなる方形周溝墓群が検出されており（小崎 2020）、そのうち最も規模が大きい HD01 から III-3 様式期と推測される土器が出土している。いずれも調査範囲が限定されていることから、実際には確認された数以上の方形周溝墓が存在するものと推測される。なお、検出された方形周溝墓は最大でも長軸が 10 m 程度のもので、中原遺跡 HD01 のような一辺が 20 m を超えるような大型のものは確認されていない。併せて、いずれの遺跡においてもこれらの方形周溝墓（群）が墓域として付随することとなる集落域は確認されておらず、この墓域を形成した集団については不明な点が多い。この点に関して西通遺跡の方形周溝墓群については前述した大型溝状遺構を有する西通北遺跡と関連の有無を考える必要があるが、両遺跡から出土した土器に時期差が存在することから西通北遺跡が集落域で西通遺跡が墓域と判断することは現状では困難である。そして、西通遺跡の西約 200 m の位置にかつて土取りが行われた際に発見された軒通遺跡が存在する。軒通遺跡からは詳細は不明であるが III-2 ないし III-3 様式期の古い段階のものと推測される壺形土器が出土しており、その壺形土器には胴部下半に穿孔が確認されるものが存在することから供献土器と判断され、軒通遺跡においても方形周溝墓が存在していた可能性が高いと推測される。これらのことから西通遺跡や軒通遺跡は III-3 様式期もしくは若干遡る段階の墓域である可能性が高く、近隣に未発見の遺跡（集落域）が存在する可能性が高いものと判断される。なお、西通北遺跡については、大型溝状遺構内で出土している土器の大半が II 様式期のものであるが III-3 様式期のものも含まれている。このことから西通北遺跡の場所には中期後葉にも集落が営まれていた可能性があり、この場合は西通遺跡及び軒通遺跡との関連を検討する必要があろう。

いずれにしても中原遺跡での方形周溝墓群の確認と併せて、中期後葉の方形周溝墓が確認されたことは、田方平野での遺跡様相と同様に沼津市域においても弥生時代中期中葉以降、断続的に集団がこの地域に居住し、集落及び墓域を形成したことを見出している。

3 中原遺跡方形周溝墓群について

本項では先に触れた静岡県東部及び沼津市域での弥生時代中期の様相を踏まえ、中原遺跡方形周溝墓群についてみていく。

①立地及び周辺遺跡との関係

沼津市を含めた静岡県東部で確認される弥生時代中期中葉から後葉にかけての方形周溝墓に関する様相については前述のとおりであるが、ここでこれらの方形周溝墓の立地について見ていくと、沼津市域では海浜部である千本砂礫州上や愛鷹山麓の裾部で確認されている。三島市や函南町が所在する田方平野一帯では狩野川に近い微高地や箱根西麓の裾部（台地上）、伊豆半島東岸部では河岸段丘上や山間部などである。これらはいずれも低地部を望む微高地や台地（尾根の先端部）上に位置している。このような立地環境を踏まえると、水田耕作を行いやすい低地部に存在する集落から見える場所に墓域が選択され、そこに方形周溝墓が築造されているものと判断される。

中原遺跡で確認された方形周溝墓群は、富士市田子の浦から沼津市にかけて続く富士川由来の砂礫が堆積することによってできた砂礫州である千本砂礫州上に位置しており、海側（南側）が高く、湿地帯である浮島ヶ原側（北側）が低い地形となる。そして方形周溝墓群は標高の高い砂礫州上に築造されていることから、中原遺跡の方形周溝墓群を築造した集団の集落は北側の浮島沼に近い低地部に形成されていたと推測することが可能と思われる。

これまでのところ、中原遺跡周辺の弥生時代中期の遺跡としては浮島ヶ原内の微高地で雄鹿塚遺跡（沼津市教育委員会 1989）や雌鹿塚遺跡（沼津市教育委員会 1990）が存在する。共に弥生時代後期が主体の遺跡であるが、雄鹿塚遺跡では中期中葉である II 様式期からの土器が出土し、雌鹿塚遺跡では中期

後葉であるⅢ-3ないし4様式期の土器片が出土しているものの、絶対的な数量が少なく、そしていざれの遺跡においても当該期の住居址は確認されていない。また方形周溝墓群の位置から東約300mに所在する鳥沢遺跡で実施された2次調査で中期後葉の白岩式（東遠江IV様式期）と推測される土器片が1点ではあるが出土している（沼津市教育委員会2011）。ただし、当該期の住居址等の遺構は確認されていない。このため、中原遺跡の方形周溝墓を造った集落の所在は現状では不明といわざるを得ないが、周辺に所在する複数の遺跡で中期後葉の土器がわずかながらでも出土していることは、中原遺跡の方形周溝墓と無関係ではないと判断される。このため、中原遺跡方形周溝墓群の周辺において、鳥沢遺跡が所在しているような千本砂礫州の砂堆の高まりを背後とした浮島ヶ原との間の比較的平坦な位置で今後埋蔵文化財に係る調査を実施することがあれば慎重な調査実施が求められる。

②周溝出土土器と埋葬儀礼

中原遺跡で確認された3基の方形周溝墓はいずれも単独の主体部が確認されているものの、前節で触れられているように木棺や副葬品がいずれにおいても確認されておらず、どのような埋葬儀礼が行われたかは不明である。

一方で周溝から出土した土器については、HD03の東溝で出土している高壺を除いて、全て壺形土器であり、概ね静岡県中部を中心に広く分布する有東式の範疇に収まるものと判断される。しかしながらHD01で出土した藤枝市清水遺跡の太頸壺と極めて類似した土器やHD02の東溝で出土した壺と甕を合わせた土器棺のような特異な壺形土器など特徴的なものが含まれていることは注目され、また、前節で述べているように、それらの土器は施文の規則性が弱く内面剥離が著しいものとなっており、実用品とは到底考えられず、供獻用として製作された可能性が高いと推測されよう。そしてこれらの土器と比較的新しい時期様相を示す土器がセットで確認されていることは、供獻する土器に種類などで何らかの規則的なものが存在することを示唆している。このような事例は他地域などを含め今のところ確認できず、また方形周溝墓出土土器について文様や器形だけでなく内面に注目した研究が確認できないことから、今後、当該期の方形周溝墓で出土する土器については内面にも注意を払う必要がある。

③中原遺跡における方形周溝墓群成立の背景

沼津市域を含めた静岡県東部の当該期の遺跡の様相を見ていくと、中期中葉である東駿河様式第Ⅱ期において西通北遺跡や上原遺跡が示すように集落や墓域が当該地域に突然形成されている状況が確認できる。このような状況はほぼ同時期の関東において中里遺跡などが忽然と姿を現す状況と類似しており、全国的な弥生時代の遺跡動態と連動したものと解釈できよう。一方で、これらの遺跡が継続し、その後の弥生時代中期後葉に続いたとは考えづらく、当該地域でⅢ-3様式期に比定される方形周溝墓が多数確認されていることは、この時期に集落が劇的に増加をしたことを示しているといえる。そしてこのⅢ-3様式期はまさに中原遺跡の方形周溝墓群のうちHD01が築造された時期にあたる。

すなわち、当該地域においてⅡ様式期に人が移住ないし集住することで集落が形成されたものの、自然災害を含めた何らかの理由でそれらの集落が消滅し、その後再び少しずつ人がこの地域に住み始め、詳細な時期は特定できないがⅢ様式期に入り本格的に集落が形成され、その集落に伴う墓域の一つとして中原遺跡の方形周溝墓群が造られたと考えることができよう。そして最初の中原遺跡周辺の集落を束ねた人物が埋葬された墓こそが全長が26mを超える破格の規模であるHD01であると考えができるのである。

④中原遺跡方形周溝墓群が示す当該地域の遺跡の消長

中原遺跡ではHD01の後、HD02及びHD03が築造される。調査範囲の問題からこの方形周溝墓群の実際の数は不明であるが、今回検出されたいずれの方形周溝墓においても出土遺物の数量が少ないととは、埋葬後に土器を使用した土器の供獻などの祭祀行為がほとんど行われていないことを示してい

る。方形周溝墓群の検出面や周溝が砂礫で覆われていたことを踏まえると、前節で触れられているとおり、この方形周溝墓群は築造後あまり時を経ずして周辺にあった集落とともに高潮や津波等による災害によって呑まれ消滅したと判断できよう。そしてこれらにより、沼津市域一帯が縄文時代後期末から縄文時代晚期にかけての火山等による自然災害によって荒廃し無住に近い状況となったが、千本砂礫州上では弥生時代中期中葉になってからようやく自然が回復し、人が移り住むようになり、西通北遺跡のような集落や上原遺跡のような墓域が形成された。しかし、高潮ないし津波の被害によってそれらの遺跡は消滅した。その後しばらくして再び集落や中原遺跡のような墓域が形成されたものの、またもや高潮ないし津波の被害によって消滅したことを見ている。中原遺跡で人の痕跡が見えるのはその後しばらくした古墳時代に入ってからである。当時の人々がいかに厳しい自然環境の中で生活を営んでいたかを示す事例といえよう。

時代	縄文時代		弥生時代				古墳時代
時期	後期	晩期	前期～中期前葉	中期中葉	中期後葉	後期	
東駿河 弥生土器様式			I	II	III 1 2 3 4 5	IV	
遺跡等			← - - - → 遺跡の形成が弱い	西通北（集落） 上原（墓域）	中原（墓域）		中原（集落）
自然災害	富士山噴火	富士山山体崩壊 (御殿場泥流)	天城カワゴ平噴火		高潮? 津波?	高潮? 津波?	

第39図 遺跡の継続期間と自然災害

参考文献

- 篠原和大 2017 「東海の弥生土器と農耕文化」『三遠南信周辺における中期弥生土器と交流 - 稲作導入期の社会 -』
- 安藤広道 1996 「大型方形周溝墓から見た南関東弥生時代中期社会」『みずほ』第18号
- 渡井英誉 2002 「ムラと墓 - 墓に関わる集落の景観 -」『静岡県における弥生時代集落の変遷』
- 松井一明 1998 「静岡県における方形周溝墓の埋葬主体部について - 木棺を中心として -」『静岡県考古学研究』No.30
- 藏本俊明 2022 「密集する弥生時代の方形周溝墓～上原遺跡～」『令和4年度遺跡調査報告会 ふじのくにの原像をさぐる』
- 近藤舞 2000 「駿東地方の弥生時代中期後半の遺跡群」『静岡県考古学研究』NO.32
- 小崎晋 2020 「西通遺跡の調査成果」『令和元年度沼津市埋蔵文化財発掘調査報告会資料』
- 沼津市史編纂委員会・沼津市教育委員会 2002 『沼津市史 資料編 考古』
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2011 『西通遺跡』
- 沼津市教育委員会 2013 『西通北遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第107集
- 沼津市教育委員会 2020 『沼津市内遺跡発掘調査報告書2』沼津市文化財調査報告書第120集
- 沼津市教育委員会 1989 『雄鹿塚遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第46集
- 沼津市教育委員会 1990 『雌鹿塚遺跡発掘調査報告書 - 狩野川西部流域下水道事業処理場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -』
- 沼津市文化財調査報告書第51集
- 沼津市教育委員会 2011 『鳥沢遺跡第2次発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第103集

第V章 自然科学的分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

中原遺跡より検出された、第1号方形周溝墓の木棺と思われる材と年代測定を行う。第3号方形周溝墓の周溝は9層に遺物が多く、覆土上部が黒色、下部が褐色である。堆積状況の違いを確認する目的で、年代測定、有機炭素、粒度分析を実施する。

1 放射性炭素年代測定

(1) 試料

試料は第1号方形周溝墓の木棺と思われる材(No.125)と、第3号方形周溝墓の周溝内土壌9の計2点である。

(2) 分析方法

材片は微小な炭化材である。周囲を削り取って40～50mg程度に調整し、分析試料とする。削り取った残渣で、樹種同定を行う。塩酸(HCl)により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理 AAA: Acid Alkali Acid)。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に1mol/Lである。

土壌は、後代の根などの不純物を取り除く。その後塩酸(HCl)により酸可溶成分を除去する。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化(鉄を触媒とし水素で還元する)はElementar社のvario ISOTOPE cubeとIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。測定はタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を用いて、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料(IAEA-C6等)、バックグラウンド試料(IAEA-C1)の測定も行う。 $\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma; 68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う(Stuiver & Polach 1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正用に用いるソフトウェアは、OxCal4.4(Bronk, 2009)、較正曲線はIntCal20(Reimer et al., 2020)である。

(3) 結果・考察

結果を表2、図1に示す。同位体補正を行った値は、第1号方形周溝墓主体部が2590±20BP、第3号方形周溝墓土壌9が2175±20BPである。暦年較正は、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、その後訂正された半減期(¹⁴Cの半減期5730±40年)を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正用データーセットは、IntCal20(Reimer et al., 2020)を用いる。2σの値は、第1号方形周溝墓主体部がcalBC806～773、第3号方形周溝墓土壌9がcalBC356～161で、いずれも弥生時代の値を示す。第1号方形周溝墓主体部の年代値は古いが、木材がカヤである。カヤは長

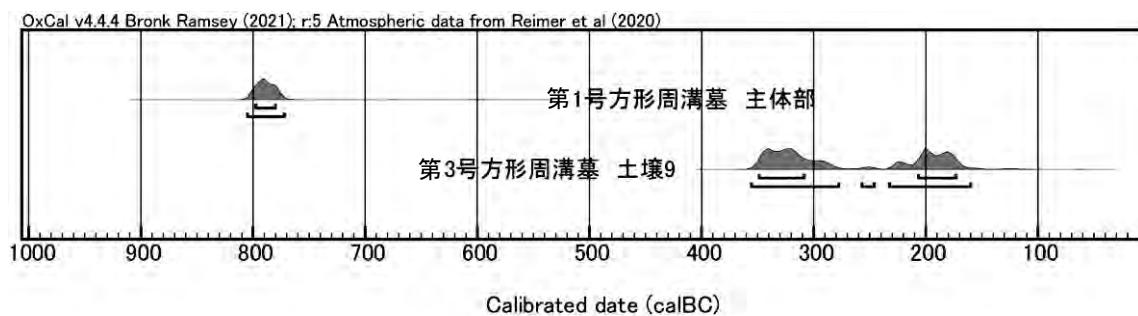


図1 曆年比較結果

表1 放射性炭素年代測定結果

No.	性状	方法	補正年代 (曆年較正用) BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	曆年較正年代				Code No.	
					年代値			確率 %		
第1号 方形周溝墓 主体部	炭化材 (カヤ)	AAA (1M)	2590 ± 20 (2592 ± 21)	-26.32 ± 0.27	σ	cal BC 798 - cal BC 781	2747 - 2730 calBP	68.3	YU- 16982	pal- 14370
					2 σ	cal BC 806 - cal BC 773	2755 - 2722 calBP	95.4		
第3号 方形周溝墓 土壤9	土壤	HCl	2175 ± 20 (2176 ± 20)	-20.96 ± 0.24	σ	cal BC 349 - cal BC 309	2298 - 2258 calBP	39.2	YU- 16983	pal- 14371
					2 σ	cal BC 207 - cal BC 174 cal BC 356 - cal BC 278 cal BC 258 - cal BC 247 cal BC 233 - cal BC 161	2156 - 2123 calBP 2305 - 2227 calBP 2207 - 2196 calBP 2182 - 2110 calBP	29.0 53.5 1.4 40.6		

注 (1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用。

(2) BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。

(3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の 68.2% が入る範囲) を年代値に換算した値。

(4) AAA は、酸・アルカリ・酸処理、HCl は酸処理を示す。

(5) 曆年の計算には、OxCal v4.4 を使用。

(6) 較正データーセットは、IntCal20 を使用。

(7) 較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1 桁目を丸めていない。

(8) 統計的に真の値が入る確率は、 σ が 68.2%、2 σ が 95.4% である。

寿で成長が遅い樹木であるため、伐採年代と樹心の年代値に差が生じる可能性があり（古木効果）、実際の年代値よりも古い可能性がある。

2 樹種同定

(1) 試料

試料は、年代測定で用いた第 1 号方形周溝墓の材 (No.125) と同一である。

(2) 分析方法

年代測定の際トリミングされた残渣を用いる。木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の各割断面を作成する。双眼実体顕微鏡や電子顕微鏡で、木材組織の種類や配列を観察する。木材組織の種類や配列の特徴を、現生標本や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

(3) 結果

結果はカヤである。以下に検出された種類の形態的特徴を述べる。

・カヤ (*Torreya nucifera Sieb. et Zucc.*) イチイ科カヤ属

軸方向組織は仮道管のみで構成される。年輪幅が狭い。仮道管内壁に対をなしたらせん肥厚がみられる。放射組織は柔細胞のみで構成される。放射組織は単列で、細胞高が低い(4~5細胞高)ものが多い。

(4) 考察

カヤは暖地に多い針葉樹で、緻密で強度があるが、成長が遅く大きな木材を得にくい。このため、彫刻や器具材として使われる。中近世以降でカヤが棺に用いられる例はほとんどないが、水湿に強い性質があるので、本来は棺に向く木材である。出土木製品用材データベース(伊東・山田編,2012)をみると、古墳時代以前では、カヤの棺材が散見され、古くはカヤの大木が自然に存在し、棺として利用されていたとみられる。

3 有機炭素・粒度分析

(1) 試料

試料は、第3号方形周溝墓の周溝内土壤9と18の計2点である。

(2) 分析方法

有機炭素はチューリン法、粒径組成はピペット法(土壤環境分析法編集委員会,1997、土壤標準分析・測定法委員会,1986)に従った。また、粒度分析(Wentworth区分)は、公文・立石編新版碎屑物の研究法(1998)、上杉(1971、1972)を参考に礫画分・砂粒子画分は篩別法、シルト以下粒子画分はピペット法で行った。また、粒径区分はWentworth(1922)に従った。以下に各項目の操作工程を示す。

・分析試料の調製

試料を風乾後、土塊を軽く崩して2mmの篩であるい分けをする。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉碎し、0.5mm篩を全通させ、粉碎土試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で4時間乾燥し、分析試料水分を求める。

・有機炭素

粉碎土試料0.100~2.000gを100ml三角フラスコに正確に秤りとり、0.4Nクロム酸・硫酸混液10mlを正確に加え、約200℃の砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2N硫酸第一鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量(Org-C乾土%)を求める。これに1.724を乗じて腐植含量(%)を算出する。

・粒径組成(ピペット法)

風乾細土試料10.00gに30%過酸化水素水を加え、熱板上で有機物を分解する。分解終了後、遠心洗浄を行い、脱塩した後、蒸留水約400mlと分散剤(4%ヘキサメタリン酸ナトリウム)10mlを加え、攪拌しながら20分間超音波処理を行う。この懸濁液を500ml沈底瓶に移し、蒸留水で500mlに定容する。

沈底瓶を1分間激しく振り、直ちに静置して所定の時間に5cmの深さから懸濁液10mlを採取する。採取懸濁液は蒸発乾固させ、秤量する(シルト・粘土の含量)。さらに、所定の時間が経過した後、沈底瓶から懸濁液を5cmの深さから10ml採取し、蒸発乾固させ、秤量する(粘土含量)。沈底瓶に残ったシルト・粘土はサイフォンを使ってすべて洗い流し、その残渣を乾燥・秤量する(砂含量)。これ

を $0.2\text{mm } \phi$ の篩で篩い分け、篩上の残留物を秤量する（粗砂含量）。これら測定値をもとに粗砂（ $2.0\text{-}0.2\text{mm}$ ）・細砂（ $0.2\text{-}0.02\text{mm}$ ）・シルト（ $0.02\text{-}0.002\text{mm}$ ）・粘土（ 0.002mm 以下）4成分の合計を 100 とする各成分の重量%を求め、国際法によって土性区分を行う。

・粒度分析（Wentworth 区分）

試料を風乾して $2\text{ mm } \phi$ 篩でふるい分ける。 $2\text{ mm } \phi$ ($-1.00\text{ } \phi$) 篩上粒子は水洗・乾燥させた後重量を測定する。一方、 $2\text{ mm } \phi$ 篩下粒子は 10.00g をビーカーに秤量し、蒸留水と 30% 過酸化水素水を加え、熱板上で有機物分解を行う。分解終了後、蒸留水と分散剤（4% カルゴン）を加え、攪拌しながら 30 分間音波処理を行う。沈底瓶にこの懸濁液を移し、往復振とう機で 1 時間振とうする。振とう終了後、水で全量を 1000ml にする。

この沈底瓶を 1 分間手で激しく振り、直ちに静置する。ピペット法に準じて所定時間に所定深度から粗粒シルト（ $0.063\text{mm } \phi$ (4ϕ) >、中粒シルト（ $0.031\text{mm } \phi$ (5ϕ) >、細粒シルト（ $0.016\text{mm } \phi$ (6ϕ) >、微粒シルト（ $0.008\text{mm } \phi$ (7ϕ) >、粘土（ $0.0039\text{mm } \phi$ (8ϕ) >）を 10ml 採取し、 105°C で 24 時間乾燥させた後、重量を測定し加積通過率（質量%）を求める。ピペット法終了後、懸濁液を 0.063mm 篩で水洗いする。 0.063mm 篩残留物を 105°C で 24 時間熱乾後、 $1.00\text{ mm } \phi$ (0ϕ)、 $0.5\text{ mm } \phi$ (1ϕ)、 $0.25\text{ mm } \phi$ (2ϕ)、 $0.125\text{ mm } \phi$ (3ϕ) 篩でふるい分け、各篩毎に篩上残留物の重量を測定し、加積通過率（重量%）を求める。重量計測は下 2 枠まで読みとる。ピペット法およびふるい分けで求められる加積通過率（質量%）から粒径加積曲線を描き、Wentworth(1922) の粒径区分毎の質量を算出する。なお、ふるい分けに用いた篩は内径 200mm 、深さ 60mm である。

(3) 結果・考察

分析結果を表 2、粒度分析の詳細な数値を表 3、表 4 に示す。表 4 では、Folk & Ward (1957) による粒度係数の評価も併せて示す。また、粒径累積加積曲線を図 2 に示す。

試料は両試料ともに土色が暗色であり、腐植含量は試料 9 で 4.91% と多い。試料 18 では 0.69% と少ない。

粒径組成（国際法区分）では、試料 9 では粗砂含量が 50% を超えるが、細砂含量、シルト含量が約 20% 含まれ、SL（砂壤土）に分類される。試料 18 は粗砂含量が 94.8% と特徴的に多く、他の画分が少ないとから S（砂土）に分類される。

また、粒径を 2 mm 以上の礫を含む、地質学的な視点（Wentworth 区分）からみていくと、分析試料の全体の傾向としては、淘汰度が不良で、試料 9 では非常に悪い、試料 18 では悪いに分類される。泥分が相対的に少なく、礫分が相対的に多いことから、両試料ともに中央値が細礫、平均値は試料 9 が極粗粒砂、試料 18 が細礫である。歪度は試料 9 で著しい正の歪みに、試料 18 でほぼ対称に分類される。尖度は両試料で突出に分類される。

次に粒度組成についてみていくと、両試料ともに礫含量が 50% を超え、さらに砂分が試料 9 では 30% を超え、さらに試料 18 では砂分が 40% を超える粗粒質

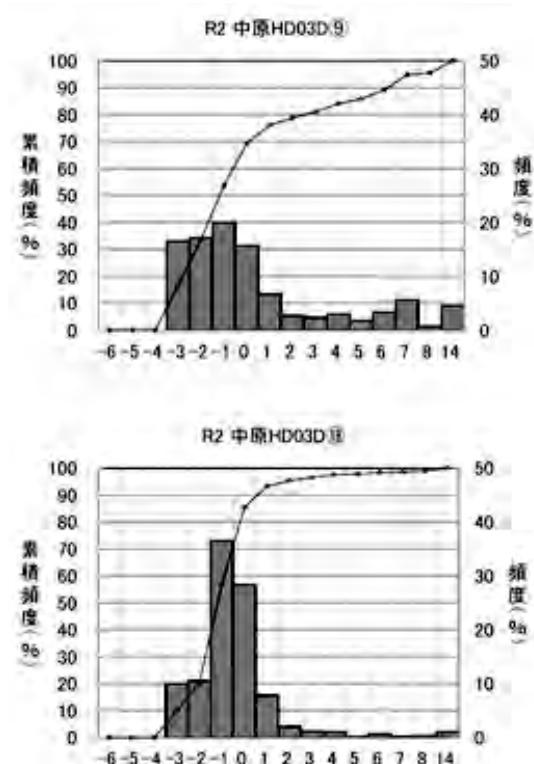


図 2 粒径組成

な試料群である。粘土含量についてみていくと、試料9では4.5%、試料18では1.1%と少ない。シルト含量は試料9で11.4%、試料18で1.3%と試料18で細粒分が特徴的に少ない結果である。

これらの結果から試料を比較すると、試料9では有機炭素量は多く、粒度組成では、粘土・シルト画分などの細粒分がやや多く、試料18では有機炭素量が少なく、粒度組成では粗砂や礫主体の粗粒分が多い。このように堆積物の性質が異なっていることから、堆積物の由来や堆積状況が両者で異なっていた可能性がある。

表2 有機炭素・粒度分析結果

試料名	土色	有機炭素 (%)	腐植 (%)	粒径組成				土性
				粗砂	細砂	シルト	粘土	
				(%)				
第3号方形周溝墓 9	10YR2/1 黒	2.85	4.91	50.5	22.1	22.8	4.6	SL
第3号方形周溝墓 18	10YR3/1 黒褐	0.40	0.69	94.8	2.7	1.6	0.9	S

注 (1) 土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修、1967）による。

(2) 腐植：有機炭素×1.724。

(3) 粒径組成：粗砂、細砂、シルトおよび粘土の合計を100とする重量百分率で表示。

(4) 土性：国際土壤学会法の三角図より求めた。

S… 砂土（粘土0～5%、シルト0～15%、砂85～100%）

SL… 砂壤土（粘土0～15%、シルト0～35%、砂65～85%）

表3 粒度分析結果（1）

	礫		砂					泥					
	中礫		細礫	極粗粒砂	粗粒砂	中粒砂	細粒砂	微粒砂	粗粒シルト	中粒シルト	細粒シルト	微粒シルト	
	-4～-3 φ mm	-3～-2 φ mm	-2～-1 φ mm	-1～0 φ mm	0～1 φ mm	1～2 φ mm	2～3 φ μm	3～4 φ μm	4～5 φ μm	5～6 φ μm	6～7 φ μm	7～8 φ μm	8 φ < μm
	16～8	8～4	4～2	2～1	1.00～ 0.5	0.50～ 0.25	250～ 125	125～ 63	63～ 31	31～ 16	16～8	8～3.9	3.9>
第3号方形周溝墓 9	16.6	17.2	20.0	15.7	6.7	2.7	2.4	2.9	1.8	3.3	5.6	0.7	4.5
第3号方形周溝墓 18	10.0	10.6	36.5	28.4	7.9	2.0	1.2	1.1	0.1	0.7	0.2	0.4	1.1

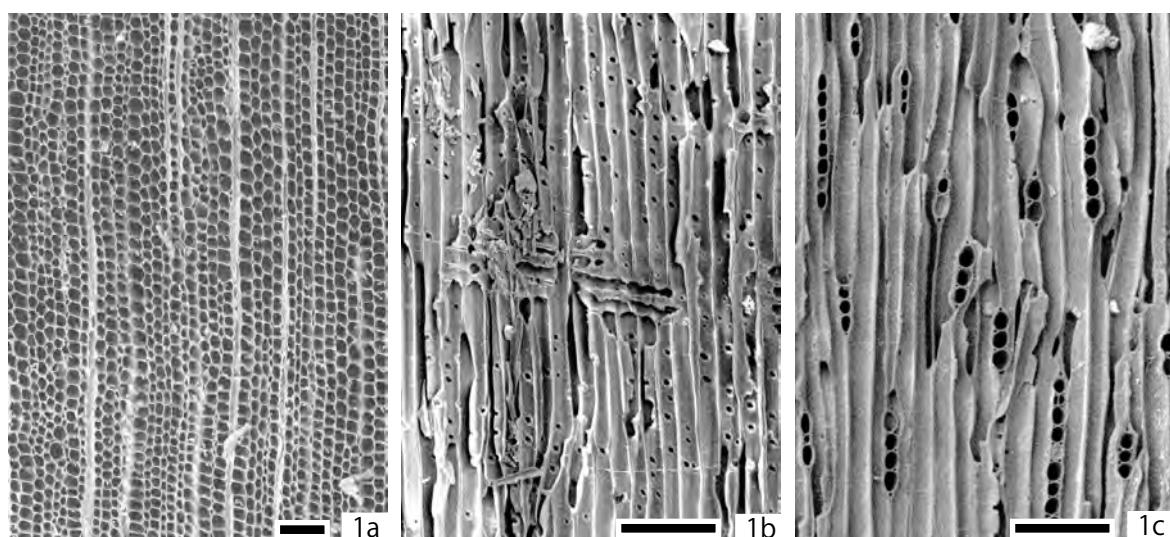
表4 粒度分析結果（2）

試料名	粒径区分							粒度係数								
	礫	極粗粒砂	粗粒砂	中粒砂	細粒砂	微粒砂	泥	中央値 (Md)		平均値 (Mz)		淘汰度 (s d)		歪度 (s k)	尖度 (s g)	
	gravel	very coarse sand	coarse sand	medium sand	fine sand	very fine sand	mud	(φ)	(mm)	粒径	(φ)	(mm)	粒径			
第3号方形周溝墓 9	<-1 φ	-1～0 φ	0 φ～1 φ	1 φ～2 φ	2 φ～3 φ	3 φ～4 φ	4 φ <	(φ)	(mm)	粒径	(φ)	(mm)	粒径			
第3号方形周溝墓 9	53.8	15.7	6.7	2.7	2.4	2.9	15.9	-1.18	1.27	細礫	-0.08	1.06	極粗粒砂	3.41	非常に悪い	
第3号方形周溝墓 18	57.1	28.4	7.9	2.0	1.2	1.1	2.5	-1.19	1.28	細礫	-1.22	1.33	細礫	1.40	悪い	
													0.51	著しい正の歪	1.34	突出
													0.05	ほぼ対称	1.44	突出

引用文献

- Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon,51,337-360.
- 土壤環境分析法編集委員会編,1997,土壤環境分析法.博友社,427p.
- 土壤標準分析・測定法委員会編,1986,土壤標準分析・測定法.博友社,354p.
- Fork,R.L. and Ward,W.,1957,Brazons river bar,a study in the significance of grain size parameters. J.Sed.Petrol,27,3-26.
- Friedman,G.M.1961,Distinction between dune, beach, and river sands from their textural characteristic. J.sed.Petrol,31,514-529.
- 林 昭三,1991,日本産木材顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載 I .木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
- 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載 II .木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.
- 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載 III .木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載 IV .木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載 V .木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久(編),2012,木の考古学 出土木製品用材データベース.海青社,449p.
- 公文富士夫・立石雅昭編,1998,新版碎屑物の研究法. 地学双書,29,地学団体研究会,399p.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修,1967,新版標準土色帖.
- ペドロジー学会編,1997,土壤調査ハンドブック改訂版.博友社,169p
- Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey, C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Sounthor, J., Turney, C., Wacker, L., Adolphi, F., Buentgen U., Capone M., Fahrni S., Fogtmann-Schulz A., Friedrich R., Koehler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., & Talama S.,2020, The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0–55 cal kBP). Radiocarbon, 62,1-33..
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編),2006,針葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification] .
- Stuiver M., & Polach AH., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon, 19, 355363.
- 島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.
- 上杉陽 ,1971,ふるいを用いた粒度分析法の吟味. 地理学評論,44,839-857.
- 上杉陽 ,1972,粒径頻度分布からみた風成砂・海成砂の諸特徴.第四紀研究,11,49-60.
- Wentworth,C.K.,1922,A scale of grade and class terms for clasticsediments. J.Geol,30,377-392.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification] .

図版1 炭化材



1.カヤ(No.125)

a:木口 b:柾目 c:板目
スケールは100 μm

写 真 図 版



調査区全景空撮（北から）



第1号方形周溝墓
検出状況（南東から）



第2号・3号方形周溝墓
検出状況（北東から）

P L. 2



作業状況（1）



作業状況（2）



第1号方形周溝墓 南溝
砂礫堆積状況（西から）



第1号方形周溝墓
全景（南西から）



第1号方形周溝墓 東溝
完掘（南から）



第1号方形周溝墓 西溝
完掘（南西から）



第1号方形周溝墓 南溝
完掘（西から）



第1号方形周溝墓 北溝
完掘（北西から）



第1号方形周溝墓 東溝
土層断面（南から）



第1号方形周溝墓 西溝
土層断面（南から）



第1号方形周溝墓 南溝
土層断面（東から）



第1号方形周溝墓 主体部
検出状況（西から）

P L. 6



第1号方形周溝墓 主体部
完掘（東から）



第1号方形周溝墓
土手状盛土残存状況（南東から）



第1号方形周溝墓
遺物出土状況



第1号方形周溝墓 東溝
遺物出土状況（南東から）



第1号方形周溝墓 東溝
遺物出土状況（近景）（1）



第1号方形周溝墓 東溝
遺物出土状況（近景）（2）



第1号方形周溝墓 東溝
遺物出土状況（近景）（3）



第2号方形周溝墓 主体部
完掘（南西から）



第2号方形周溝墓 東溝
完掘（北から）



第2号方形周溝墓 西溝
完掘（北から）



第2号方形周溝墓 北溝
完掘（西から）



第2号方形周溝墓 東溝
土層断面（北から）



第2号方形周溝墓 西溝
土層断面（北から）



第2号方形周溝墓 北溝
土層断面（東から）



第2号方形周溝墓 東溝
遺物出土状況（北東から）



第2号方形周溝墓 東溝
遺物出土状況（近景）（1）



第2号方形周溝墓 東溝
遺物出土状況（近景）（2）



第3号方形周溝墓
全景（南東から）

P L. 12



第3号方形周溝墓 東溝
完掘（北から）



第3号方形周溝墓 西溝
完掘（北から）



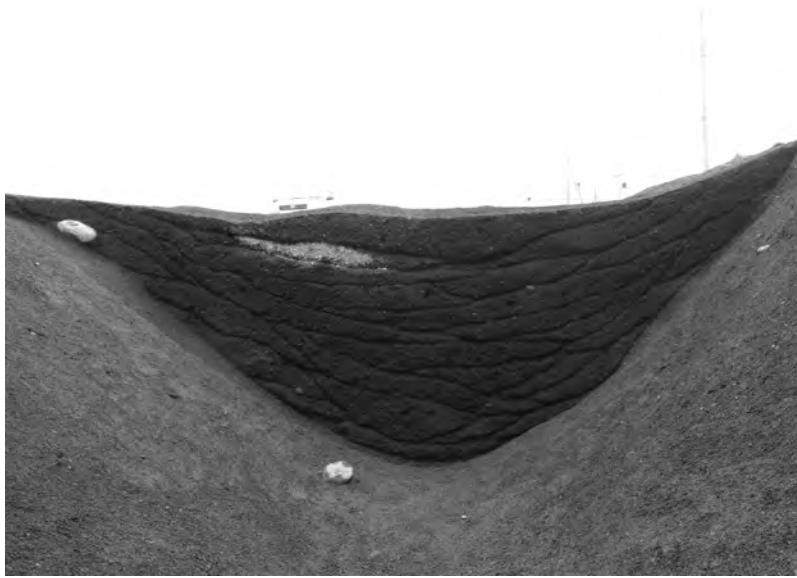
第3号方形周溝墓 北溝
完掘（西から）



第3号方形周溝墓 東溝
土層断面（北から）



第3号方形周溝墓 西溝
土層断面（北から）



第3号方形周溝墓 北溝
土層断面（西から）



第3号方形周溝墓主体部完掘
(北東から)



第3号方形周溝墓 北溝
遺物出土状況（1）(北西から)



第3号方形周溝墓 北溝
遺物出土状況（2）(西から)



第3号方形周溝墓 北溝
遺物出土状況(3)(南東から)



第3号方形周溝墓 北溝
遺物出土状況(近景)(1)



第3号方形周溝墓 北溝
遺物出土状況(近景)(2)



第3号方形周溝墓 北溝
遺物出土状況（近景）（3）



第2号墳 検出状況（北東から）



第2号墳 磯床検出状況



HD01-1



HD01-4

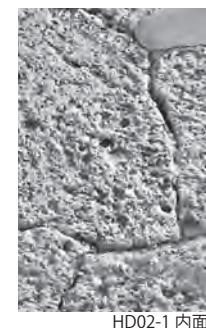


HD01-2



HD01-3

出土遺物（1）



HD02-1 内面

HD02-1



HD02-2



HD02-3

出土遺物（2）



HD03-1 内面



HD03-3



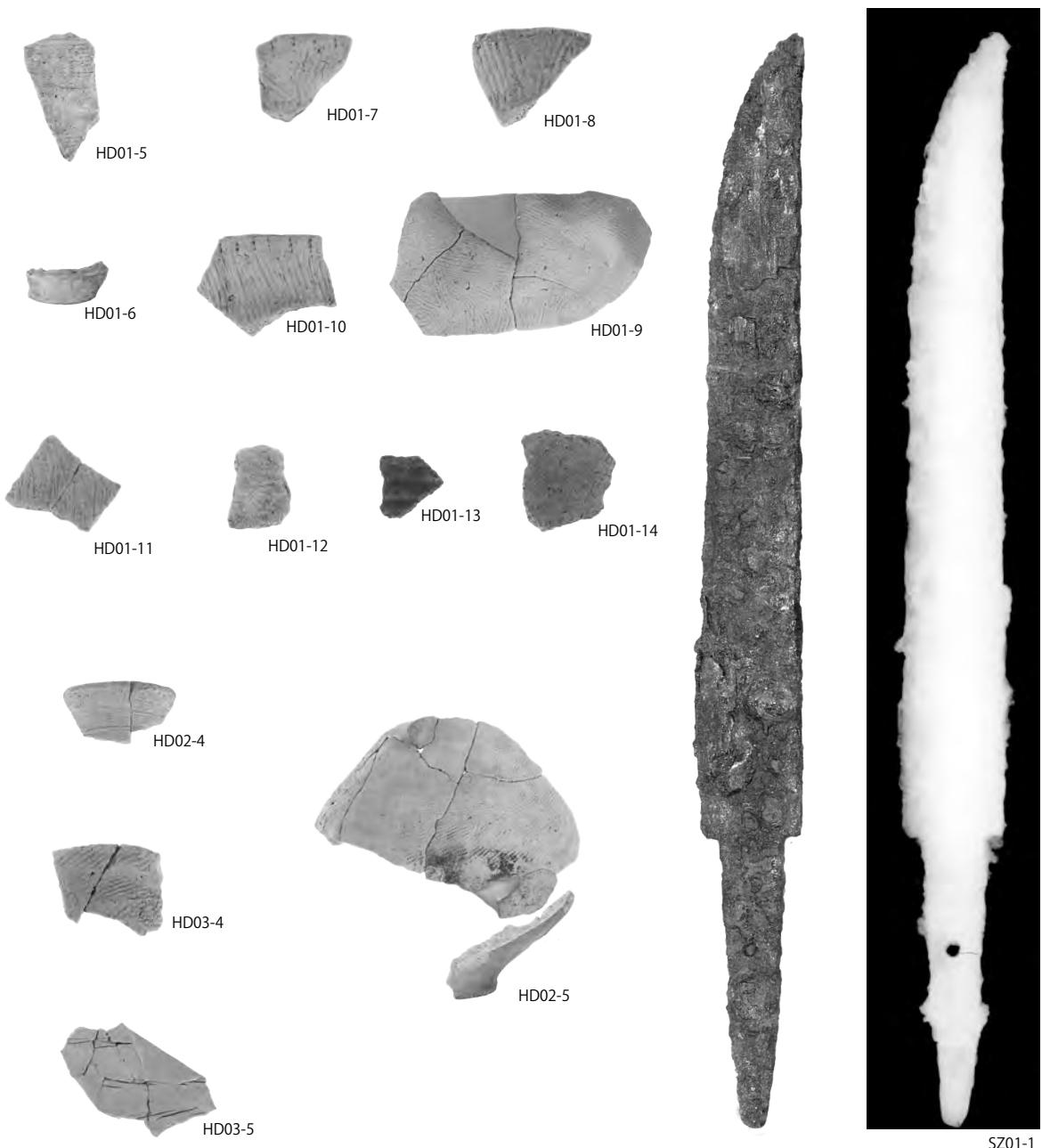
HD03-2



HD03-6

出土遺物（3）

P L. 20



出土遺物（4）

報告書抄録

沼津市文化財調査報告書 第126集

中原遺跡発掘調査報告書

新貨物ターミナル第1号緑地調整池築造に係る発掘調査
弥生時代・古墳時代編

令和5年2月20日 印刷

令和5年3月 3日 発行

編 集／沼津市教育委員会

発 行／沼津市教育委員会

沼津市御幸町16番1号

TEL(055) 931-2500(代)

印 刷／みどり美術印刷株式会社

